群 群 馬県 馬 民俗 県 教 調 查報 育 告書 委 員 第 十八 会 編 集

倉倒村の民俗

W K38241 G94

倉倒村の民以

群 馬 県 教 育 委 員 会 編群馬県民俗調査報告書第十八集

用なものに転落する運命を持っている。不用なものになった途端に、 で特別に大切にしようという気持を持たない。しかし、これらの民俗文化財は、我々の日常生活には欠くことのできない(あるいは欠 山あるので、 くことのできなかった)実用性をもったものである。また、一方では、この実用性の故に、 民俗資料といわれる文化財は、 特別に珍しいものとも感じさせないものである。我々はそこに実用的価値は認めても、芸術的価値を見出すことがないの 我々の日常生活に密着したものであり、 無用の長物として簡単に捨て去られてしまう。 すぐれた美しさを持つわけでもなく、また、 生活形態や生産方法などの変化により、 同様なものが沢 不

みが珍重されてきている現象があるがこれは決して喜ばしいことではない。 最近の社会生活や生産方法の急激な変化に遭遇して、多くの民俗資料が消滅して、珍しくなかった筈の民俗文化財がその一 部 の物の

形・無形の両面から総合的、 我々の先祖がその生活の中から生み出したこれらの民俗文化財は、 全体的に把握されることが必要である。 先祖の歴史を知る上で欠くことの出来ないものであり、 それは有

今回は倉渕村を調査地として選定し、調査を実施した。 本県においては、 この重要性にかんがみて昭和三十三年より、その緊急度に応じて調査地域を選定して記録作成をすすめてきた。

についても注目すべき調査結果が報告された。 れるものであり、 倉渕村は群馬県の西部に位置し、 道祖神については、 一部は長野県の軽井沢町に接した山村である。 その宝庫といわれている村である。 その他、 「産泰様」 この地区における「お死霊様」の信仰は特に注目さ の信仰、「おやおや」などの風習また民家

はじめ、 倉渕村当局及び地元地区の沢山の方々に深く感謝を申し上げる次第です。 群馬県民俗資料調査報告第十八集「倉渕村の民俗」を刊行するにあたり、 調査を担当された上毛民俗学会の会員の方々を

最後に、この報告書が広く県民のみなさまや学究の方々に御利用いただけることを心から願っております。

昭和五十一年三月

群馬県教育委員会

教

育長

山川武武正

群馬 ?県教育委員会で民俗調査を実施してきたの は 次 0 とお n であ

第 10 第9 第8 第7 第6 第5 第3 第2 4 口 П 口 口 П П П П П П 群馬郡榛東村佐波郡境町 勢多郡 吾妻郡 碓氷郡松井田 下久保ダム水没地 楽郡 野 郡 計六合村 東村 板倉町 野村 町 坂 (多野郡鬼 本 山 地区 石 町 昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭 和 37 年 和 和 和 和 和 和 和 33年 34 年

民俗調查実施地区 合村》 新治村 月夜野町 中之条町 第15回 * 恋 村 長野原町 沼田市 高山村 吾妻町 小野上村 第6回 第 倉 渕 村 第18回 利根村 第10回 伊香保町 第9回 松井田町 群馬町 前橋市 第12回 下仁田町 安中市 妙義町 高崎市 笠懸村 第17回 吉井町 南牧村 甘楽町 第2回上野村 第16回 藤岡市 中里村 太田市 鬼石町 第5回 第3回 館林市 明和村板 第7回 第14回

17 16 18 長期にわたる業績を認められ、、昭和38年度に民俗資料緊急調 口 和38年度に民俗資料緊急調査を実施し、 前橋市 群馬郡倉渕村 田 郡 最大量 調査の中心になって

ま

昭和43年度

和和和

50 49 48 年 年 年

和 和 和

和和

第 15 第 14 第 13 第 12 第 11

口 口 П 口 П

吾妻郡

蠕恋村

村

俗学会が柳田賞を受賞した。

なった。調査委員および編集分担項目は次のとおりである。 各地区で宿泊して調査を実施した。8月4日に中央公民館で報告を行 た。8月1日に調査員16名、担当者、 {査は昭和50年8月1日から8月4日までの3泊4日間で実施し 案内者等が倉渕村中央公民館で打合せを行い、直ちに分散して 倉渕村教育委員会教育長及び担

上野	朝岡紀	阪本	佐藤	土屋	丑木	池田	井田	阿部	根岸謙	近藤	都丸土	氏
勇	三男	英一	清	政江	幸男	秀夫	安雄	孝	一之助	義雄	九一	名
県立高崎工業高校教諭	県立高崎女子高校教諭	県立博物館学芸課長	県立前橋工業高校教諭	日本民俗学会会員	県史編纂室主事	県立盲学校長	前橋市立女子高校教諭	校長村田村立北小学	県立前橋高等学校教諭	前橋市立図書館長	見中学校長対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している対している<!--</td--><td>現職</td>	現職
沢・陣田・小倉長井・熊久保・亀	"	矢睦 ・中原・赤竹・ ・ 本・中原・赤竹・	権田・下平・鳴石	鍛冶屋・関沢・小高	"	石津·岩水·新屋敷	中尾·中郷·大谷戸	三二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二二		尾・土城谷戸・石上	保·上谷戸·相吉· 落合·明神·下久	調査地区
口頭伝承	人 の 一 生	有形民俗資料	総編集			衣・食・住	信仰	生産・生業	民俗知識	交 通 交 易	社会生活	編集分担
	野 勇 県立高崎工業高校教諭 長井・熊久保・亀 ロ 頭 伝	野 勇 県立高崎工業高校教諭 長井・熊久保・亀 口 頭 伝岡紀三男 県立高崎女子高校教諭 長井・熊久保・亀 人 の 一	野 勇 県立高崎工業高校教諭 沢・陣田・小倉 岡紀三男 県立高崎女子高校教諭 大睦 本・中原・赤竹・大陸 大陸	野 勇 県立高崎工業高校教諭 長井・熊久保・亀 ロ 頭 伝 本 英一 県立博物館学芸課長 桑本・木ノ下・梨本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・大人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人	野 勇 県立高崎工業高校教諭 沢・陣田・小倉 ロ 頭 伝 本 英一 県立博物館学芸課長 秦本・木ノ下・梨本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・中原・赤竹・有形民俗資本・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・大田・	野 勇 県立高崎工業高校教諭 沢・陣田・小倉 口 頭 伝 本 英一 県立博物館学芸課長 本・中原・赤竹・ 有形民俗資本・中原・赤竹・ 有形民俗資本・中原・赤竹・ 有形民俗資本・中原・赤竹・ 有形民俗資本・中原・赤竹・ 有形民俗資本・中原・赤竹・ 有形民俗資本・中原・赤竹・ 有形民俗資本・ 中原・赤竹・ 有形民俗資本・ 中原・ 中原・ 中原・ 中原・ 中原・ 中原・ 中原・ 中原・ 中原・ 中原	野 勇 県立高崎工業高校教諭 沢・陣田・小倉 口 頭 伝 町紀三男 県立首物館学芸課長 本・中原・赤竹・ 有形民俗資本・中原・赤竹・ 有形民俗資本・ 中原・赤竹・ 有形民俗資本・ 中原・ 大田・ 大田・ 大田・ 大田・ 大田・ 大田・ 大田・ 大田・ 大田・ 大田	野 勇 県立高崎工業高校教諭 沢・陣田・小倉 口 頭 伝 田 秀夫 県立首学校長 石津・岩水・新屋敷 衣・食・ 本 英一 県立前橋工業高校教諭 大陸 本・中原・赤竹・和形民俗資 本 英一 県立前橋工業高校教諭 大陸 本・中原・赤竹・和形民俗資 本 英一 県立高崎女子高校教諭 沢・陣田・小倉 人の一 町紀三男 県立高崎女子高校教諭 沢・陣田・小倉 人の一	野 勇 県立高崎工業高校教諭 川 安雄 前橋市立女子高校教諭 川 安雄 前橋市立女子高校教諭 川 下道・宮原 本 東一 県立前橋工業高校教諭 本 東一 県立前橋工業高校教諭 本 東一 県立前橋工業高校教諭 東京市・大谷戸 信 西紀三男 県立高崎女子高校教諭 東京・北ノ下・梨本・中原・赤竹・東京・県石 総編 本・中原・赤竹・東京・県石 総編 本・中原・赤竹・東京・県石 総編 野 勇 県立高崎女子高校教諭 県立高崎工業高校教諭 沢・陣田・小倉 日 頭 伝	野 勇 県立高崎工業高校教諭 川 奈夫 県立前橋高等学校教諭 三ノ倉・暖井 生産・生 田 安雄 前橋市立女子高校教諭 中尾・中郷・大谷戸 信 本 英一 県立前橋工業高校教諭 下道・宮原 衣・食・ 本 英一 県立前橋工業高校教諭 大陸 本・中原・赤竹・和形民俗資 本 英一 県立前橋工業高校教諭 長井・熊久保・亀 日頭 伝 野 勇 県立高崎女子高校教諭 沢・陣田・下平・鳴石 総編 東京高崎工業高校教諭 沢・陣田・小倉 日頭 伝	野 勇 県立高崎工業高校教諭 ボ・韓田・大谷戸・石上・交通 交通 交	野 勇 県立高崎工業高校教諭 川 会雄 前橋市立図書館長 尾・土城谷戸・石上 交通 全 上、上、公司 公司 公司<

酒井 正保 前橋市教育委員会社教 全 域 民 俗 芸 能 型井 正保 前橋市教育委員会社教 全 域 民 俗 芸 能		
主事	酒井	桑原
社教 全域 民俗芸	正保	稔
域域	主事前橋市教育委員会社教	助教授豊田工業高等専門学校
民民民俗芸	全	全
俗芸	域	域
		民
		家

のおよび話者など地元の方々に大変お世話になりました。記して謝意 事務局長、小板橋良平倉渕中教諭をはじめ、各地区長、老人クラブ等々 また、調査にあたって原田文助倉渕村教育委員会教育長、原田光男

凡例を兼ね、編集上の留意点を記す。

稔)、は主として同氏が調査·写真撮影·執筆した。 者は項目別に編集した。ただし、民俗芸能(酒井正保)、民家(桑原 調査員は調査地区の全項目について調査し、執筆した。編集分担

三、写真は調査時に調査員の撮影したものを主として使用した。各写 一、全体の編集は佐藤清、校正及び索引作成は岸栄、(県教育委員会文 化財保護課文化財保護主事)があたった。

真に撮影者氏を記した。 題字は倉渕村村長原田廉氏の手を煩わした。 昭和五十一年三月

群馬県教育委員会文化財保護課

話

1

查地 原 X 明

調

話

飯永飯飯上上下朝永追野野城 島井島島野野村香井川口口戸 また五 取 高野 神 谷 声 · 嶋石上· 一八 • 上谷 戸 . H 相 吉

亟ト根の平 大明明明明明明明明明明明 治三〇年 治三三 兀 年 年 一六月 九一 月 月 月 七日 九 日日 日 日 生生生生生生生生生生生

%治三二年 %治二二年 第治二四年 第治二四年 年年 五 月 五八一 八一八日日日

松五郎

一九五四四月月月月 月 日日日

五

かずみ

話調

正暖

治

月

并区

富新岡清三

沢井本水倉

英 友 正 太 雄 郎 雄

明明明明

治三二年

月月

八七三八日日日日

生生生生

月

查 地

新戸

郎嘉 明明 治三六年 月二三 月

一八

日

日

話調 査 地 中 大谷 . 中尾

相

治三五

月 月

日

H

生生

下下渡唐唐関関原富 田田田

細 尾 土

夫ばル郎

治三

治 兀 年 年 二月二〇日

明明明明明明明明明明明明 治三五九治二四 年 年 年 三月 八九一月月 月 二三日 五 日 日 日

治三三 治兰 治 四二年 兀 年 六月 五月 二月 ○ 一
日
日 五 日 生生生生生生生生生生生

山模平平田辺沢沢

太

1

重郎

富太郎

治三四 治 一四年 六月 七月二 日 日日

秋相下

話 調 杳 地

一石 津 ・ 下 鍛 石津屋

関

沢

小

高

Ш

田

地

.

戸戸堀塚松原津細 \mathbb{H} 田中 太一哉郎郎造

明明明明明明 治三二年年 第治三七年 月 六月一 〇日 一六日 〇日

〇 五 四月月 八月一 一 八 五 日 日 生生生生生生

七 " 石 蘭 話.

調 查地

花輪・

権 田 鳴

石

鉄火・

水有・上ノ久保・

高座

押

祐太郎 判四郎

治三六年

七月一

二日 二日

ク

年 年 年

月

生

二月

日 日

月

日

二月

一日

原原简宫宫住原原宫原住丸原三丸塚原伊塚

雄

一四年

月

九

日

一四年

三月

五日

桂太郎

四二年

五月

一 〇 日

松次郎

は

7

六

X

苸

石松佐塚丸丸平 越山山

久女子

誠源関 白 吾次造ス 明明明明明

井田藤

治四〇年

五月

七日

生生生生生

治三六年

七

月

日

兀

〇月

日

五月

日

太郎

明 治三〇年

五

月

日

生

治三九年 治三一 治三一 年 年 二月 一月 八 月 三日 〇日 三日 話調

查 地 石 津

塚柳新戸

一太郎

沢井塚

次郎

明明明明

治三三年

六 六月

〇七一八日日日日

生生生生

月

月

 $\frac{1}{0}$

栂チ

五 本丸 · 上 新屋

治二一

年

月二七日

敷

下道

原・

大平

.

村

調 查 地

桑本・

赤竹・

矢陸・月並

明明明明明明 明 明明明明 治二八年 治二八年 治二八年 治二〇年 治二五年 九 二月二二日 月 月 月一 月二〇日 九日 三日 四日

生生生

越 越

籴 良 太郎

平太郎市

治三六年 治三三年 治四 治三七年 年 五四月月 九 月 一九日 六日 五日 一七日 六日 生生 生生生生

和三郎

話

田田本下下谷田田下田谷山田井山越田 栄太郎 太郎

栄次郎 まの 明明明明明 大正 治二五年 治二九年 治三五年 治四四年 治二 治四〇年 治 治 七年 四年 兀 〇月 二月 一月一 七月 四月一 兀 月 月 五日 五日 六日 三日 五日 三日 七日 Ŧi. 日 日 生生生生生生生生生生生生生生生生

丸丸内塚 山山島越

久太シ政 五 大明明正治治

子茂ズ郎 大正 四三年 四〇 八年 五年 八月一 六 一 五 月 月 六日 六 六 七 日 日

生生生生

木ノ下・元三沢・梨本・ 堀之沢・上ノ山・坊峯・

2

水倉

明治四三年一明治二七年 一

一月二〇日生 五月一七日生

月

兀

日

伊佐雄

部

明治四〇年

三月

明治三五年一〇月二 明治四二年 明治二五年

二四日生 二日生

一〇月一

日

生 生生

五月

六日

明治三四年一二月一二日

生生

相

善百作啓次郎

全

萩下小鈴桜塚中原

倉渕村、 助 (倉渕村教育委員会教育長) 第一区~第八区々長

板橋 木井越 島 千四松 良 生 郎正博 平 (倉渕村教育委員会教育委員長) (倉渕村立倉渕中学校教諭) (倉渕村教育委員会教育委員) (倉渕村教育委員会主任) (倉渕村教育委員会主任社教主事) (倉渕村教育委員会事務局長) (倉渕村教育委員会教育委員)

話調 原原中岡 沢 本 田 大島・小倉 林三郎栄 保太郎 宏太郎 久三郎 トミエ X 明治二五年一〇月一三日生明治二三年 九月一八日生 明治三四年 明治三四年 明治三一年 亀沢 七月一七日 陣田・ 七月一三日 一月一〇日 本田

生

水沢沢野

原戸池阿 田塚田津 好俊公光 保代 (倉渕村中央公民館長) (倉渕村教育委員会主事補 (倉渕村教育委員会主事

(倉渕村中央公民館主事)



三 ノ 倉・糀 屋・鍛 冶 屋 全 景





(撮影 小板橋良平)

三ノ倉・落 合 道 祖 神

(撮影 小板橋良平)



全 透 院 金 堂(撮影 小板橋良平)



(撮影 小板橋良平)

椿



川原の諏訪神社



宮原の浅間神社



岩 下 の 洞 窟 観 音 (撮影 小板橋良平)



川原・諏訪神社の金精様 (撮影 小板橋良平)



浅 間 神 社 の 百 庚 申 (撮影 小板橋良平)



権 田 元 村 の 道 祖 神 小 屋 (撮影 小板橋良平)



道 祖 神 小 屋 (石津・七ツ石) (撮影 小板橋良平)



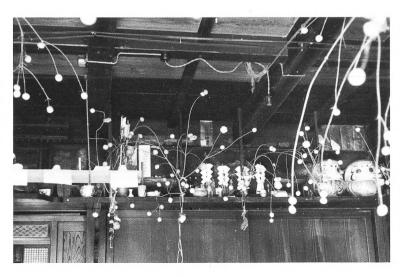
三 ノ 倉 暖 井 ど ん ど ん 焼 (撮影 小板橋良平)



(撮影 小板橋良平)水沼神社・獅子舞の笠牟

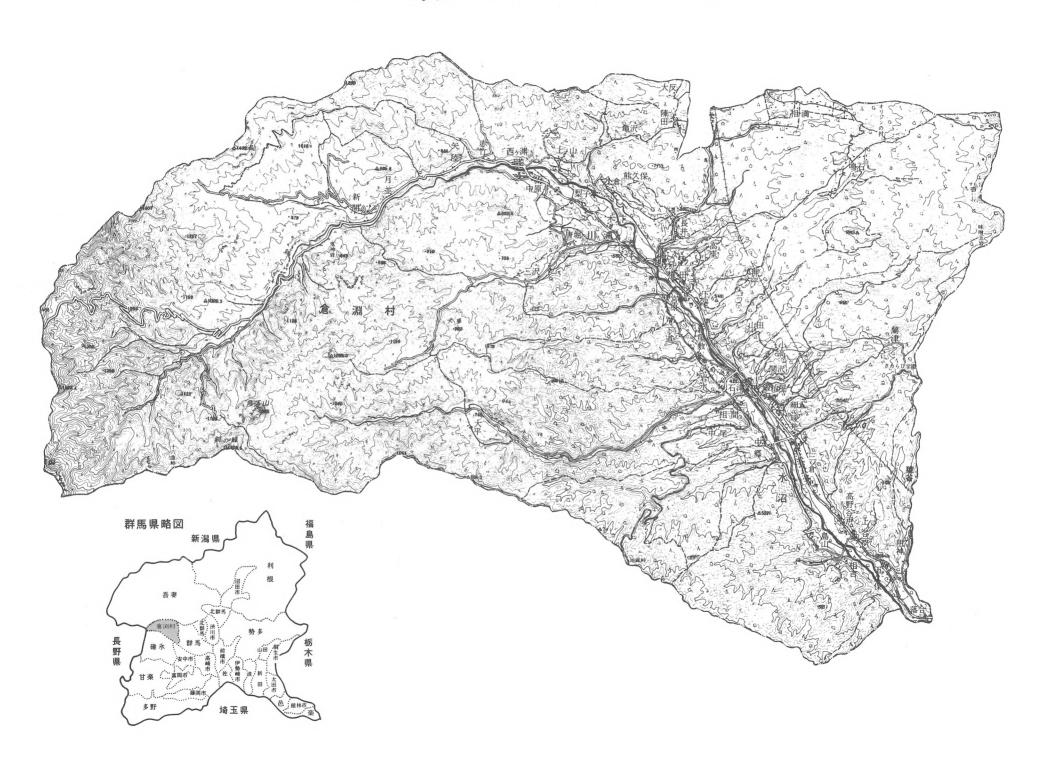


(撮影 塚越真一)権田地区の正月飾り



(撮影 塚越真一)ま ゆ だ ま 飾 り

倉淵村管内図



É	TIT
浂	
木	1
0)
E	E
存	分
E	=
7	Ż

			水祝い・おやおや ゼ	産泰様・産泰講	五、榛名神社の神楽 ^	四、族 制 五	二、暮しの変化 四	一、民俗の特徴 三	一、はじめに	着渓木の巨俗根権	到寸つ弓谷既見	二、倉渕村の歴史	一、倉渕村について	着渓木の根 種	到す) 死見	查協力者	* 查地一覧	是没有地区		絵 写 真	で		7	信労 木 ′) 目 作
稲	二、畑 作	はじ	A. D. A. Lind	生産・生業	(三) 飲み水	(二) 間取り	家屋	三、住 居	三 特別の日の食事・その他	□ 副食・食用動植物・保存食⋅・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	○ 食 制	二、食 習	(六 染色・機織	履	四 髪形・化粧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		(二) 普段着・作業着	○ 着物・裁縫	一、衣 服	に ::	1	衣・食・主		7

	五、家族生活	四、講・村の雑		共有地・共同作業		会	生 舌	その他	数 理数	予 兆	禁	二、躾 け	まじない(呪)	民間医療	民俗知識	60000000000000000000000000000000000000	村に来た行商と遊芸人	交 易		説			諸職と労働慣行	畜 産		養 蚕	四、山 樵
(二) 生児儀礼) 妊娠	一、誕 生	人 <i>の一</i> 生		田 その他の仏教信仰	四 地蔵信仰	(三) 薬師信仰	(二) 観音信仰	□ 村の寺院	四、仏教民俗	(三) 怪 異	口 つきもの	○ 分	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	化 小祠類		伍 屋内の神 0	四 屋敷内の神	(三) 山の神仰	□ 榛名と峠(熊野)の信仰・・・・・・・・・・・・	○ 講	二、民俗信仰	□ 神社の別当	□ 供守神とむらの諸神 穴	一、神社祭祀	Ti du	

六 月 二 月 二 二 十 月 二 二 十 月 二 二 十 月 二 二	元 元 元 元 元 元 元 元 元 元		(四) 嫁入り
四、その他	四、特殊な間取	三、椿名神社の太々神楽	五、諺・謎・その他 二、 工、 番 工 番 工 カ 工 カ 工 カ 工 カ 工 カ 工 カ 工 カ ス <t< td=""></t<>

、倉渕村について

馬郡榛名町に接している。に、南は碓氷郡松井田町及び安中市に接し、東は榛名川をへだてて群に、南は碓氷郡松井田町及び安中市に接し、北は吾妻郡吾妻町及び長野原町沢町、群馬県吾妻郡長野原町に接し、北は吾妻郡吾妻町及び長野原町倉渕村は群馬県の西部に位置し、西端の一部が長野県北佐久郡軽井

が散在する。村の中央を西から東に烏川が流れ、この両側の段丘上に耕地と集落

な関係があり、山とともに生きてきたと言える。(総面積の八十七パーセントが山林である。この村の住民は山と密接

斜地にあるので、大規模な農業経営は不可能である。農業は総耕地面積の七十五パーセントが畑で、その畑も殆んどが傾

加しつつある。ので、林業、商工業の労務者を兼ねていた。現在はこの兼業農家が増ので、林業、商工業の労務者を兼ねていた。現在はこの兼業農家が増行って現金収入を得るが、それだけでは生計を営むことは困難である農家の多くは、夏は耕地を耕し、自家食糧を獲得し、或は、養蚕を

立した。この倉渕村地区が今回の民俗調査の対象地域である。戦後、昭和三十年に倉田村と烏渕村とが合併して現在の倉渕村が成倉田村となり、水沼村、岩氷村、川浦村が合併して烏渕村となった。の諸村に分れていたが、明治二十二年に三ノ倉村と権田村が合併して明治以前には、この地区は三ノ倉村、権田村、水沼村、川浦村など

一、倉渕村の歴史概観

れている。
た。その後、村内の各地で二十数ヶ所に及ぶ繩文時代の遺跡が確認さた。その後、村内の各地で二十数ヶ所に及ぶ繩文時代の遺跡が確認さ発見された長井敷石住居跡は繩文時代後期の遺跡であることが判明し倉渕村の歴史は繩文時代からはじまる。昭和二十八年、開田工事中

るのは中世以後である。歴史の連続性が確認されているが、本村の歴史が文献的に明らかにな正れに続いて、弥生時代の遺跡、古墳時代の遺跡も多数発見されて、

説にまつわる遺跡も残っている。直実の愛馬、権田栗毛を生んだのは当村の権田牧場だとされ、この伝恵実の受馬、権田栗毛を生んだのは当村の権田牧場だとされ、この伝関連した伝説が残っており、それにもとづく遺跡がある。また、熊谷中世の倉渕村に関しては、源頼朝の浅間東麓、三原野での巻狩りに

で上杉憲政の配下となり、長野兼業の管轄するところとなった。は木部道全なるものの知行をうけていたが、その後、上杉憲房、次いとして、その支配下にあったことなどがわかる。この時代の倉渕地区などがあり、それによって、三ノ倉地域が榛名山(榛名神社)の寺領文献としては、室町幕府の管領の出した執達書や足利持氏の安堵状

となった徳川家康の家臣、松平五左衛門の時に栗崎城は廃城となった。城は多くの武士が代るがわる支配した。小笠原幡磨守の後、その城主氏一時支配したが、戦国の激しい推移の中で三ノ倉の地にあった栗崎長野氏の滅亡の後は、武田信玄の配下である大戸城主であった浦野

工戸時代には松平近巨が三ノ倉の領主となり五千五百石を領した江戸時代には松平近巨が三ノ倉の領主となり五千五百石を領した正戸時代には松平近巨が三ノ倉の領主となり五千五百石を領した

倉渕村の民俗概観

―― 今後の研究課題を含めて

じめに

は

転々とした。
「「大学では、「大学では、「大学では、「大学では、「大学では、「大学では、「大学では、「大学では、「大学では、「大学では、「大学では、「大学では、「大学では、「大学では、「大学では、「大学 に こう に で かい こう に いい こう に

いうことをいいたいからである。への関りが、筆者の人間形成にいかに重要な役割りを果しているかと何故こんな個人的なことを書くかといえば、そうした村々での民俗

た違った人間形成をしたであろう。イメージを形成する。善悪はともかく、筆者が都会で育ったなら、ま事」への参加、挙げていけばきりがないが、それらが「ふるさと」のみながらの世間話、耳を傾けた年寄り達の話)、祭りその他の「民俗行政隣で交互に風呂をわかして呼び合う「貰い風呂」の風習(茶を飲近隣で交互に風呂をわかして呼び合う「貰い風呂」の風習(茶を飲

触れる「おやおや」の体験も忘れ得ない。焼き、天神講と五目飯、子供たちの遊びなど思い出は尽きない。後に榛名神社の祭典、坂下の子育て地蔵や水沼の観音様の縁日、道祖神

一、民俗の特徴

群馬郡倉渕村は、烏川を中にして分れていた群馬郡倉田村と碓氷郡

旗本領であった。この五つの大字は江戸時代の村である。三ノ倉は天領であり、権田はこの五つの大字は江戸時代の村である。三ノ倉は天領であり、権田はと権田の大字に分れ、鳥渕村は水沼、岩氷、川浦の三大字であった。鳥渕村が、昭和三十年に合併してできた。合併以前、倉田村は三ノ倉鳥渕村が、昭和三十年に合併してできた。合併以前、倉田村は三ノ倉

などから、一つの「倉渕文化圏」が強く意識される。あるかも知れないが、後で詳述する「産泰様」「道祖神」「お死霊様」ないと考えてよい。川上と川下、宿場とその周辺地域に幾分の差異が民俗をみた場合、こうした行政上の区分や変化は、殆ど影響してい

る。 定着性、持続性である。しかもそれが全域に行き渡っていることであったの調査で強く感じたのは、倉渕村における文化―特に信仰面―の

ている。大部分は半農であったようだ。沿いの家々に門がなく、また間口が広いことが、それを如実に物語っな人達が往来した。三ノ倉、権田は宿場の役割りを果している。街道などと呼ばれ、草津の湯治客、行商、旅人、遊芸人など、多数の様々をどと呼ばれ、草津の湯治客、行商、旅人、遊芸人など、多数の様々を消析の幹道は、近世までは中山道の脇往還、信州街道、草津街道

合には、そのいずれにもうまく当てはまらない。錯綜するかのいずれかの形をとるのが普通である。しかし倉渕村の場は捨て去られるか、古いものが新しいものを拒絶するか、両者が重層、の新しい文化の波は流入したであろう。新文化に触れると、古いもの松井田・安中方面、高崎・前橋方面、さらには吾妻方面からの、種々

その理由は何か。筆者は、山の起伏がなだらかで、河岸段丘もかな

変動し易い大きな宿場町ではなかった。はいっても脇往還であり、毎日数知れぬ人々がめまぐるしく出入する、り広い面積を持った、街道沿いの山村であったからだと思う。街道と

ういう特徴点は出てこない。 山が急峻で谷深い袋小路の聚落であったり、平野部の村落では、こ

(本の後問題点に触れていきたい。 をの後問題点に触れていきたい。 をの後問題点に触れていきたい。

二、暮しの変化

る。 電者の手許に、昭和十六年三月の権田尋常高等小学校の卒業記念ア の手許に、昭和十六年三月の権田尋常高等小学校の卒業記念ア の手許に、昭和十六年三月の権田尋常高等小学校の卒業記念ア

行われたのもその頃であった。であったことがよくわかる。校庭の片隅に炭焼き竈が作られ、実習が人々の教育への要請が、農家の後継者養成であり、その主婦の育成

行われていない。戦前には街道に面して大きな炭小屋があり、炭俵を現在、養蚕をする農家は、一部開拓地を除いて、殆どなく、炭焼きも藁草履、綿入れ半纒、真綿の首巻きも、もう過去のものになった。

たち。排ガス規制とは隔世の感がある。満載したトラックが走った。そのガソリンの臭いを喜んで嗅いだ子供

いであった。昭和三十五、六年からの大きな変化である。時、皮を剝いでおき、それで葺いたものだが、寿命は長くて六年くらている。かつては杉皮葺きが大部分であった。杉丸太をタマ切りする倉渕村の県道沿いの家並みをみると、屋根はトタンか瓦葺きになっ

示している。

示している。

がつては、田圃に大きなクズ(落葉)小屋があり、時季になると楢がつては、田圃に大きなクズ(落葉)小屋があり、時季になると楢がつては、田圃に大きなクズ(落葉)小屋があり、時季になると楢がつては、田圃に大きなクズ(落葉)小屋があり、時季になると楢がつては、田圃に大きなクズ(落葉)小屋があり、時季になると楢がつては、田圃に大きなクズ(落葉)小屋があり、時季になると楢がつては、田圃に大きなクズ(落葉)小屋があり、時季になると楢がつては、田圃に大きなクズ(落葉)小屋があり、時季になると楢

草刈り場もすでになく、杉が植林されている。秋に草を刈っておき、

冬になると馬で運んで、その飼料とした。

は自宅で食べる程度にしか作らなかった。大きな変化である。市場に出すようになったし、茗荷の生産も盛んである。それまで野菜十年くらい前から、トマト、キュウリ、インゲンを大量生産して、

数年前から、田植え、稲刈りが、機械植え、機械刈りになってきて木をよく記憶しているが、生業化したのは最近のことである。シイタケ栽培は以前から行われており、筆者も杉林中におかれた原

羅されている好著である。参照されたい。に「ふるさとの遊び」(好日社)がある。かつての遊びの大部分が、網ー子供たちの遊びについては、すでに丸山知良、阪本英一両氏の共著

こでは、その本に記載されていない倉渕地区の遊びについて一寸

触れてみたい。

コイ。」と唱えて遊んだ。
コイ。」と唱えて遊んだ。
コイ。」と唱えて遊んだ。
はのかまえたトンボを糸で結わえ、逃げられない程度の重石をつけたはつかまえたトンボを糸で結わえ、逃げられない程度の重石をつけたはつかまえたトンボを糸で結わえ、逃げられない程度の重石をつけたはつかまえたトンボを糸で結わえ、逃げられない程度の重石をつけたはつかまえたトンボを糸で結わえ、川端で待ちかて雄を何匹も捕獲するのである。雌の胴を糸で結わえ、川端で待ちかて雄を何匹も捕獲するのである。雌の胴を糸で結わえ、川端で待ちかて雄を何匹も捕獲するのである。雌の胴を糸で結わえ、川端で待ちかて雄を何匹も指獲するのである。雌の胴を糸で結れないるといる。

文学論」―二二八頁、二九八頁~三一九頁―)その背景に「招魂」の深い意味が存在していた。(藤野岩友先生「巫系も何らかの意味があったのかも知れない。螢狩りの「螢来い」の歌は、あったらしい(折口信夫全集第十五巻二四七頁)から、この唱え言にあったらしい(折口信夫全集第十五巻二四七頁)から、この唱え言にトンボは古く白鳥と同じく魂を運ぶものとして意識された時代が

土記この情でである。(柳田国男集二十一巻、「こども風の信仰行事が残っているのである。(柳田国男集二十一巻、「こども風の信仰行事が残っているのである。(柳田国男集二十一巻、「こども風いと思っている。子供の遊びとはいっても、その中に例えば「鬼ごと」、が、子供のたわ言として片づけるのではなく、今後広く調査してみたが、子供のたわ言として片づけるのではなく、今後広く調査してみたが、子供のたわ言として片づけるのではなく、今後広く調査してみたが、子供のたわ言としているのである。

まだいるそうである。れないのであろう。県道をはずれた水有、押平にはオオクマトンボがれないのであろう。県道をはずれた水有、押平にはオオクマトンボがなった。小さな清流を好むヤゴ(幼虫)にとって、水の汚染は耐えき オオクマトンボやその他のトンボも、もう県道沿いではみられなく

クキ、ハヨはまだいるが、薄ぎたないという。いたものだが、今では、水底はみえないし、カジカもいなくなった。相乗作用であろう。かつては、スイメンを使って、ヤスでカジカを突鳥川の水も白濁して、汚染がひどい。洗剤、農薬、砂利採取などの

子供たちと小昆虫(テッコハッコ、 土グモ、オケラなど)との関係

たり、角と角とをかみ合わせて遊んだ。 がったオガ屑を敷き、黒砂糖を与えて飼育した。背中を叩いて怒らせ総称したように記憶している。小穴をいくつもあけたボール箱に、しイタ(黒色で小さくて薄い)などといっている。これらの雌はブタと中に背ノウがある)、ノコ(ノコギリの刃に似たギザギザが角にある)、中に背ノウがある)、ノコ(ノコギリの刃に似たギザギザが角にある)、は深いが、クワガタはその中の王様である。これは今でも変りない。

三、族制

その家があるかぎり続くもので、本家、新宅の関係は変らない。」「地を同じ意味に使うこともある。」「分家した家は、地分けとして、家代々る。」「イッケは本家分家を総称した名称であり、マケとコーチ(部落)家を指し、マケは同姓でも古くなってあまり親しくない家のことをい家を指し、マケは同姓でも古くなってあまり親しくない家のことをいるのは同姓全部をいい、ヒトマケの中に二つ以上の系統のあるとき、そのは同姓を昔はマケといっていたが、今はイッケという。」「マケというでは、地分けなどは、地域によってかなり混乱がみられる。マケ、イッケ、地分けなどは、地域によってかなり混乱がみられる。

る家をいう。」 分けは結婚式の時など上座に坐る家で、その土地に古くから住んでい

る。 こうした関係に、行政的な隣保班などが加わるから、ややこしくな

きたい。て、吾妻町坂上地区の例が非常にすっきりしているので、報告しておて、吾妻町坂上地区の例が非常にすっきりしているので、報告しておどうしてこうなったかは今後の課題であるが、考える手がかりとし

を続けていくと、田畑などがだんだん小さくなるので今はやらない。」かとは、本家、新宅とそれぞれのマケを総称した場合にいう。地分けとして独立する。マケがいくつか集まって、それをイッケと呼ぶ。イッる。そしてその家から地分けされた新宅は最初はそのマケに所属してるのでそういう。ある家があり、そこに血縁的なマケが構成されているのでそういう。ある家があり、そこに血縁的なマケが構成されているのでそういう。ある家があり、そこに血縁的なマケが構成されているのでそういう。ある家があり、そこに血縁的なマケが構成されているのでそういう。

四、椿名神社の神楽

芸能」が、ここでも滅びの一歩手前である。

意欲がない訳ではない。 権田からも三月十五日には見学にくる人達があり、その復活に全くは県や市の補助なりで、何とかならないものだろうかといわれている。は、消滅させるのは残念である。できれば、保存会を作るなり、またま、消滅させるのは残念である。できれば、保存会を作るなり、この静野喜美雄氏は、この神楽が何時頃始まったかよく知らないが、と

五、産泰様・産泰講

る。 倉渕村には産泰様が非常に多く、産泰講が盛んで今でも行われてい

般的に産泰信仰が普及している例はない。 遠隔地においても、いつも報告されているところであるが、これ程全今まで十数年続けられて来たこの調査で、水上や嬬恋というような

6

多くは石宮である。小高の産泰様のように、村鎮守的な社になっている場合もあるが、

もすでに行われなくなっているが、講は倉渕村に生きている。とって違うが三月二十八日が多い。産泰本社の底抜け柄杓も、産泰講とっておいて、産気づくとそれを点して、燃えつきるまでに生まれをとっておいて、産気づくとそれを点して、燃えつきるまでに生まれをと名を変えたところもあり、女性達の娯楽の一つになっている。か会と名を変えたところもあり、女性達の娯楽の一つになっている。か会と名を変えたところもあり、女性達の娯楽の一つになっている。か会と名を変えたところもあり、女性達の娯楽の一つになっている。か会と名を変えたところもあり、女性達の娯楽の一つになっているが、講は倉渕村に生きている。

鳥屋正雄 (大正十五年生)、

の諸氏だけである。伝統ある

「民俗

で会食をする。 で会れて神に供えるもの)を供えてから宿め、 でっている。 ここの講は、二月の適当な日を決めて、 の各所から、諏訪様、不動様などを集めたものだというが、産泰様以 内には六基の石宮があり、全てに年号が刻まれている。以前、地域内

手がかりとなるからである。とれが産素本社の信仰を知る上でのなどを今後精査する必要がある。それが産素本社の信仰を知る上での地区の産素信仰定着の年代を知る一応の目安にはなる。全村域の石宮政四年(一八二一)の銘のあるものがそれであろう。この年号は倉渕政四年(一八二一)の銘のあるものがそれであろう。この年号は倉渕地元の人に確認してもらえなかったが、オミキスズの存在から、文

の支持を得るようになったのか、まだ確かではないのである。というような酒落た、むしろ出来すぎた名称で、安産の神として人々実のところ、前橋市上大屋町鎮座の産泰神社が、何時頃から、産泰

後自分で確めたいと思っている。
を素様が、前橋城主酒井雅楽頭の奥方の難産を救ったというので、
を真自筆の泰納額が宝物として存在していると書かれている。精査しに変えたという伝承があり、さらには荒砥村誌(一四〇頁)には、雅酒井氏の特別の庇護を受け、社殿を南向きから前橋城の方向(西向き)産泰様が、前橋城主酒井雅楽頭の奥方の難産を救ったというので、

たのは、何代目の雅楽頭であったのか。雅楽頭に任ぜられるのが例となっており、産泰様に最初に関りを持っは、九代、百五十年にもおよんでいる。酒井氏は二代城主忠世から代々て以後、寛延二年(一七四九)に姫路に転封するまで、酒井氏の治世酒井重忠が、慶長六年(一六〇一)に川越から移って前橋城主になっ

長したのも事実である。とれを人々が信ずるまでに産泰信仰が大きく成じたのは事実である。それを人々が信ずるまでに産泰信仰が大きく成雅楽頭に関する歴史的な真偽は別として、人々がそういう伝承を信

うであろう。縁起はさらに縁起を呼ぶものである。宣伝も大きかったろうし、奇抜ともいえる「底抜け柄杓」の縁起もそあって、流行的に人々の中に浸透ということは考えられる。神社側の受けるのに充分すぎる契機となるであろうが、とにかく何かの契機が雅楽頭の伝承が歴史的事実だとすれば、それだけで、人々の支持を

推察できる。 推察できる。 一四〇頁)に「古今の棟札奉再建産泰大明神宝暦十三癸 をできる。 一四〇頁)に「古今の棟札奉再建産泰大明神宝暦十三癸 をできる。 一四〇頁)に「古今の棟札奉再建産泰大明神宝暦十三癸 をできる。

仰」はそれ程古いものではないと断言してよい。といかくもっと精査した上で報告できないのは残念だが、「産泰信

る。色彩を深めていき、ある契機があって産泰神社となったとは考えられ色彩を深めていき、ある契機があって産泰神社となったとは考えられ石に対する信仰があり、そこに何かの折に社ができ、産土的、鎮守的原初的な信仰としては、神社裏の岩石群に注目すべきである。奇岩

いずれにしろ、今後の課題である。

六、水祝い・おやおや

名遣いで表記されているので、筆者が改めた。)るが、ここに全文を引用しておきたい。(原文は旧漢字、片仮名、旧仮意義があり、今後活字になる可能性も考えられないので、一寸長くな戦前の碓氷郡鳥渕村郷土誌に「水祝い」の記事がある。資料として

水況

しが、現今は赤竹以西に存するのみ。その概要を記述せば左のごとし。婚姻に関する水祝いと称する奇習あり。 右は村内一般に行われたり

正月十四日の夜、郷中一戸一人ずつ礼服着用にて集合し、祝樽に頭正月十四日の夜、郷中一戸一人ずつ礼服着用にて集合し、祝樽に頭正月十四日の夜、郷中一戸一人ずつ礼服着用にて集合し、祝樽に頭正月十四日の夜、郷中一戸一人ずつ礼服着用にて集合し、祝樽に頭正月十四日の夜、郷中一戸一人ずつ礼服着用にて集合し、祝樽に頭正月十四日の夜、郷中一戸一人ずつ礼服着用にて集合し、祝樽に頭正月十四日の夜、郷中一戸一人ずつ礼服着用にて集合し、祝樽に頭

とです。 とでは、かくて大勢は婿を饗応すべく、定めたる家に至り、手桶に水を湛と、かくて大勢は婿を饗応すべく、定めたる家に至り、が がなの濡る、を憚ることなし。(古は河にて水をかけたりと云う。)か ので、前年の祝われたるもの、相伴として、まずその門を通過し、婿 をで、前年の祝われたるものを道路の両側に置き、婿の来るを待つ。婿来 と、かくて大勢は婿を饗応すべく、定めたる家に至り、手桶に水を湛

違の点あり。 右は古酉ヶ渕に行われたる式なり。今は赤竹以酉にて行う。やゝ相

摘され、道祖神と男根との緊密性について言及されている。と多野郡万場町小平の「水祭り」(オンマラ様とも呼ぶ)との類似を指萩原進氏は夙に「郷土芸能と行事」(三〇二頁)において、この行事

る。これは女陰を意味している。問答をし、「庭石が欲しい」という家の人に、若い衆が庭石を持ってく紙と一緒に、前年結婚した家に持ち込む。羽織、袴で迎えた家の者と員がオッカドの木で作った男根に水引きをかけて、「百万両」と書いた「水祭り」とは、やはり正月十四日に行われる行事である。青年団

その後、男根は床の間に飾られ、酒宴となる。座敷が果てると男根

はどんど焼きで燃される。

「籠祝い」ともいう。俗―群馬県民俗調査報告書第九集一五四頁~一五五頁―)ここでは、俗―群馬県民俗調査報告書第九集一五四頁~一五五頁―)ここでは、ところで、「水祝い」は松井田町でも行われていた。(松井田町の民

年間に嫁をもらった家に繰り込む。(嬰児籠)のような籠にヌルデの男根(オキンマラ)を入れて、この地区によって多少の違いがあるが、一月十五日に、若い衆がイズミ

ミとして貰いうけたりする所もある。籠と男根は道祖神に供えておく。籠を道祖神にかぶせたり、籠をイズとして、大騒ぎを数回くりかえして、籠をかぶせたことにして終り、として、大騒ぎを数にかぶせようとすると、女衆がかぶさせまい

ように仕組んである。この道祖神は、宴席でも正座につく。 とうに仕組んである。この道祖神は、宴席でも正座につく。 おいましょうか、籠で祝いましょうか。」「寒い折ですから籠いが、ましょうが、籠で祝いましょうか。」「寒い折ですから籠れ「水で祝いましょうか、籠で祝いましょうか。」「寒い折ですから籠れ「水で祝いましょうか、籠で祝いましょうか。」「寒い折ですから籠れ「水で祝いましょうか、籠で祝いましょうか。」「寒い折ですから籠れ「水で祝いましょうか、籠で祝いましょうか。」「寒い折ですから籠れ「水で祝いましょうか、籠で祝いましょうか。」「寒い折ですから籠れ「水で祝いましょうか、籠で祝いましょうか。」「寒い折ですから籠れ「水で祝いましょうか、籠で祝いましょうか。」

の四点について概観してみたい。事には、水・籠・陽物・道祖神の四つのモチーフが存在している。こ倉渕、万場、松井田の三例を重ねると問題点が抽出される。この行

で筈である。が消えていたとも考えられなくはないが、原初的には「水」が存在しが消えていたとも考えられなくはないが、原初的には「水」が存在しできる。万場町に民俗行事として定着する以前において、水との所縁渕、松井田の例からみて、かつては水が介在していたであろうと推定水祝い、水祭りといって、「水」との所縁が深い。万場町の場合、倉

「水祝い」について、鳥渕村郷土誌では、奇習として紹介している

た時に誰彼となく捕えて水を浴びせる風習。」とある。たちが新郎に水をかける風習。みずあびせ、みずかけ。②田植の終っ嫁入りや婿入り、または新婚最初の正月の神参りの帰りなどに、若者(一八四頁~一八六頁)に各地の例が収録されている。広辞苑には「①のだが、かつては全国で行われた風習である。すでに「婚姻習俗語彙」

たと考えられる。なる力・結婚をするための資格―神格―を得るための必須条件であっなる力・結婚をするための資格―神格―を得るための必須条件であっるとともに、聖なる水の呪力による新たなる蘇生を意味していた。聖 「水祝い」は古来の禊ぎの呪術に根ざしている。禊ぎは、身を清め

禊ぎ」を推定しておられる。(全集十五巻三六〇頁~三六一頁)を迎えるために、予め行う修祓―古事を待つための吉事祓―としての折口信夫先生は「婚礼に来臨する神―饗礼に臨む神又は、高媒神―

た。ることであり、祝福を受けることは、その神となることにも通じていることであり、祝福を受けることは、その神となることにも通じてい来臨する神を迎えるための禊ぎは、その神の祝福を受ける資格を得

同様行事があるか否か調査の要がある。名の他、子持村上白井の小河原地区においても、三十数年前まで、一条のでは風呂をわかしておき、川から上がった婿を入れてやった。行事のを、部落総出で大騒ぎをして川に追い込んだという。川原の近くの家婿を川で泳がせる小正月行事があった。十五日の午前中、前年の婿達婿を川で泳がせる小正月行事があった。十五日の午前中、前年の婿達

籠の話」(全集第二巻)を参照されたい。 除けとする―からも、それは推定し得る。詳しくは折口信夫先生の「髯イマナクの行事―竹竿の先にメケエ(籠)をつけて、庭先に立て、魔また神霊そのものでもあった。県内各地にみられる「コト八日」のダ薫も単なる演出とは考えられない。籠は古く、神の依り代であり、

呪的な意義を認めていたのであろう。 馬の沓も、馬蹄を門口に置いて魔除けとする風習からみても、何か

これも全国的な規模でかつて行われていたのである。陽物を小正月に新婚の家に持ち込むのは、懐妊の予祝行事であるが、

型(粥搔式)の六つに分類されている。 B型(削掛式)、C型(皮剝式)、D型(枝柴式)、E型(藁繩式)、FB型(削掛式)、C型(皮剝式)、D型(枝柴式)、E型(藁繩式)、Fおいて詳述せられている。氏は全国的な五十二の資料をA型(男根式)、西岡秀雄氏が、すでに「性神大成」の第五章「粥杖と尻たたき」に

に存在するのではないということを、より明確にするために「性神大に存在するのではないということを、より明確にするために「性神大がら男根の記憶はないが「オヤオヤ、オヤオヤ。」とはやして、オヒネがら男根の記憶はないが「オヤオヤ、オヤオヤ。」とある。筆者には残念な新婚の家にいき、嫁御の尻をつつくという。」とある。筆者には残念な新婚の家にいき、嫁御の尻をつつくという。」とある。筆者には残念ながら男根の記憶はないが「オヤオヤ、オヤオヤ。」とおる。筆者には残念ながら男根の記憶はないで作った男根を水引きで結わえて、神焼きの夜、子供たちが、ヌルデで作った男根を水引きで結わえて、オースに、

第二号)』

成」から一例だけ引用しておきたい。その類似には驚かされる。
成」から一例だけ引用しておきたい。その類似には驚かされる。
第二号)』

てその一番古い理由として、 伊豆内浦に軽うじて痕跡を留めていたF型粥搔式こそは、 険かも知れないが、これは非常に示唆の深い事実を裏書きしているの 式のA型は関東を中心にして裏日本には島根以外見当らず、アイヌの 型式のように思われる。 ではないだろうか。」とされている。さらに「六型式の中で、 イナオと関係ありそうな削掛式のB型が、新潟を中心に山形から秋田 C へと裏日本に卓越している。僅か五○余りの資料で結論することは危 中で古い形ではなかったかと考えている。」と述べておられる。そし 周圏論を用いれば、 秀雄氏は結論として「総括してAB両型は日本に弘く分布し、 ・F型は近幾・中部に集って、日本の南北両端に見当らな また最も古そうなAB型を比較すると、 AB両型は近畿に見られるDE両型より古 主として「粥杖」との関連を説かれてい 最も六型式 静岡県の 男根

語」や「弁内待日記」にもその記事がある。(日本古典文学大系十九、 後を打てば子を産むというので宮廷で行われた行事であり、 粥杖は「枕草子」の第三段にあるように、 望粥を炊いた木で、女の 「狭衣物

もわからないからである。 と称している点などから、 だ一例であり、その棒を「大の金剛」(各地の例からみれば男根である) があったかも知れないし、古代の「粥杖」の原点にも男根があったか いと思う。各地の「粥搔棒」の形状からみて、その背景に男根の意識 筆者としては、「粥搔式」が現在のところ、静岡県田 もう少し具体例が集まるまで結論を待ちた 方郡内浦村のた

も、まだ「粥搔棒」で女性の尻を打つ習俗は報告されていない。 .内で今まで十数年来行われた調査でも、群馬県史編さんの調査で

は共通している。棒で粥占をする所、水口の棒に田植えの御馳走を供 割りにして、マユ玉をはさんだのが一般的で、苗代の水口にさす点 県内での「粥掻棒」は、オツカドやニワトコやヌルデの木の本を四

えると豊作だという所など、その謂は様々である。

ころ一例も報告されてはいない。 ているのだろうか。しかし、ハラミ箸と妊娠との関係も、 孕む」ために使用するという所もある。「粥杖」の「子孕み」が反映し が、その箸を粥搔棒と一緒に水口に立てる所もあるし、「稲の穂がよく 十五日粥は、ハラミ箸を作って、それで食べるのが県内共通である 今までのと

告例があるかも知れない。 近年盛んになっている地誌類編さんや民俗調査で、すでに幾つかの報 などをみても明らかである。とすれば今後の調査もさることながら、 宮廷儀礼が、やがて民間の行事として定着するのは、 七夕や 庚 申

に把握する必要があろう。 はさらに、両面から見極めることと、 「水祝い」と「尻たたき」は、 本来的には別物であろう また両者の習合状態をより明 今後

いるし、 ないが、その演出を生む背景に道祖神があったことは見逃せない。倉 県内では、松井田の例に象徴されるように、 い。さらに、道祖神とオキンマラとの関係を考えれば両者の脈絡はつ 道祖神は全国的に有名)ことからみても、 渕村では道祖神は直接出てこないが、松井田とは峠を介して隣接して しているとみてよいようである。松井田の演出はさして古いものでは 道祖神と水祝いが別種であったことは、全国の例から明らかである。 松井田との類似や、 倉渕村の道祖神信仰は盛んである(双体 両者の関連は考えられてよ 何時の頃からか両者習合

神以前の信仰として正月に来臨する祖霊を論究されている。(あるくみ マラは神の依り代であり、さらにそれ自体が双体道祖神や文字道祖神 以前の道祖神であった一時期を想定している。都丸十九一氏は、 習がある。オキンマラと道祖神の関係は切り離せない。筆者はオキン も一月十四日のどんど焼きに際して、道祖神にオキンマラを供える風 万場町からさらに奥深く、中里村と上野村があるが、そこでは今で 道祖

急務である。野県に接しており、今後、長野県を調査して県体例を蒐集することが野県に接しており、今後、長野県を調査して県体例を蒐集することが上野村は十石峠を介し、また松井田は碓氷峠を介して、それぞれ長るきく95 ツクリモノの語らく――群馬県の小正月飾り考――)

1、道 祖 抽

にの又本道租車については、Lでにも、の最后標のHRLを下ので、、へつ)の銘のある落合のものなどが有名である。 のある熊久保の僧形合掌道祖神や男女和合の形をした宝暦十年(一七のある熊久保の僧形合掌道祖神や男女和合の形をした宝暦十年(一七のある熊久保の僧形合掌道祖神や男女和合の形をした宝暦十年(一七のある熊久保の僧形合掌道祖神や男が「道祖神の宝庫」であるこ民俗に興味を持つ人にとって、倉渕村が「道祖神の宝庫」であるこ

あるが、紙面の都合上今後にゆずりたいと思う。ていけば、ますます問題が大きくなる。ここで問題点を整理すべきで持っており、双体道祖神以前の信仰やどんど焼きとの関係などを考え病である。道祖神はその土地/\により、様々で、複雑な信仰形態を実のところそれでもまだ解明されない点が多く、今後の大きな課題なこの双体道祖神については、すでに多くの報告書や研究書があるが、

照されたい。
和歌森太郎博士は「歴史と民俗学」(三七頁~六〇頁)において、民経されたい。

和歌森太郎博士は「歴史と民俗学」(三七頁~六〇頁)において、民郎されたい。

「田本の民である。氏は、サルダヒコ、ミシャグチ、テンパク、ドウソジンを重ねなる。氏は、サルダヒコ、ミシャグチ、テンパク、ドウソジンを重ねなる。氏は、サルダヒコ、ミシャグチ、テンパク、ドウソジンを重ねる。氏は、サルダヒコ、ミシャグチ、テンパク、ドウソジンを重ねる。氏は、サルダヒコ、ミシャグチ、テンパク、ドウソジンを重ねる。氏は、サルダヒコ、ミシャグチ、テンパク、ドウソジンを重ねなる。氏は、サルダヒコ、ミシャグチ、テンパク、ドウソジンを重ねなある。氏は、サルダヒコ、ミシャグチ、テンパク、ドウソジンを重ねる。

わりに

いたよりも小さかったけれども――。で歩いてみて、それを実感した。山や川、道幅や距離の規模は思って繁期でもあり、話者の皆様の御都合もあったりして、一日は自分一人繁度の調査で気付いたことは、幼少年期の記憶の確かさである。農

全れはしかし私個人の文学の範疇に属する問題である。 しお世話頂いた人達であった。"郷愁』や"邂逅と別離』の念が強い。 筆者は六区担当であったが、集って下さった方々の大部分は、むか

倉渕村の今後の発展を祈念して筆を措く。 い浮かぶ倉渕は昔の倉渕であり、登場人物も昔のままなのである。 不思議なのは、この調査の後、別件で二度倉渕に入ったのに、今思

(佐藤清)

はじめに

る性格をもっているからである。また周辺から時代の流れの影響を強く受けいだろうといえるだろう。民俗調査の対象とされる他のいくつかの分野の時代に入って著しい。それはおそらく衣、食、住の分野で最もはげしの時代に入って著しい。それはおそらく衣、食、住の分野で最もはげし衆知のように戦後日本人の生活は大きく変化した。特に高度経済成長

したものを多く見ることができる。一日五~六回(コジョハンを含めて)は、大大で、大大で、ここでは記録にとどめておく以外にないようである。 たれなくなっている。染料も他の地域と変わりないが、これは完全に過られなくなっている。染料も他の地域と変わりないが、これは完全に過られなくなっている。染料も他の地域と変わりないが、これは完全に過られなくなっている。染料も他の地域と変わりないが、これは完全に過られなくなっている。染料も他の地域と変わりないが、これは完全に過去のものになりつつある。ヨソユキ・足袋・下駄・草履・ワラジも過去のものになりつつある。ヨソユキ・

それはやはり生活の知恵の産物であった。とればやはり生活の知恵の産物であった。の食事、麦ぞっきないしは七・三から五・五の麦飯、これに里芋をいれの食事、麦ぞっきないしは七・三から五・五の麦飯、これに里芋をいれの食事、麦ぞっきないしは七・三から五・五の麦飯、これに里芋をいれの食事、麦ぞっきないしは七・三から五・五の麦飯、これに里芋をいれ

俗)、西上州の場合、この村から更に南の松井田町あたりが境かもしれなで、その料理法もそれぞれ工夫され、副食として十分に活用されている。で、その料理法もそれぞれ工夫され、副食として十分に活用されている。で、その料理法もそれぞれ工夫され、副食として十分に活用されている。の地域に産する山菜・木の実二十種、十数種のキノコとかなり豊富この地域に産する山菜・木の実二十種、十数種のキノコとかなり豊富

古い萱を交えたり、薄くふいたり 何年も継続してふいたりした。本県全生の大手時が聞かれたが、ワラビ、クズの根、スズの実など、土地柄比較的恵実例が聞かれたが、ワラビ、クズの根、スズの実など、土地柄比較的恵実例が聞かれたが、ワラビ、クズの根、スズの実など、土地柄比較的恵実のが聞かれたが、ワラビ、クズの根、スズの実など、土地柄比較的恵まれているようで、伝承者にもよるであろうが、一部の地区では、飢饉まれているようで、伝承者にもよるであろうが、一部の地区では、飢饉まれているようで、伝承者にもよるであろうが、一部の地区では、飢饉まれている。本具ので、その対域を表表している。

々とみられる程度になった。 これらは次々と姿を消し、今では各部落に一戸か二戸、奥の川浦には点 近辺の町村から呼んでいたという。板割りも同様であった。そして戦後 く、長井では越後の人と聞いても、 般に本職の屋根屋は越後人が多い。 岩氷、 然しこの地域では必ずしもそうでな 川浦地区では全然聞かれず、

摘できるのではないだろうか。(池田秀夫) のようにみられる。このことは衣・食・住だけでなく、 よる相違よりも、 地域的分類によったと思われる。そして生活・伝承面では、そのことに ともと共に碓氷郡であって、行政的に郡を異にしていたのは、 はさんだ旧群馬郡倉田村と、 以上衣・食・住について概観したが、この村は、 むしろ烏川の上流地域と下流地域の相違の方が、顕著 旧碓氷郡鳥淵村の合併したものである。 昭和三十年、 他の分野でも指 川による 鳥川を E

る。

衣 服

着 物 裁 縫

てくれるものだ。 三つ身 三〜四才のころで、着せる時期は短いが、必ず一枚はつくっ 着物の大きさ 一つ身 生まれたての赤ちゃん・産衣等。

半反で一枚できる。

本裁ち 四つ身 一反で一枚。(一区

ある。四ッ身は小学五年位までである。(六区) 身頃 一ッ身は二才位まで、三才になると三ッ身を作ってやるもので

裁縫の一人前半纒半日という、朝早く縫いはじめれば、 一枚縫いあがった。 お昼のころ

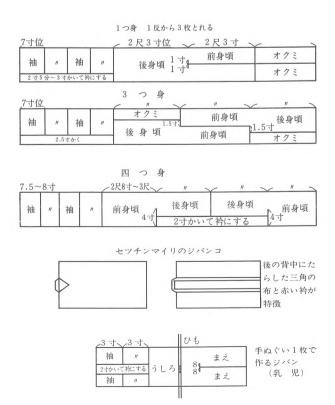
あわせも、大体、ひとえもんと同じくらいでできた。(水沼 ひとえもんは、早いもので一日かかって一枚ぬえた。

> か作って上げてから豆腐ごといける。 針供養 二月八日に針供養をする。 (三の倉) 豆腐に折れた針をさし、すしなん

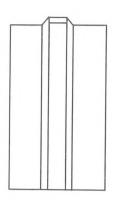
普段着·作業着

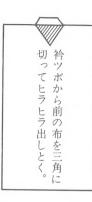
まごつく様なことはなかった。 れ着)があり、 ふだん着 チョイチョイ着 (お茶もらい着もんとも言う)トットキ (晴 いい着もんは必ずアゲモンにしておき、その場になって

今は「さあ、どっか行く」となると大さわぎをして服なんか買ってく



セツチンマイリに着せるジバンコ





1い晒に赤い布の衿をつける。

途中でやめては悪い。もし必要なら着ものの一枚位は寝ずに縫い上げたもんだ。(糀屋)

ヨソイギが古くなったようなのを着る。(一区)また「ソデない仕事になるから」両袖をつけるようにする。(七ッ石)

片袖つけたら、もう片っぽも「マチ針だけでも打っておけ」と言った。

オオメ(絹と木綿)、ガマオオメ等の着物。 チョイチョイギ・ヨソイギとしては男は銘仙・地縞・フトリジマ(絹

家では普段は筒袖、検査が終った年頃からタモトは外出のとき着た。ていて、女の筒袖といった。)(一区)女も材料は右同様であるが、袂は元禄とナギナタ(元禄よりも角ばっオオメ(絹と木綿)、ガマオオメ等の着物。

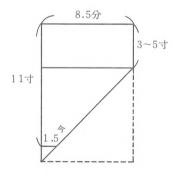
野良着 筒っぽうの着物・半纒・胴着・半襦絆等を季節により寒暑祭に呼ばれたときなど。(岩氷)

袖口に絹天などでふちどりする。またはコイクチハンテンネジリズッポー

大

Œ

袖



8.5分 6 8.5分 6

ンドシ洗いが容易じゃなかった。(七ッ石)女衆は長着にヒッパショリをとり、フンドシ(腰巻)を下げてた。フと言い、紺と茶を多く使った。男衆の仕事着はモモヒキに紺ジュバン「紺茶は、はやりすたりがない」

山仕事にはモモヒキをはく



向って左 ネエサンカブリ 右オクサンカブリ (相吉)

場合があった。(六区) シマキでシリッパショ イをした。(六区) 女衆はヒモメンのコ

子は下に向けてつける。ヒコオビ・コシアゲは、小さい着物でもつける ヒコオビ・コシアゲ ヒョットコカブリは、 ハチマキは大仕事などで、心のきまりをつけるときにする。(六区 寒い時に男がする。(六区) ヒコオビは男の子はぬい目を上にむける。



戦争中の漂準服 (土屋 政江 撮影)



手拭のかぶり方 オ (相吉) (都丸十九 撮影)

げ、腰あげをして着せる。

肩あげ腰あげ 子どもが歩く様になると肩あ

帯は昔は十八・九才頃から用いた。

が、

本裁ちにもつける場合がある。

はメリンス製を用いる。

帯は木綿のエッツケオビが普通、

よそゆきに 第一区

も紺のモモヒキをはく ンが多かった。女衆で モモヒキ、紺のジュバ の男衆の服装は、 した。上衣は木綿のコ オコシをさげて仕事を をヒッパショリして、 ジバンである。(岩氷) 畠仕事や家にいる時 女は戦争中から着物 紺の

> 出るようになってから、皆に教わって手縫いにしてかけた。 ンはカフェの女給なんかが早くからしてた。昭和の初め頃、

前掛、

エプロン
ヒダをとってギャザーをつけた前掛をした。

タスキはきものの残りなどついで芯を入れて何本も縫っておいた。(糀

屋

(都丸十九一

撮影)

との半(一布半)にしてヒモをくけつけてつける。

が学校へ行ぐ様になると腰巻を作ってやる。ひ

女の子のきもの

ヒ木綿の赤いきれで女の子

男も大体その位。(七ッ石

十九の厄年で肩あげ、腰あげをはずす。

サンジャクの長さは六尺~六尺五寸。

前掛けを縫ってかけさせた。(糀屋)

る」と言われた。(糀屋) 出てくる。 があった時、 ねたまんまのシコー(服装)で起きてくると「あんなザマして出てく 寝まき 寝る時につぐ朝着るもんを枕もとに用意しておいた。 裸でとび出すことがないように。目が覚めたらそれを着て 何か事

洗濯ものは一度たたんで着るもんだ、と言った。(七ッ石)

晴 着

 (Ξ)

女は江戸妻。 儀式用着物 葬式のとき以前は白無垢。今は黒無垢。(第一区) 男は紋付・羽織

エプロ

組合製紙へ

の意)は持っていなかった。(岩永) ハダジバンは麻製が最高で、お客に行くとき着た。ニンニン(一人一人 盆・正月・祝・不祝儀・祭礼にはトットキの着物である紋付を着た。

ことをいったものである。とくに女衆は、 ことわざがある。 せんというのはつらかったことである。 物をつくった。よそいぎの着物であった。 いといった。もらい方では、姑がこれを買ってきてくれて、嫁がそれで着 生懸命、 い着物を着せてやらねばならなかったので、除夜の鐘のなるまでは、 セツイショウ ぬいものをしていたという。(水沼) あたらしいセツイショウを着せてやらなければならな 年の暮には女衆が、盆のときには坊さんが忙しかった お正月に着る着物のこと。 家族のものにお正月には新し 嫁に行って、着物はつくれま 「師走女に盆坊主」という むかしは

あった。お召、 男はツムギの着物、 メイセン、メリンスが上の口で、 チリメンは女衆にとって一生に一枚といわれていた。 また祝、不祝儀には紋付きにハカマであった。 お召を着る人は指折りで 六

いもの。 産衣 さらしの膚着、 コヨギは着物様の蒲団である 点 その上に胴着。 ネルの単衣。 コヨギの小さ

区

(都丸十九一 撮影) の背の上部には必 ウコン。この産衣 とされた。裏地は ないとかいって必 お守りとか、まじ 赤の地に麻の葉模 表は男は青、 ずつけるべきもの 様。この模様は、 女は

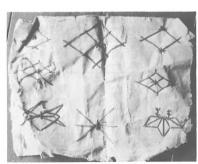
衣 (相吉)

産



ヌイマモリB なお、ヒコオビの縫目が下にあるので男児 (相吉) のものであることがわかる。 (都丸十九一撮影)

かいう模様を縫いつけた ヒコオビの付根にもつけ ずヌイマモリとか背紋と マをつける。子供のボン た。魔除けだという。 (写真)。ヌイマモリは 第一区 クドを大切にする。 ウブギにはオマモリサ



ヌイマモリA型紙(相吉) (都丸十九一 撮影)



ヌイマモリB型紙(相吉) (都丸十九一 撮影)

反いるが、縫うのも畳む タミ (葬式の時)とノシ ダタミ (ご祝儀)を知ら のもむづかしい。「イシダ 男のハカマ 並巾で一

ねえと笑われる」と言った。(七ッ石

に来た。このときがマント・外とうの着初めといった。 に獅子をふる。十八日の晩、 といっていた。(水沼 で獅子舞をした。このとき、この谷一里ぐらい先から若い衆たちが遊び なお、お祭りまでに、イネ刈りをすませたい、ムギまきを終らせたい マント・外とうの着初め 八時すぎから十二時ごろまで、神社の境内 水沼神社のお祭りは十月十九日。その前日

(四) 形・化粧

普通の日や作業する時はヒッツメであった。嫁さんは丸髷に結った。(一 娘さんは桃われ、ハイカラマキ・ヤカイマキ等流行に従ったが、

地など。(岩氷) ハイカラ頭・シマダ・マルマゲ・行方不明イチョウガエシ・二〇三高

イチョウガエシ、マルマゲが普通で、シマダはお大尽の娘がした。(六

分で結い上げた。 すき毛をとっておいて、輪っかにしてアンコに入れ、二〇三高地に自

鏡を戸だななんかにおっかけて見ながら結ったもんだ。

嫁ごになると島田から、丸まげを結う。(七ッ石

白くはげるとみっともなくなるから外へ出る時に気をつけて染めた。 オハグロ 姑さまがオハグロをつけてた。十日に一度位染めた。また

履

刈・下刈の折) ゾウリ (朝草刈りのときにはく。) 花結びゾウリ (アシナ カ)も自家製 手製の地下足袋(大正五・六年頃から買って用いた)ワラジ(草

> グルミかホオバ、桐製はぜいたく品。婿になるときはゴザゲタをはいた。 道の悪い所に行くときは主として女はサシバ(歯が薄く高い)。材料は川 下駄は外出用、少し位の雨のときヒキツケ(歯が広く低い)をはく。

ヒヨリー ―ござのついた下駄

アトマルー -前後の角が丸くなっている。

サシバー 一歯のさしかえができる。

ポッカン――ござつきもあり。

ヒキツケ――こまげた、歯は入れない。

ホホバー -朴の歯。ヒキツケ・ホホバは男のみ。(第一区)

ぞうり 花ムスビ――足半

ガズー 一竹の皮

アサウラー - 底を麻をクゲに編んでつける。

クデとは三本でより合わせることである。

ワラゾウリ・ボロゾウリ――わらが主

ゴザツキ――嫁御さんがはいた。他にもフェルト・キリク (コルク) -表ゴザまたは竹の皮、下に板がうちつけてある。

等があった。(第一区)

で、今百円する。(六区) リなどあったが、アサウラゾウリは上等であった。ワラゾウリは昔二銭 草履にはタケノコの皮のゾウリ、モロコシの皮のゾウリ、ワラザゾウ

むかしは、ひも足袋をはいた。足袋がきれれば、はそん(修繕)しては て、それにあわせてつくった。暮には、正月にはかせる足袋をつくった。 足袋 足袋も自分の家でつくった。女衆の仕事であった。型紙があっ

タビハソン 寒くなりゃ縁側の隅でタビハソンやボロットジを始め

むかしは品はあったが不景気で金がなくて買えなかった。それから戦



紙 (土屋 政江 撮影)

した。ランプの下でさした。(六区)

遠距離の歩行とはきもの

遠距離

ゾウリはおおごとだし

かしの歯のうす

裏返して縫代を外にして、みなさ

ノラバキ

足袋の型

すぐへってしまう。 の歩行には、 くて低いサシバがいちばん楽だっ (川浦)

(六) 染 色。 機 織

染料 キワダー

○ミンブチ(オッカドの木の実、 ――こげ茶(クルミより濃い)(一区 毎年村人から買集めて、

クルミの松の皮

一こげ茶

○クルミの皮=茶色 〇キハダの皮=黄色

問屋に送った) =藍色

皮とクルミの皮は茶色に染まる。(六区 あるいは高崎、 ヒワダの皮をむいて、 豊岡の染屋にやって染めた。 煮だした汁で染めると黄色になる。 クリの木の

にメイセンを買う。以前はフトリジマ、オオメを着ていた。 の者が用いる。若い者は(二〇~三〇才位)カスリを着る。 た。高機織は二十才前の娘から織り、五十年位前からやっていた。(岩氷) フトリジマ(太織縞)は男女が着る。家で織る 絹だけで六十才位まで オオメ(青梅)は絹と木綿の混紡、家で高機で織った。 木綿でアオメ・フトリジマ・ガスオオメなどを自分の家で織っ (岩氷 (岩氷 女は外出着

なくなって、女衆は苦労した。(糀屋 争中になって今度は品がなくて買え 足袋の悪くなったのを

食

食

習

朝茶菓子 またアサゴコエという。 制 前の晩に焼き餅にしておき、これ

朝飯 十時のお茶 を食べて朝ツクリに出る。

オヒル

コジョウハン 野良で焼き餅、 おにぎり・さつまいものふかし等

夜食 夜なべの後食べる。

(1)四時~五時頃、 馬に乗って山に草刈りに行くときヤキモチを持って

(第一区

草刈から帰ってアサハン、八時頃

乾して吉井の

(5) (4) (3) (2) 昼食 コジョハンはミソ入りのヤキモチ・モロコシ・イモ等

また仕事でお昼、 食事の回数は夏は四回になる。朝飯前仕事をして朝食は普通にとる。 ユウハン・オキリコミ・七~八時頃・(岩氷 四時頃にオコジョハン、夕食は七時か八時になる。(六

X

りのぬく灰で芯まで焼く。 ンを入れてこね、 コジョハン ミソヤキモチを作った。ウドン粉に少しのミソとタンサ 丸めて一旦ホーロクでうわっつらを焼いてから、いろ

くもえる。(七ッ石) こうすると表面にあまり灰がつかなくていい。タンサンを入れるとよ

間食をオコエ、オコビルといい、焼きもち、 午後の間食のことを、オコエまたはコジュウハンともいう。(水沼) いも類、こうせんを食べ

里いも洗い臼、洗い板は丸くなっ 内側に荒い堀目があり臼の底 には水をぬく穴がある。(二区) (阿部 孝 撮影)

半飯になり、現在麦を食べている家はほとんどないであろう。 玉・粟の強飯等にもした。(第一区) この中に里芋・栗・薩摩薯・五目等を入れた混ぜ飯もよく食べた。 主食 昔は麦飯が常食で、米が三分も入ればいい方であった。それが 補食をして稗・粟・うどん粉等のさまざまな食品を食べた。稗の繭

た。今かんがえると粗末なものばかりだが、不思議に病気をしなかっ だった。米の飯を食えるのは、 り気のないものだが米と七対三の割合で上手にたきこむとうまいもの んな時でなければ、イワシでも 塩 ビキ でも ほんとうに買いはしなかっ いていのものが粟飯やヒエ飯も食っている。そればかりでは、全くねば おかずは、こうこうにおはづけ、味噌漬くらいだった。幼い時には、た 家では、七対三だった。ちいっと生活の苦しい家では半メシといった。 ご飯はいい家で、米と麦の割合が五対四、 お祭りやお祝いのもの日だけだった。そ おぼえてからはふつうの農

結婚したとき そろいの箱膳が用意 夫の方が少し大きい夫婦膳である。 老人 (夫) のは立てひざで食べているが、 これが男の老人の作法であった。

ンメシはよい方で、ひどいのは米三分麦七分

戦争前までの主食に、米・麦五分五分のハ

だった。米七分麦三分などは上等の部だった。

撮影)

の時代に、山の炭焼きさまはいつもコメの飯

この土地の農家がムギ飯、アワ飯、

ヒエ飯

た。(川浦

(1区 野口佐五平氏) (都丸十九一

> 二つに切っ裂いたものがぶらさげてあって、 それを切って焼いてくれた。山へ行ったほう

ってみると、小屋の中には大きな塩引き鮭の

がごちそうにあずかれた。(川浦)

馬に米二俵つけて来てくれなどといわれて行 におととだった。炭焼きさまの元締めから、

分というのもすくないくらいだった。 米の沢山ある家は半めしといい、米半分、麦半分のめしだった。秋は七 によっては、その逆で、米三に麦七分という場合もあった。米麦五分五 三(ヒチサン)といい、麦七に対して米三で、その中に里いもを入れた めしを食べた。若い者は普通三ばいめしだった。現在、里いもを洗った 「いも洗い臼」が二区だけで十五個ぐらいある。(二区) ふだんの食事むかしは、米七に麦三分という家は上等であった。 おまつりのときには赤飯をつくった。 昔は麦めしばかりだった。麦ゾッキといい麦ばかりのめしを食べた。

らいであった。 ないをした。食事のよしあしは、女衆の腕次第だった。(水沼) ふだんは、女衆が工夫して、よく粉もんをつくって、 食べもののおぎ

米の飯を食べるのは、

お正月三が日とかとしとりの日、

葬式のときく

19

麦をたくさん入れるのだから、量は二倍食わ

ねばならないことになり、うんと食うのがふ

つうだった。

ヒキワリは米五対ヒキワリ五の割合

-米五対押麦五(ハンメシ)あるいは七対三の割合

-時折夕食にする。 粟は一○~二○パーセント (岩氷)

たり、サツマイモを入れてイモめしとして食ったりした。(川浦 にアワが入ることもあったが、そうしためしの中に里芋の子いもを入れ 米麦が半々というハンメシのことをハンワケともいった。麦のかわり

ヒキワリ飯で、ハンメシ(半麦が半々)が普通で、七(米)三(麦)

はよい方であった。(六区)

ミソと梅干しが大和魂を作る、と言った。(関沢) イッソめし もの日でなけりゃイッソめし(米)なんか食えなかった。

など。めしが残ってれば食べるが、夕飯のために特にめしを煮るような 夜はたいてい粉類を食べた。ウドン、煮込み、オキリコミやツミッコ

事はしなかった。(七ッ石)

普通は七分三分で、ひき割りが多いひき割りめしで、五分五分の半め 食事 オママをたくのは嫁。シウトさまに聞いてからたいた。キッカ マスで計って嫁にたかせるシウトさまもあったそうだ。(七ッ石)

屋根替えなど人を頼む時、半めしを煮た。

しが食えるのはいい家だった。(カジヤ)

米のめしは盆と正月くらい。「盆のボタモチや芯から米だ」と言って喜

四食、合計一升のめしを食った。(川浦) 木挽きをした人たちは、小屋に寝起きして山で仕事をする時は、一日

最近では一人一合用意すればまちがいはない。 おふるまいをする時の米の量は、ヒトカタケー人二合あてに用意した。 (川浦)

めしたきについては水の量と火の引きかげんに注意すればうまいめし

ノ倉)

ばんよい。 水の量は、手を入れてみて、くるぶしの上にかかるくらいの量がいち

> 引く。米の量が少ないときは、水を少な目にして煮る。(川浦 火は、たくさん煮るときは早く火を引いてもうむれるので早目に火を

しでも、上の方に集まっていて米は下の方になるのでそんなこともでき には下の方をほって盛りつけてくれた話があるが、麦めしでも、 たわけである。(川浦 女衆が、にくらしい人には釜の上の方のめしを盛りつけてやり、 めしの盛り方としては人寄せのときなどにオバンシに頼まれて行った ヒエめ

代用食

〇ヤキモチ ホーロクで焼き、イロリの灰で乾しつつ焼く。

〇ツミツコ トッチヤナゲ

〇スイトン (最近たべるようになった)

〇ヒエヤキモチ ヒエの粉のみで作る。

〇メエダマ 米粉・ヒエ等で作る。

〇コオリモチ 0シミメシ 御飯を凍らじ、乾し、お湯をさしてたべる。 餅を寒水に浸し、ショウギに入れ、凍らしてから乾かす。

ら、なべなどに油をひいてその中に入れ煮ると柔かくな 養蚕で忙しい時などに、これを水につけて水を切ってか

る。(岩氷)

な事をする人はいない。余ればどんどん捨ててしまうがもったいない話 れずにこねて、ホーロクで焼く。香ばしくってうまいもんだ。今はこん メシヤキ、またはメシヤキモチは残ったヒヤメシとウドン粉を水を入

入れる場合もあった。ホウロクでやいた。 これもおやつに食べた。(三 ごはんのあまったのを小麦粉をこねてまぜてやいたもの。中に味噌を

ダンゴというのは、ツジュウの日につくる。にぎってつくったこぶし状 の団子である。旧九月二十三日はサンヤサマのマイダマをつくって家ご 団子 正月の繭玉、初午、十五夜、墓参、葬送の際につくる。 ツジュウ

とのお日待をする。百姓は苦労する。(第一区)

こである。 うどんを汁に煮こんだものがニコミ、生のまま煮こんだのがオキリコ**うどん粉の食品** うどん・ヒモカワ――ヒモカワは巾広である。

みこんだのがアズキボウトウ。 オツミッコ――汁につみこんだのがツミッコ、小豆をよく煮た中につ

リヤキ。 ヤキモチ――固くこねて焼いたもの。柔くこねて薄く焼いたものはジ

やコジョウハンの時喜んでたべた。 カリントウ――固くこねて油であげたもの。 昔から茶菓子 (食制参照)

(花屋) ・ウドン粉をゆるくかいて、ホーロクで焼いたものをジリヤキという。 ・・かいで、代りに残った飯など入れて熱湯でゆでた。(第一区)酸・一一炭酸饅頭は炭酸、酢饅頭は酢を入れてふかした。うで饅頭は炭

ンに油をひいて焼いた。それもおやつに食べた。(三ノ倉)小麦粉をやわらかくこねて、その中にネギをきざみこんで、フライパ

ロクで焼いたあと、いろりの灰の中にくべておいてから食べた。やキモチは小麦粉をこねて、ホウロクで焼いた。油はしかない、ホウ

、ノ゚ニヒル゙、ト゚゚(メワロ)
小麦粉をこねて、まるめて、中にみそあんを入れて焼いた。コジョウ冬でも、夏でも、おやつに食べた。(三ノ倉)

区切って入れるつみこというものも作った。(七区)いとんなどにして食べた。又、みそ汁の中に小麦粉をかいて、小さく、小麦粉でうどん、にこみ、おっきりこみ、焼きもち、まんじゅう、すハンに食べた。(水沼)

でも入れてつくった。(川浦)夕食はほとんどキリコミで、いもでも、やさいでも、時期のものを何

でかいて食べる。体があたたまるといわれていた。しかし、ソバは反対ソバーソバはソバとして食べる以外に、ソバかきとしてソバ粉を熱湯

といい、ソバが一番量を食べられるとされていた。(二区)合 げい、三合めし、四合こわめし(赤飯)五合ぼたもち……一升ソバ」に 体が冷えるとされている。一人で食べられる量を「一合ぞうせえ、二

(こと) (ここ) (ここ) (こここ) (ここ) (こここ) (こここ) (こここ) (こここ) (ここ) (ここ) (ここ) (こここ) (こここ) (ここ) (ここ)

ウ、ソバマイダマなどをつくってたべた。(第一区) そば粉からそば、そばやきもち、ソバガキ(そばっかき)、ソバマンジュごろやれば皮がとれる。三角の皮をとることをイロムクという。(川浦)の方がうまい。三角の皮をとるには、石臼の中にたくさん入れて、ごろの月半ばころつくる。製粉所で粉にするよりも、石臼でひいた粗い粉

キミ(キビ) クルマでついて粉にする。アワと同じようなものであないで、まゆ玉などにすると案外おいしく食べられた。(川浦)ごっそり出てくる種類で、昔はずいぶん作った。粉にひいてまぜ物をし朝鮮ビエ 朝鮮ビエは、普通のヒエとはちがい丈が短くて穂が割れてうことだった。(川浦)

る。(川浦)

キビはキビモチにして食べた。(六区)

ころにアワをふってふたをしてやればうまく煮える。ウルアワは、飯に栗の食べ方(クルマでついたアワは、飯を煮る時に煮えたち始めたと

のである。(川浦) 入れてからも黄色い。モチアワの飯はうまい。アワゴワメシもうまいも

アワはアワモチにして食べた。(六区)

れたあわごわめしはうまい。一緒に入れてふかせばよい。(川浦)モチアワはぼたもちにしても、あわごわめしにしてもうまい。栗を入

二 副食・食用動植物・保存食

おかずは漬けものぐらい。イモの煮っころがしでもあれば上等おつけの実(夏はジャガイモ、冬は里芋だった。

いろりで汁を煮ればヘッツ イでオママを煮る。(中石津)

おつけの実は野菜が主であった。(六区)

店にも売っていた。おかず、ニシン、サケなど安く買えた。越後の方から売りにきたし、

ししてから食ったもんだ。(築地)ショービキ(サケ)は頭をくくって川へしてて泳がせておいて、

塩出

肉 肉など食べなかった。ワナをかけて兎でもとって食べればいい式副食にサカナがつくのは、お祭り、盆、正月だけであった。(六区)

魚 川でとった魚はともかくとして、買って食べる魚などは、正月か盆だ。(中石津)

ちくわ ふだん食べられるものではなく、お祭りの煮しめの中に入れるまたはお祭りの時くらいのことだった。(川浦)

ううせこもファと食べる。(いる)ぐらいのことだった。(川浦)

お節供にチクワを食べた。(六区)

ことは夢みたいなことだった。(川浦) 油 彼岸などに四合びんで買うくらいで、ふんだんに食うなどという

ことっゝでちる。(=甫)上げればたくさん食ったが、テンプラを上げる主婦が頭を痛がったりし上げればたくさん食ったが、テンプラを上げる主婦が頭を痛がったりし上げればたっている。ナマ、サツマイモなどのテンプラで、

咲く。荒地でいい。生でも焼いても食える。(長井)らねえようした。それが残っている。ひまわりより小さく、黄色い花がきくいも「小栗上野介のおみやげで、からいもともいい、飢饉の時困

るいは切干にしてたべた。(岩水) 甘藷 穴を掘りバカヌカを入れて貯蔵する。普通は豚、馬の飼料、あへ行った時、このイモを汁の中に入れて出されたことがあった。(川浦)キクイモともいわれる。こそっぱいような味でまずい。戦時中霧積温泉ジャガイモのように芽が出て、菊の花のような花の咲くいもなので、ジャガイモのように芽が出て、菊の花のような花の咲くいもなので、

キノコ類ではシイタケ、ハツタケ、(少ししかとれない)、センボンシ山ウド、フキなどとった。(中石津)ゼンマイ、ワラビ、タロッペ、ウリッパ、ワカナ(トトキ)、サンショー、

タケ)は一つで五㎏もあるような大きいのがある。シイタケ・チチタケ・ハツダケ・モタセなどをとる。メエタケ(マイいう)ゴミッカブリ、チチタケなど。ソジ、ササモタセ、シシタケ(シシを打った時、血が流れた所に出るとメジ、ササモタセ、シシタケ(シシを打った時、血が流れた所に出ると

うな味がする。カケに以たイチョウの葉のような形の大きいもので、肉を食べているよカケに以たイチョウの葉のような形の大きいもので、肉を食べているよアカンボウという名のキノコは、名前のように赤いものでサルノコシ

プラにする。 ササモタセは、白いキノコで、八月の月初に出る。うまいものでテン

カワヒキはイチョウの葉のようなカタヒラのキノコで、皮がきれいに

ワカイもカタハで、木のくさったものにびっしり出る。

見た目にきれいなだけのつくりうどは食えないくらいになる。最近は塩 うど 峠の方の山うどが味がよい。芽のやわらかいものを食べると、 フジギノコは藤つるだけに出るキノコでうまい。(川浦)

保存しておき、塩ぬきをして食べる。みそ汁に入れてもよい。(川浦) 昔は、季節的にとって食うだけだったが、最近は塩漬けして 漬けで保存している。(川浦

である。(川浦) ろげてほして、かわいてくるとよくもみ、しばらくほしてはまたもむこ とを何回もくり返して仕上げ、一日でほし上げたものが上等なぜんまい ぜんまい とって来るとワタをとって熱湯でゆがくとむしろの上にひ

くせがなく、うまい。(川浦 こごめ 羊歯の一種のこごめは、 ゆでてごまよごしにして食う。味に

るほどで、みそよごし、煮つけ、みそ汁の中に入れてもよく、油いため が一番うまい。花もいいもので、のめっこくて口あたりよく食べられる。 ウリッパともいい、ぎぼうしの葉柄の部分がよい。一年中食え

ラブキ、などがあり、 サルの食えるものは人間が食える。そうしたものは熊も食う。(川浦) ふき うまく食べるにはよくゆでるのがいい。ニシンとの煮つけ、キャ 油いためで苦味がなくなる。塩漬けしてもいいも

てふかせばうまくできる。 ン、ユリゴワメシに使う。こわめしをふかす中にユリの根を一緒に入れ ユリの根 ユリの根 -球根は高級なもので、キントン、ユリヨウカ

で、黄色くなるのは格下げになる。(川浦 球根は、三年たつとタマが分かれるので、 周囲が白くあがるのが上等

> で臼の中に入れてついて、桶の中などに入れて水でさらし、ほしてクズ 粉をつくる。(川浦 クゾバ ソゾバの根の大根のような大きなものを掘って、小さく刻ん

アク出しをして、ヒキワリにして食べた。(川浦 トコロききんの時に食料とした。そのままでは食べられないので、

タラの芽 やわらかい芽をとって来て、そのままテンプラにするのがう れる。(川浦) ざな木なので、薪にも材木にもならないが、自然がなくなる。 材料にする人が出たりして問題になっている。タラの木そのものはやく 水の中にふせておいて、時期でもない早いころ芽を出させて山菜料理の まい。みそよごしもうまい。最近は、十二月のうちに木を切ってきて、 サンショウ 好きな人が新芽を摘んで来てつくだ煮にする。高値で売

とって焼いて食う。春秋にホド掘りをする。イロリのモシ火で、灰の中 に入れて焼いて食う。(川浦) ホド つる状になっていて、ジャガイモのような実がつくのでこれを

しを食べるのが一番うまい。 長いものを折らずに掘る。焼いて食べてもうまい。トロロ汁にして麦め 山芋 だれでもというのでなく、好きな人が掘って来る。上手な人は

トロロ汁は、正月のうちに食うことにきまっている。 (川浦

干して、とっとく。 つるべた大根を入れて二晩位置いてしみらせたものを、軒下などに吊して シミ大根 大根を輪切ってうでて藤づるにつるべる。 水を張った桶に

田植えの時など煮付けておかずにする。(七ッ石

もので、ちんちんあぶらがたれて味がいいものである。(川浦 ガンタク ひきがえるのことをガンタクという。焼いて食うとうまい

さして、イロリのまわりにさして焼いて食うと肉がいっぱいあって、川 クが寄って来たためで、とったガンタクは皮をむいて、尻の方から串を イモの池にはガンタクがたくさんいた。山が広いので、近所のガンタ

魚を食うようにうまいものだった。(川浦)

た。(七ッ石)た。(七ッ石)

時期をみて麴をねせてミソを作った。(糀屋)

の意)みそとなる。(二区)の意)みそとなる。(二区)の中に大豆を煮たり、いったりしたものを入れたものがおせえ(おかずのことで、水と塩を加えて何日か置くとみそになった。このふすまみそられた。ふすまみそは、ふすまをふかして、こうじに作り仕込んだみそられた。ふすまみそは、ふすまをふかして、こうじに作り仕込んだみその意)の意)みそとなる。(二区)

昔は、三年ミソが味もよいし、栄養もよいといわれていた。(二区)それを用いてミソを仕込む。こうじはすべて自家用でねせて使用した。長いほどよいといわれた。夏大麦の収穫があり、その麦でこうじを作り、寒ミソといい、寒中にミソ煮を行ない、ミソ玉にして二ヶ月以上吊す。

べた。今は二年目でたべる。(岩永)(米の種こうじ、豆を煮て、樽にいくつも作った。三年~五年たってた)

た。三番セジになるとしょうゆの味はほとんどなくあまりやらなかった。た。三番セジになるとしょうゆの味はほとんどなくあまりやらなかった。にしぼったが、機械は共同で所有していた。一番、二番セジまで行なっしょうゆ 十年前までは自家用として仕込んでいた。仕込んで一年後

十年位前まで自家で一戸あたり一~二石作っていた。(岩永)

は、熱の調節で一定の温度を保つようにしなければならなかった。黒いらをあげて、熱がこもるようにしておくと出来た。一番むづかしいことんらをあげて、熱がこもるようにしておくと出来た。一番むづかしいことれる程度までに温度が下がった時、きみがらを下にしき、その上にこもれる程度までに温度が下がった時、きみがらを下にしき、その上にこもこうじ。こうじはすべて自家製であった。丸麦をふかして手を入れら

た。又、どぶろくも作った。(二区)作った。麦こうじを作る際に、米こうじを作り、これでよく甘酒を作っこうじになれば使いものにならなかった。昔はこうじ菌は入れないで

『青ヶ月』 (またく)、カタント、日本、エイブログによっていてらった。けもの用には荒塩があった。(七ッ石) 塩 タクワンや菜っぱを二樽も三樽もつけたからカマスで買った。漬

六区) 漬け物 梅干し、タクアン、白菜、ミソヅケが主なるものであった

飢饉の際の食物 わらびの根・ホドイモ等 (第一区)

飢饉の時は松の皮をはいで食った。わらびの根、ところの根も食った。

(長井)

稲がちっとも実がいらず、立ったままで少しもこごまなかったそうだ。明治37年は飢饉だった。

食べられるものは何でも食べたそうだ。(関沢)のつうもちを食べたり、ワラビやクズの根を掘ったり、ウリッパだの、

ども兆年には食べたと聞いた。(七区)だと言った。わらびの根・ぜんまい・山ごぼう・たろっぺ・またたびな教荒食品(兆年にはすずの実を食べた。すずの実がなると作物は不作

たいなもンに包んで、とっとく。(保存食としては、イモガラ、赤い色をした里芋の茎を干してサンザみ)

よく干しあげると針金みたいになる。ゼンマイ(①ワタをよくとって②湯をかける③灰をかけてかんます④

煮る時は水につけてよくもどして煮る。(カジヤ)

ようなものまでもらい集めて干した。(七区)た。なひばは酒かすと味そでつけて食べた。いもがらは他の家で捨てる保存食として、大根の切干し、菜ひば、しみ菜、いもがらなどがあっ

特別の日の食事・その他

月十一日の秋葉様等は年中行事につく餅。 のハナックソモチ・土用餅また力餅・十日夜・旧十一月十五日、 誕生餅・タテジ(上棟)の餅。 餅をつく日 大正月・小正月・三月節供・契約 (第一区 ほかに葬後の四十九日の餅・ (別項参照) 四月八日 今は二

した。フナモチというあんこの入ったもちをついたわけである。 小豆を使った食物 春蚕がフナヤスミになると、(三眠)どんなにいそがしくももちつきを (川浦

(正月十五日)

〇ボタモチ (お盆・お彼岸)

田植(五月末~六月初)植える日一日か二日間 (四月三日) 秋祭 (十一月二十三日) (岩永)

岸・お盆に作り仏様にあげた。 だけで作ったものをいい、こしていない小豆はオニアンといった。お彼 オハギ・ボタモチ オハギはウル米の入ったもの、ボタモチはモチ米 (岩永)

牡丹餅をつくる日 春秋の彼岸の中日・盆・死者の忌日・命日等。(第

すしをつくる日 三月節供

わをふかす日である。 部落の鎮守の祭り、稲荷まつり おこわをつくる日 (川浦 村の春秋の祭の日、五月五日の節供、 (屋敷稲荷)、家族の誕生日くらいがおこ 田植えの日、

誕生後七日目のヒアガリのオコワ等。 赤飯をたく日 春秋の祭りの日、 屋敷祭りの日、 カネッケのオコワ、

かった(一度に三臼はる場合のこと)。

一回に一石ひかないとひとつかわり分(つぎのくるま番までの間)な

クルマヅカイに行くときは、米俵など背負って行った。

クルマヅカイ

は一人でした。(水沼

びきをした。

粉のほうが手間がかかった。

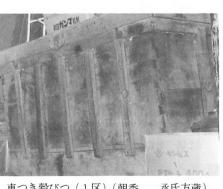
個人ぐるまの場合には、自家用につかったあと、

あいているときに賃

共有ぐるまには、つき臼が三、ひき臼が一つあった。米も粉もひいたが、 か、一斗五升とか小さくしておいてもっていった。一臼は二斗ばりだ、 た。一人一昼夜ときまっていた(朝からつぐ朝まで)。俵は一斗八升と 有二、私有二)。共有の水車の場合は、クルマヅカイの順番はきまってい

た屋敷祭りを三回する家が多い。 右のうち屋敷祭りは今は十二月十五日であるが、 その場合は、十二月一日、 もと十一月一日。ま 十旦、 十五

一月七日の七草ゾウセイ、一月十五日のアズキガユ。(第一



車つき穀びつ(1区)(朝香 丞氏方蔵) (都丸十九一 撮影) 箱からは、おばんしをする人が さんの場合もあった。米箱に手 て、米四斗に麦二斗入った。米 ていた。これには仕切りがあっ ても、それは意地の悪い姑のこ ないのではないが、あったとし ともあったが、この辺では例が 判をしたという話しも聞いたこ は嫁さんの場合もあったし、姑 自由にはかり出せた。おばんし

米箱

むかしは、米箱を使っ

ておいた。(六区) 石臼 ヒキワリウスは大きく、 コナウスは小さい。 穴にはシノを入れ

水車でつくときは、よく乾いているので水を入れて湿り気をもた

*・・・・・とは女衆の仕事であった。相間コーチには水車が四つあった(共

とである。

せてからつく。水を入れすぎるとすえてしまってどうしょうもなくなる でかげんが難しかった。 (川浦

バコ畑」と呼んでいる畑がある。当時はほとんど連作だった。(二区) 作れた。タバコ包丁できざんでタバコを吸った。 ると三年目には取れるようになった。一番、二番、三番茶までは取った。 昔は自分の家で作った。木が株になっていて、 明治三十六年まで自家用タバコとして耕作した。 現在は作らないが「タ 古い株を株分けす 許可なしで

浦

屋根替の材料

昔は、

クズ屋 (萱ぶき屋根の家)

が多かったので、萱

べた。それをくれてくれといって、それをもらって帰った。うち へもっていってやいて食べたら、まずくてのどへもはいらなかったとい 人がひえやきもちをつくってだしたら、とてもうまいものだといって食 ひえやきもちのはなし むかし、ある村へ殿様がやってきた。 むらの (城)

ひえやきもちは、ひえの粉いっそ(ひえの粉だけのこと)で なんでも、よそで食べるものはうまいというはなし。

てから、ほどでやいたものである。 ひえの粉を水でといて、いちどほうろくでやいてかわか (水沼

住

居

家 屋

数しかもたない。しかし、 いいが、麦わらでは何年ももたない。わらではもっと短い年 低二〇一二五年はもつもので、 をまぜては何回も使う。 クズ屋根 クズ屋 まったく新しくふきかえることはほ -草ぶき屋根は、 ふきかえの時に屋根屋は、 一代で一回ふき直しをすれば 古い菅

> 要になるのでこうするわけである。(川浦 薄くふけば萱は少なくてすむが、 厚くふけば大量の萱が必

わないので何年間かの継続事業としてふきかえをしたものである。 て集める。足場木もその家で用意するものである。だから材料が間に合 屋根ふきの材料 その家で萱を用意する。 人をたのんで萱場から刈っ () |||

にして三五・六貫というところだった。(川浦 りは、オテンマ(労力奉仕)でやった。一尋分の束で、六束一駄、 刈りもした。山の場所によっては草刈り場にせずに、萱場とした。萱刈 ハリウケ 屋根ふきの時には、屋根をふいた萱をなわでとめるので、 目方

ハリになわを通して上から突きさし、屋根裏にいる人が受けて返してや



(1区 野口佐五平氏蔵)





古 民 家 1

(第-X 野口佐五平氏方)



ギ 小 屋(熊久保) (関口 正己 撮影)

)II

浦

または手伝いの人がやるの が、これを受けるのは家族

で、これが大仕事だった。

る。

ハリをさすのは本職だ

屋根葺きでも使う。 来た。主に室田や久留馬あ はおらず、 る。縁起の木で、 頼んだことはない。 でも使うことに ズブサの木を屋根下に少し たりの人が来た。 越後から ミズブサ 普請には、ミ 屋根屋 わきから頼んで 屋根屋は村内に 新築でも なってい (川浦) ふつう

は下地の所に使う。 (川浦

シモチを半紙に包んで上げたりする。(川浦 いで、このときは必らずやらなければいけない。グシに水神の御幣を立 屋根替の祝 屋根屋が拝み、 屋根ふきには祝いがつくが、クジを上げた時は一番の祝 家によってはもちを投げる。 祝いの席では膳部にノ

てから四枚分二枚分というように小割りして木に無駄のないように割っ 人が来て割って、 板割り 村にも板屋根があり、 もらった。 栗の木を切り、 板割りをする人がいたが、 八枚分くらいに大割りをし 萩生から職

といわれ「子にかかる」とされ、物を吊すには枝である子にかけるため

に、親が子にかかることが自然だからとされて使われている。(二区)

萱ぶき屋根の家が火事になって、

火がまわったら決して家の中

に入っていけないという。すべてナワでふいてあるので、火がまわると

一度にナワが焼け切れて屋根が落ちて火の中へとりこめられてしまうか

らである。(川浦

を用いて作る。それはまっすぐで強いことと、

めくらこめごめ、又はひかげこめごめという、みずぶさの木

幹の部分が親で、枝が子

大黒とミヤコ柱が上まで抜けている。

(岩永・塚越文三家)

かぎ竹 柱の名

職人には、 泊りこみでやってもらうように頼んでやった。 (川浦

を付ける。(陳田 柱・天道ニラミ等の柱がある。 家の中には大黒柱・小黒柱・ミズヤ柱(奥りのデエにある)、天道 天道ニラメは縁側の柱で、 七夕飾りなど

> カマ柱 小黒 ミズヤ柱 アミヤコ柱 **//**/ 大黒柱 ロウマヤ柱 縁 側

テントウ柱

オクノ	ナ	勝	デ	風
ノデエ	ンド	チャナシュ	デエドコ	風呂場
オモノデエ	茶の	# 4	一(土間)	馬
デエ	間	シキ(ダンナザシキ)	, L	屋

といわれた。(六区)

馬小屋

昔は馬屋が家の台所に三つ

マヤ・ナカウマヤ・コウマヤという。 並んでいた。表の戸から、オモテノウ

(陳田)

ザシキにはその家の主人しか

坐れな テイ

い。もし坐ったりすると「米を買え。」

の周囲は坐る人がきまっていて、

りは大体次図のようであった。囲炉裏

間取りと囲炉裏

昔の農家の間取

水神である。(川浦 禁忌

 (\Box) 間

取

ŋ

潰れ屋敷の跡はよくない。 何代かで又潰れる。



老夫婦の座っているところがテイ ザシキ、向って右奥さんザシキ、向って左ヨ コザシキ、こちら側シタザシキ。(1区) (都丸十九一 撮影)

両端には、「水」という字 の上に立てるゴヘイは、 を切りこむ。火に対する 水神さまの御幣でグシの 水神さま 屋根のグシ



グシの両端に「水」の字を 切り刻んでいる。(川浦)

水

(三) 飲

2

水

押入 押入 に流し 風 呂 6 畳 場 00かまど 勝手(板の間 旧うまや 奥のでい 8 畳 旧うまや 茶 床の間 12.5畳 0 表のてい |||| 旧うまや 下郷野口佐吾平氏宅平面図

		Т		
オク	ナ	勝		風
オクノデエ	ン	手 オンナシュ	デエ	呂
エ	۴	オンナシュテイザーシ	デエドコ(土間)	場
オチ	茶	5 9	土間	馬
オモノデエ	の間	オキャクザシキ	トボグ	屋

としているのがある(築地) る。深いのは24尺位もあった。また各地に清水を井戸 げとつるべ井戸とあるが深い井戸の時、つるべをつけ 井戸水と川水を使う家が半々位だった。 はね上

水道(中部水道)にしている。(六区)

りにある末社のまつりと一緒にまつりを行なった。(七区)

水は豊富で、どこを掘っても出る。普通は井戸である。今は天然水を

十五尺ぐらいだった。井戸に水神様をまつった。春祈禱のとき、家の回

秋から冬にかけて本職の人が掘った。深さは大体十尺から

井戸掘り

井戸 (清水が流れ出ている) 坊峯 (七区) (阿部 孝 撮影)



井 戸 小 屋(陳田) (関口 正己 撮影)

生産・生業

、はじめに

ある。が豊かな山林資源の活用であった。又換金源でもあったことが特徴的でった。木材、木炭をはじめ食糧、せんいの材料、家畜の飼料、肥料までった。木材の面積の九割が山林であった関係で山林への生活の依存が深か

次に換金源であった主なものをあげると、

四十四年十万二千キロ(六千八百俵)の生産。 木 炭――昭和六年に十一万一千俵、昭和十三年十八万三千俵、昭和

べたと言われていた。 ン)中林(ナカリン)浦林(ウラリン)とあった。一人一日白米一升食ン)中林(ナカリン)浦林(ウラリン)とあった。一人一日白米一升食木「挽――昭和三十三年までつづく。木挽仲間の席次は元林(モトリ

頃権田村八千束、水沼村五千束の屋根板の生産があった。 屋根板 ――大正初めまで屋根板を作る板割が行なわれた。明治十六年

い金になった。戦時中は貴重品に扱われた。秋皮は八月中旬より十月上旬頃までで春皮はもうけは少なく、秋皮はよ十年頃までつづけられていた。春皮は四月中旬より五月二十日頃まで、杉 皮――主として屋根葺きや囲いの材料として用いられた。昭和三

には三河及び紀州から線香職人を招き盛んになった。最盛期は大正七年線香――天保年間より昭和四十四年までつづけて製造する。明治時代たパイプの会社や韓国の専売局に納められ大衆用のパイプとなった。辺の山野に自生する篠を切って売り出した。農閑期の仕事。沼津市にあっ篠切り――大正の初めから昭和十一年頃まで杏嶽原をはじめとし、周

まで上州線香株式会社が出来た。

事は他の山仕事より常に三割位高い手間賃であった。類であった。原木は太いもので六ッ割、細もので二ツ割にする。この仕三十五年生ぐらいが粘りがあって上物であった。六尺と六尺五寸の二種天秤棒――運搬器具、原木は二十年生から四十年生位までの杉間伐で、

月の頃皮をむいた。剝く人、乾す人、荷造りする人、運ぶ人等で入会山門の頃皮をむいた。剝く人、乾す人、荷造りする人、運ぶ人等で入会山門工三百五十円で売れた。山梨県河口湖町に送られて塩山ざるに加工されたり、長野県松本市に出荷され行李やざるに加工された。り、長野県松本市に出荷され行李やざるに加工された。の原料として柏の皮が古くから利用された。柏木山や杏嶽原など毎年火入を料として柏の皮が古くから利用された。柏木山や杏嶽原など毎年火入を料として柏の皮が古くから利用された。年間二千束(一東六〆)一東四川上流の奥地に細工用の良質のものが密生している。すず切り――鳥川上流の奥地に細工用の良質のものが密生している。

(以上は倉淵村林業史、市川八十夫著によるしまった。

の大野は多勢であった。明治十二年頃壱円につき弐拾六〆の相場であっ

た。大正末頃まで続けられたが、その後化学薬品に追われて姿を消して

でこれを焼く伏ガマ、ウナギを焼く炭なども聞くことが出来た。て、三六ガマ、トハチ、シチクが得られた。持殊の木炭として鍛治屋炭ー今回の資料は炭焼について問屋、元締の関係、炭ガマの大きさについ

どなく農業との兼業であった。に墨をはり、木挽の親方となって仕事を進めた。木挽は専業者はほとんに墨をはり、木挽の親方となって仕事を進めた。木挽は専業者はほとん木挽では元締が山を買い、木挽の生活必需品の世話をし、先山が材木

特に切賃の決め方、木の伐採賃金の決め方が得られた。

け合い、柏木村山札は権田にも分けている。山、柏木山は元禄より御運上場として水沼、三ノ倉で御札(山札)を分と川浦の入会山については寛永七年頃から明らかになっており、小和田山林関係の入会から私有林の成立について倉淵村林業史によって見る

本一代限りは土地の占有を認められることが普通だったが、継続的使用い畑を作り、これを荒した跡地に自家用林として杉、檜などを植えるとい畑を作り、これを荒した跡地に自家用林として杉、檜などを植えるとい畑を作り、これを荒した跡地に自家用林として杉、檜などを植えるとい畑を作り、これを荒した跡地に自家用林として杉、檜などを植えるとの人口が増加すると入会地の一部を開拓して枝村を作った。この土地の周辺に新しい林が出来、食糧の不足を補うために入会地内に御年貢の低周辺に新しい林が出来、食糧の不足を補うために入会地内に御年貢の低間辺に新しい林が出来、食糧の子は、日本村、百姓居林、百姓居林、百姓居林、百姓居林などの名称があている。

り六ツカで一反といわれている。根、吾妻より良く一ツカ(生産面積又は施肥面積の基準)が一畝半であ根、吾妻より良く一ツカ(生産面積又は施肥面積の基準)が一畝半であ農業は大体自給自足程度で畑作は麦作りが 中心 で、 地味、気候は利

た。 であったらしく「越中槌」としての名称も残っている。麦打ちの賃金は 脱穀の石数によって決められた。一般の者の仕事は「一日米三升」とい 脱穀の石数によって決められた。一般の者の仕事は「一日米三升」とい 脱穀の石数によって決められた。一般の者の仕事は「一日米三升」とい が動力としての出稼者は越後・越中から来ている。仕事は麦打ちが主

切りかえたが、この村には最近まで続けられていた。(昭和十年廃止)により撒播苗代(全面まきともいう)から短冊苗代に稲作は栽培技術の改善として明治三十七年四月三日の罰則付の県令

できらせた。 はおに分け与えたという。田植は多くの人と馬で一日でおまつりさわぎたちに分け与えたという。田植は多くの人と馬で一日でおまつりさわぎ 苗代の種まきには焼米を一家で一斗も準備しておき、集って来る子供

た。又、「契約さく刈」という言葉も得られた。小作耕は地主に半分納めるので「麦もうけわらもうけ」といわれてい

原市組を経て横浜へ売り精算という方法がとられていた。養蚕関係では昭和八年碓氷社倉淵組が成立し、製糸を行ない、安中の

に似た動きをしていた。 買桑、売桑は高崎方面から買い、残桑は吾妻へ、季節の労働力もこれ

、いまです。いいでは、いまないであった。 形に石を組んで取るマヤという方法などが得られた。 漁法ではカワウソのまねから得たカオスという方法、川の中に馬てい

開拓者については苦しい生涯にわたる自然とのかかわりあいについて馬は木曾馬、嬬恋産、北海道産などであった。

二、畑

の資料が得られた。

順に作業が重なるのが春の農作業の順調な流れである。(川浦)農業・川浦のあたりでは、田植え、養蚕(春蚕の上簇)、麦刈りという

った。(長井)ている。前は豊岡が本場だったが、住宅になったので、倉淵が本場になている。前は豊岡が本場だったが、住宅になったので、倉淵が本場にな養蚕をやっている家は、今は一軒もない。今は野菜、特に茗荷を作っ

- 昔は米、麦、ジャガイモ、サツマイモ、ハイモ(里芋)などを主に作った、(長+)

た。白菜や大根などは自宅で食べるぐらいであった。

売りだすようになった。(六区) 十年ぐらい前から、トマト、キュウリ、インゲンなどを大量に作って

い所は、投げ繩で測った。(長井)いう。七つかは一反(十アール)だが、実測すると広い。昔はいかれないう。七つかは一反(十アール)だが、実測すると広い。昔はいかれな田の面積は、三十坪を一升まき、畑は一畝半(四十五坪)を一つかと

かった。現在のように川浦全域に水田が見られるようになったのは、食村の真中を烏川が流れていながら、昔はいくらも米は作られていな

水田はほんのいく枚かある程度だった。(川浦) 水田はほんのいく枚かある程度だった。(川浦) 水田はほんのいく枚がある程度だった。(川浦) 水田はほんのいく枚がある程度だった。(川浦) 、元の野頃神が建てられた。その後、耕地整理は、カミに及ぶようになったの顕頌神が建てられた。その後、耕地整理は、カミに及ぶようになったの顕頌神が建てられた。半時組合長だった宮下さんじ氏が、相当な早く、昭和六年に始まった。当時組合長だった宮下さんじ氏が、相当な糧事情の悪い時代に拡張した結果である。なかで隋原の耕地整理が最も

ある。六ツカで一 反ともいう。(岩氷)面積は地味によって異なるが、一升マキは約一畝、一ツカが一畝半でマキは田についてのみの面積の基準であり、ツカは畑のみである。

クを起すという。焼いたりはしない。焼き畑もない。(岩氷)山林の木を切ったあとや原野、土手などを耕して畑にすることをアラ

麦の収量は、昭和初ころまでは一畝一斗が平年作である。ヒエ、など、何でもとれる。一時的でなく、畑にするのもあった。(川浦)して、そのあとを畑にする。時期はかまわない。マメ、アズキ、アワ、開こんといっても一時開こんで、個人の土地のほんの少しの部分を焼

などは ありょう はずはなかった。 米の収量は、同時期に、一畝三斗といった。 当時の米は「五合ズリ」

では安い値段で売買されていたが、確かに、その畑を所有した人の家でタ、シケツタなどがあった。ヤミダを所有すると病気になり、シニバタタ、シケツタなどがあった。ヤミダ(病田)シニバタケ(死畑)ヒドロツはほとんどないから、米を売れる農家など皆無だった。(川浦)一年中自家用米を間に合わせる農家は少なかった。自給自足できる家一年中自家用米を間に合わせる農家は少なかった。自給自足できる家

ん。(二区) - ヒドロツタ、シケツタは水分が多すぎ、麦が播けないようなところだっ

いへえた(位牌田)はあたま(足)のほうがとがっていて、真中がふ

より後のもので、万力(大麦)といい脱穀に楽な種類があった。きに適。ヨシガラ(大麦)細くて長い穂で、ノギはわりあい短い。それ大小麦の品種(白備前(大麦)改良白麦(大麦)この二種は何れも麦焼の場合にも、縁起が悪いといってなかなか買い手がつかなかった。(水沼)くらんでいるようなかたちの田は、いへえだといっていやがった。売買

までつくっていて粉がよく、赤坊主は丈が高かった。(川浦)小麦では、日本サン、スネッキリ、赤坊主があり、スネッキリはおそく

《ライン、まきつけを計る。 クができると、低くなっている所をヨツゴでかいて土をほぐし(サクックができると、低くなっている所をヨツゴでかいて土をほぐし(サクッをまき) 麦まきは一○月にやった。エンガでヒラウナイをするのでサ

早くには、(昔は)オンガはなく、サンボンゴ(三本鍬--備中鍬)でおパライ)、まきつけをする。

こしてやった。(川浦)

では、これでは、 を表し、これらは秋とれるものなので「夏もできくの間に、さく入れといい大豆、小豆里、いもをまいたり、植えるが麦い、二番ざくの反対に切り返す。田にまいた麦の場合は麦が倒れないよい、二番ざくの反対に切り返す。田にまいた麦の場合は麦が倒れないよい、二番ざくの反対に切り返す。田にまいた麦の場合は麦が倒れないよい、二番ざくといい、土を麦の両側より盛り上げる。畑の場合には麦のさくの間に、さく入れといい大豆、小豆里、いもをまいたり、植えるが麦が悪いときはさくれに陸稲をまく。これらは秋とれるものなので「夏もが悪いときはさくれに陸稲をまく。これらは秋とれるものなので「夏もが悪いときはさくれに陸稲をまく。これらは秋とれるものなので「夏もが悪いときはさくれに陸稲をまく。これらは秋とれるものなので「夏もが悪いときはさくれたと称といる。十一月末に冬ざくを麦の日向側についまり、

二月初と三月ころ、氷がとけたところでやった。 麦ふみ 「麦とシュウタは踏むほど良い」ということばがあって、十

麦のサクキリ(中耕) まのサクキリ(中耕) を背負うときに背中につける「背中当て」のことをシュウタといった(」になってからやるようになってきた。(川浦)を結びつけていったことばである。(川浦)シュウタとシュウト(姑)を結びつけていったことばである。(川浦)物を背負うときは、よくふんでつくると背中になじんでよいことから

冬 ザク 十二月にきるもので、陽当りのよいように日向ザクとす

サクレイ

麦の作の

二番ザク 一番ザク 三月、氷がとけたところで日陰ザクにきる 除草をかねて日向ザクにきる

三番ザク 日陰ザクとする。

をかねた作業になっていた。しかし、三回のサクキリをするのは熱心な 当時は、麦の土入れはしなかったので、三回の中耕は、除草と土入れ ふつうは二回だった。(川浦)

ら乾燥した。(川浦) ぐにまるいて家へ持ちこみ田畑での脱穀はしなかった。うちおとしてか 大麦が六月末、小麦は七月になってからで刈ったものは、

てはたき、大麦の場合には、麦を両手でにぎってはたいた。 麦はたきの台にぶつけておとしたが、小麦は小さな束にし (川浦

た。一人一日一石から一石五斗ぐらいであった。(七区) 麦打ちは普通越後の人を頼んで麦打ちを行なった。一斗いくらできめ

これを防ぐにはアワゴセエをした。

してまくのがよかった。バラ肥にしてまきつけると芯枯れになり易くて、

くいやになった。(川浦 貸したりする者がいた。やっているうちにすぐのぎっぽくなってよくよ 最後にクルリでこぶちをする。ソバ打ちのうまいものはよその家に手を には日なたで乾燥させて、物置きに入ってはひっぱたいた。大麦などは 踏み機械だとか脱穀機などは無かったから、天気の良い日

をよく乾かしておいて、 中槌でぶってこなした。焼き麦には、 落した麦は、かますに入れておき、他の農作業が一段落してから、越 麦焼き 昭和になってからやるようになった。焼き麦をするには、麦 天気のいい、暑い日に焼いておとした。 焼いて 改良白麦、白備前がぐあいよかっ

用につくられ、売ることはほとんどなかった。(川浦 小麦は、おやつ用・うどん用につくられている程度で、 麦の作付割合 麦の作付割合は、大麦七分、小麦三分で、大麦は主食用、 全体として自給



ぎり 水で うすめて使う)(二区) (阿部

撮影) 小豆・里イモなどをつ 間に、間作することを、 サクレイという。大豆・

ものであった。(川浦) くった。(水沼 も、柄杓で流してつく にして、手でまくより るくらいのゆるい肥と イと同じようにタレ肥 量は、一畝一斗という 栗づくり アワの収 麦まきのときのザゴ

アワムシリになってしまうことが多かった。(川浦) の暑い時期の仕事で、ふだんでもいやなのに夜遊びの後のアワゴセエは、 してからクルリでたたいて脱穀し、むしろの上でほした。こうしてか 一かたまり五本か六本くらいに選別して土入れをした。八月の土用最中 アワゴセエは、除草とウルヌキ(間引き)と土入れとが一緒の作業で、 粟は根から刈りとった後、ホキリといってほうちょうで穂を切り、 五穀の一で、穂切りで刈りとり、クルリで脱穀したものを煮て馬

すればよい。粉にしたものをダンゴにつくるとうまい。(川浦 朝鮮ビエはほとんど正味で皮が少ないからすぐにクルマヒキ のえさとした。

らクルマ(水車)でついた。(川浦

まりとれなかった。秋麦をまく前にやぶを刈って、山積みにして、灰焼 過燐酸とアンモニヤぐらいしかなかったので、麦をまいてもあ

きをして、その灰を取って入れたり、 素足で踏みこんだ。 かっちきといってくろの草を刈っ

から冬にかけては木の葉(くず)をふませて作った。青草で直接肥料と 肥料は主として馬屋ごいが主であった。 カンソウ、コクサギがあった。 夏は青草を刈ってふませ、 秋

桶の中でまぜ合せてそれを手で一株ごとになるように置いた。(二区 麦をまく時には、 葉が落ちて十二月から三月の間の青草の出るまで、 下肥、 堆肥、灰、種をタテオケ又はハンギリという <

堆肥作りをした。(二区 柏木山を大正六年に申請して民地に払い下げた。各耕地で下刈りをして の湯をかけたりして堆肥づくりに苦心した。量は一定していなかった。 ずかきをつづけ、くず小屋に入れておき、これを馬にふませたり、 風呂

山からクズ(落葉)をショイカゴにつめて運び、クズ小屋に入れてお クズは牛や馬にふませて堆肥とし田畑に入れる。(六区

ソヤキという大きくなる草があり、それを刈って来て田に踏んごんだ。 一升まきの田に一ダン(六・七束)が標準である。(岩氷 カッチキ 昔の肥料はカリンサン、堆肥とカッチキが主であった。

きに主として使用したが残りは翌年の苗代用となった。(二区 二俵作らないと一人前でなかった。非常に重労働であった。これは麦ま や灌木を刈り、これを焼いて灰を作った。一日に一人で二十貫詰め俵を 灰焼き 九月から十月の麦まき前の雨の降りそうな日に山に行き、 草

うにこねたものがタレ肥であり、これを肥桶に入れてまいた。タレまき を入れてやわらかくねって、この中へ麦種を入れて、麦種の見えないよ きれいに作った堆肥、 (川浦 (バラ肥)を半切桶に入れ、人糞尿や小便

してこまかくしたものへ、人糞尿をよくかけ、イロリなどでよく火を燃 使った。麦まき用として大量の堆肥を積んで作り、切り出してよくかえ 堆肥をもとにして麦まき用の肥料をつくりこれを麦つくりに

> 乾いたままで使う。 すのでたまった木灰を入れてかきまぜてつくったものがバラ肥である. (川浦

いた。(川浦) られた。10月の冷い朝ふませられるのはきついことで、これを田畑にま ておいたものなどを燃して暖をとりながら半切桶の中をはだしでふませ コイ踏み タレ肥をつくるのは朝早いうちの仕事で、古わらじをとっ

おはぎをつくったり、すしをつくったりして祝った(水沼 儀礼 アナップサゲ、ムギまきが終ったとき、アナップサゲといって

は数名のものでおこなっている。 が地神講をおこなっている。もとは二十人ほど加人者があったが、 地神講は地神様のおまつり。地神様は百姓の神様。 むらうちの希望者 現在

りをしている。もとは、春は、地神様が来た晩(祝日の日)におまつり し、秋は、祝日の前の晩におまつりをした。ごちそうはあずきげえ。米 (五合ぐらい)をもちよせ、あずきは宿でだした。(水沼) もとは、春と秋の祝日の日にやったが、現在は春の祝日の日におまつ

は祝日だから今日のうちに仕事をすませておこうといった。(水沼) るなといった。ほかの仕事はしてもよかった。祝日の前の日には、 はたけの神様は地神様。祝日の日に祝った。この日には、はたけを掘

どに奉納した。 の所へまた突っとうしておく。そうして次から次へ人の手を経て神社な から道を歩く人がそれを見て持っていって、イイカン(いいかげんの意) オクリバタ 道はたにオクリバタが時々あった。奉納先が書いてある

農業関係のことば

など。(七ツ石)

きおこわ)アズキボートー

祝い月日 イワイツキヒ(もの日)に、よく作るのがニゴワメシ(炊

(オツミッコの入った汁粉)うでまんじゅう

つくりっぱ

田 たんぼ

畑

という。なにもつくらないはたけのことは、あきっ 桑園、くわばら、桑原でないところは、ふつうはた

かいこん、あらく

ぱたけという。

開

田畑の一

一区画

一まい

広さ (むかしのいい方) 〇升まき

(五升まきが五畝、 一斗まきが一反

3 〇ツカ (一ツカが一畝半)

田の場合は、くろ、 は、はたけきわ、きわという。 たんぼっくろ。 はたけの場合に

ヒトケ

毛 フタケ

の深い田 ヒドロッタ(水沼

くなる頃に蚕が出る。雀がくしという。 柿の木の葉が大きくなって雀が柿の木にとまっているが見えな

石津の金毘羅様の桜が咲くと里いもを出す。(岩永

はほとんどない。 霜はシモバがありそこが毎年やられる。下道・北原がよくやられ上野

農事試験場から警報が出るとゴミなどを燃して煙を出して予防とした 余り効果はなかった。

八十八夜の分れ霜とは言うけれど八十八夜すぎの十五日頃まで霜は来 (岩永)

ハニワがよく出るので、 開拓 大正四年蘭津へ入植した。岩焼きしている家が一軒住んでいた。 大むかしにもここに人が住んでいたのではな

父親が木挽きをして山から山へ渡り歩いていたが、一ヶ所で落付いた

暮しを願って入植した。 夏は開墾をし少しづつ陸稲やジャガイモを植えた。雑木や葛っぱやぶ、

> 竹の根っこを掘って畑を開き、一町歩を開墾した、と親父に聞いた。道 冬は金工面して山を買ってこなし(杉の皮をむいたり、木挽きをやとっ 始めはサガラ一丁きりなかったが、少しづつ買い揃えた。

て製品にして売る)カネどりをした。 朝起きると親父さんは山へ行って居ないし夜はおそくまで働らいてく

るから、 ろくに顔を見る事もなかった。

全部自分で挽いて二階も建ち上げた。四寸角の柱が一本一円だった。 れを借りて住んでいた。のち、平家を買って家を作った。木挽きだから、 つけて迎えにきて貰ったりした。友達が居なくて淋しいと思った。 の学校へ通った。朝早く学校へ行く時は送って貰ったり、ちょうちんを 学校 農地 馬がやっと通れるだけの道を朝露でショータレになって三の倉 戦後の農地解放で自分のものになった畑もあるが、田はその前 始めは地主の梨原があり、二間~三間のお休み所があって、そ 細入りにあった水車をかりて麦を割ったり粉をひいたりした。

に自力で買った。 入植当時一町歩、今は二町歩と少し。

かかっても食い切れないようなのがとれた事があった」 た。「この鉄びん位(直経二十㎝位)の大きいのがとれて一個煮れば家中 通信 入植当時は陸稲が割合よくとれて売った。 農産物 全戸有線放送電話がつき公社の電話が四、五軒入っている。 郡農会の指導でコンニャクやジャガイモを作るようになっ

ていた総領の兄が死んで、私を頼りにしていた。 悲しかったこと 親父さんが死んだ時がとても悲しかった。頼りにし 今では野菜類を出荷し、最近百合根の栽培を始めた。

死ぬ時は「ぜひわしを抱いてくれ」と言うのでしばらく抱いて寝てやっ

いちばんふさわしい戒名だ、と言って坊さんが開林鉄心居士とつけて



孝

(阿部 撮影)

少しだけ雨が降ってきた。 そろ降るかもしれないけ びんかと思った。「もうそろ の夜、三の倉でもパラパラ だめだ」と言ってたが、そ に光っていて銅で作った鉄 えるものではなくつややか 付記。 もっと赤くさびなきゃ それはさびたと見

当らぬ所はない」と言うが、ここは丸見えだから風がよく当ってる。 上蘭津開拓地で 浅間が見える所で風が (以

分家一戸になった。平均四町歩だったが、 昭和二十一年十一月十六日に入植した。 今は二町二、三反である。 当時は三十戸、今は二十六戸、 (相

稲

作

ぶれない)アイコク 稲の品種 ジンバ、セキトリ(米はよいがつぶれる)ヒコボーズ(つ (収穫は多いが味はよくない)リクウ(味はよいが

という技術員が持ってきてつくらせた。 品種を植えて雑多なものだった。 クロモチ、 蒲原モチなどが古く愛国六号というのは、 (川浦 わずかな村の田に、 何種類もの 豊田

> 米ができ、 ホウネンが多い。ササニシキやトヨニシキも作っている。 一等米や献上米が出た。 (岩氷) 岩氷はい

に賃金を出して頼んだ。 代かき ハンドリとシンドリは家の者でやり、 テンガモチを村内の人

気の関係でさびるのだろ 赤くさびると雨が降る。

天気

いろりの鉄びんが

させた。 てやりしまいに湯をさす位。 代搔きがすむと馬が疲れたからたらいで行水をしてやっ ヒエを煮て切りワラと草にまぜて馬に食べ た。 水で洗

がわけば土がやわらかくなるものだが川浦の田はそうならない。そこで け馬では参ってしまう。 よくかかないとこごり(塊)のままで、 カシロ三回が加わり、すべて力を入れ、 アラクレ五回、 山間の田なので、田植えをするときは、 ウエシロ五回はふつうの人でもやる。ていねいな人はナ (川浦 真剣にかくものであるから腰ぬ ふつうの田ならば夏の暑さで田 よくかかないと土がモエない。

の卵を取るために短冊形にまいた。その際、 苗代 明治四十年までは苗代に全面に播種した。 短冊の端に生えているショ それ以後は、 ず 13 虫

ウブ苗えは分けつしないから植えるなといわれた。(二区

でも、 に向って「福は内」をするように種をまいてやる。せまい田でやるわけ 苗代で種まきをするとき、 ものぐさの人はかなり最近までやっていた人がいる。 一面にまくので苗にムラができた。 昔は、田の縁(畦)に立っていて、 後に短冊にまくようになった (川浦 田 0 中

氷 四月苗代といい、 四月末から五月初めにする。節句前に終らせる。

ということらしい。 うすくまくと、 苗代にはもちを植えるなと言われていた。それは、 しょうぶ苗が出来るといわれた。そのわけはわからな なお、苗代は最後に植える。 苗じったといわれてい しりもちをつく

昔の苗代づくりはたいがい五月で、五月の節供がらまりだった。(川浦 苗代づくりは五月節句までにする。水苗代だった昔は、 田の広さも

た。(現在はその三分の一) 籾種の量でいうので、一升マキといえば一畝のこと、種籾は一升おろし

んで立てた。(川浦)は、棒の割れ目に峠さま(碓永峠の権現さま)のカラス午王の札をはさは、棒の割れ目に峠さま(碓永峠の権現さま)のカラス午王の札をはさる、春のときに

いいモチ米がとれるという ねばり けの 強いのが できるといった。(水また、モチはヒドロにつくれという。ヒドロッタはわき水がつめたい。モチは苗間の水口のほうにまいた。モチのほうが冷水に強いという。

水口のクロにハラミバシも立てた。(岩氷)てケーカキ棒にさして立てた。鳥が籾を拾わない様にするのだという。苗代の水口に峠様を立てた。千羽鳥のお札を碓氷峠の熊野神社がうけ

古代を作った―種をまいた―日に苗代餅をついた。

(おな)いって重箱に入れてしんぜる。供えた後、人々がそこで豆と米を食べた。いって重箱に入れてしんぜる。供えた後、人々がそこで豆と米を食べた。苗代の水口に正月のケーカキ棒をたてる。ケーカキ棒には、豆と米を

にくれた。子どもは種まきの日は楽しみにして集まって来た。 苗代の種まきの日には、豆いり、焼米を一斗も準備して、子どもたち

に荒されないようにした。(川浦)の鳥の絵のあるお札、カラゴウを受けて来て家の入口にはり、苗代を烏焼米だけ食べて、中に入らないように願った。峠様といわれる能野神社苗代の水口にはかゆかき棒を立て、焼米を供えた。鳥に、この供えた

なごでで差して苗代にごみが流れ込まぬようにする。昔は焼米も供えた。(二べて差して苗代にごみが流れ込まぬようにする。昔は焼米も供えた。(二まゆ玉を差しておく。なおカユカキ棒の間には、小正月のカニカキ棒を二本立てて、その上部の割目に、苗代の水口には小正月のカニカキ棒を二本立てて、その上部の割目に、

てる。おさごとおかしらつき(にぼしでもよい)を、かゆかき棒の上にかゆかき棒は神棚にあげておいて、苗代のときに苗間の水口に二本た

して、豊作を祈ったのである。(水沼)きに、なんという神様にお祈りするのか、名ざしではいわないが、こうきに、なんという神様にお祈りするのか、名ざしではいわないが、こうき棒のあたまに、熊野神社の烏午王のお札をはさんでたてた。苗代のとのせておそなえした。ご神酒も水口のところにしんぜた。また、かゆかのせておそなえした。ご神酒も水口のところにしんぜた。また、かゆか

ざくの四寸五分巾であった。(七区)升なえ一日、なわを張れば四升なえが一人前の仕事だった。当時は八寸十人から二十人位い頼んだ。一人で植える量は、なわを張らなければ五田植え 昔は沢山の人を頼んで一日で植えた。馬三頭で植代をかき、

。。権田タンボは六月十五日から二十日までに植えればよいといわれてい

きまっているのでよいという。機械植えだと、病気にならないという。また、苗間の時反別の肥料がてもよいので、十日以上早くなった。五月下旬から六月十日前に植える。三、四年前から機械植えにした家もあるが、その場合は、苗が小さく

田植えの日には、親戚や懇意に赤飯を配る。

ンガ洗いといわれるのをさける気持が強い。田植えの一番遅い家のことを、「あすこがマンガアライだ」という。マ

らという。
成の日に田植えをしてはいけない。葬式のところに使うようになるか

われた。田植えの手伝いの人を集めていた。(六区)人手の足りない時は、屋根屋の松っあん(塚越松太郎氏)に頼めとい

た。えいの組は昔から決っていて相互扶助を目的とした。頼んだ家でたいてい赤飯をふかし三度三度ご馳走してお祭りさわぎだっ倍になる。近所の人を頼んで、多い時には二十人ほども集ってくれる。田植はえいでやる。馬一頭に人二人で一反歩とすると五反歩あれば五

ジー 川浦は水も豊富で、田植え時期のおくれるということもなかった。(川川浦は水も豊富で、田植え時期のおくれるということもなかった。(川

田植えは六月十五日を中心に十~二十日の間にする。六月中には終り

半夏までのびることはない。ハンゲについては言わない。

葬式の米になる。 一戌の日に田植えをしてはいけない。戌の日に田植えをしてできた米は

を払った。一人一日四升マキが田植えの基準である。(岩氷)川浦の方が田植えが早いので、川浦から手伝いに来た。植え子に賃金

んでしまう。(川浦) 苗のわらの輪の中に植えるとコウデになる。この輪は田の中にふんご苗代をつくって四十日から四四・五日くらいで田植えをする。(川浦)

がひと仕事だった。(川浦)苗はその日にとってその日のうちに植えるのだから、苗とりをすることて四畝、なわはりをせずにどんどん植えて五畝が一人前の仕事だった。ク(本職)といった。一畝当りいくらという賃金で、苗とりをして植え田植えの時、植えるだけを請負う人がいたが、この人のことをホンショ田植えの時、植えるだけを請負う人がいたが、この人のことをホンショ

更う。(川甫) エバは必要な量だけ施主がつくって出してやった。新しいわらを切って 苗をしばるわらのことをナエバという。すべて請取りであっても、ナ

われ、それだけ増収になるとされていた。(七区)されていた。「曲り八石、くねって九石、まっすぐ植えれば十石」といをとる」といわれる。田植えは四十日目から五十日目の間が一番よいと田植えは播種より四十二日目は「苗日」といい田植えを忌む。「苗が年

つ。しりもちをつくといった。(水沼) 苗代のあとの田をネエジッタという。そこには、モチをうえるなとい

サカサうえをしてからすればよいといっている。(水沼)ハンゲ前に田植えをしろという。半夏の日に田植えをする場合には、

デバンのめしになる。. 田植えは戌の日にしない。この日に植えると葬式の一田植えを忌む日 田植えは戌の日にしない。この日に植えると葬式の

してから四十九日は苗代に手をつけない。(二区) 又、犬はよくかきまわすので収量が少くなくなるのできらった。播種

て、田植えをしないようにしたというはなしがある。(水沼) いい稲穂があるので、もちかえって種子にしようとして、もちかえろういい稲穂があるので、もちかえって種子にしようとして、もちかえろうお田植をイヌの日にしてはわるいという。これをハゲンうえという。なお田植をイヌの日にしてはわるいという。これをハゲンうえという。なお田植をイヌの日にともいう。ハゲンの日(半夏の日)に田植えをする場合にしないようにともいう。ハゲンの日(半夏の日)に田植えをする場合にしないようにともいう。これをハゲンうえをイヌの日が悪い。そこのちに病人が出るという。また、ハゲンうえをイヌの日が悪い。そこのちに病人が出るという。また、ハゲンうえを

苗代に種をまいて四十二日目をナエ日といって、この日には田植えをするなといった。縁起が悪いという。(水沼)苗代をしてから四十九日目をナエビといって、この日には、苗取りを

イヌの日には田植えをしない。マクラダンゴになる。ダンゴをイヌが仏にちなんだような日には田植えをしない。

食いたがるから不幸がおこる。(川浦

しない。

田植え祝い 田植えの最後に田植の終ったうちのことは、マンガアラら、おさご、おかしらつき、こ神酒を苗代の水口にたててあるかゆかきら、おさご、おかしらつき、こ神酒を苗代の水口にたててあるかゆかきなお、むら中で、一番最後に田植の終ったうちのことは、マンガアラった日にうちへ帰ってからは、田植祝いをした。田植仕事をした人たちをよんで、うちでごちそうをだして、大にぎわいをして祝ったものである。よんで、うちでごちそうをだして、大にぎわいをして祝ったものである。よんで、うちでごちそうをだして、大にぎわいをして祝ったのとのである。 田植え祝い 田植えの最後は苗代である。 苗代のしろかきが終ってかてだといった。 (水沼)

その晩には酒を出して祝う。田植えの朝は、こわめしをふかしてごちそうをつくる。

機械で植えるようになってからやらなくなった。(川浦

酒を供えた家もある。(川浦)田植えの日には、「田植えだからお神酒を上げろ」といって、神だなに

実際にはしない。田植えが終っても祝事めいた事はしない。 マンガアライは田植え終了後マンガを洗って床の間にあげるというが

> (六区 稲刈り

十月十日ごろ 足踏み脱穀

田植えの一番遅い人の事をマンガアライといい、名誉なことではない。

出穂水をかける。 出穂一ヵ月前に水をおとして一週間位土用干しをした。

の稲だけ育ちが悪くなってしまう。稲刈りの時になってもそこだけまだ 土用干しをしないで水をかけ流しにしておくと、 水が冷たいから水口

も使ったがハッタンドリはサクのまん中の草をとるだけで、 だけでニバン、三バンは手でやった。 とカブツの間とか、近くはとれずにそこは手でとった。 田の草とり 普通は三回だが熱心な人は七回もやった。ハッタンドリ 一バンに使った 稲のカブツ

今は除草剤をまいてヒエヌキをする位である。 (岩氷

する。 田の草とり 一番どり、植えつけて一〇日から一二日ぐらいのときに

月いっぱいで田の水を切った。 にやる。どんなにおそくなっても、二五日より前にしたもの。もとは七 三番どり、 二番どり、 毎年、七月二一・三日ごろが農休みなので、そのころまで 一番どりから一〇日目ぐらいにするのがよい (川浦

柱に吊してカマ神様に進ぜる。(岩氷)

もとはカナゴキでやった。箱になっているコキを使い、手に持っ

が順調なことだった。 かった。「二百十日のハシリッ穂」「二百十日の穂ぞろい」といわれるの 植えもおそく、 月おくれのお盆にいくらか穂が見えればといったが、 しかも晩生種をつくっていたから現在よりもかなりおそ (川浦) 当時は田

のほうの耕地の水をもたせるためのくろであるからという。(水沼 るものが七分、 畦畔の草刈り 草ソウヤク 水下の田の利用者が三分の権利があった。それは、 田のクロの草刈りをいう。夏は朝四時起きをして刈った。 田のくろの草を刈る場合には、水上の田を利用してい 水上



(阪本 英 撮影)

イに干す。ヂボシはしない。 特に長いか稲の多い、みのりのいい稲穂を四・五本の一カブツをカマ らする。刈った稲はハンダ ら脱穀した。(川浦 の農作業がみんな終ってか とすというが、麦まきなど はヒビ米ができて品質をお 最適といい、あまりほして デエにかけて乾燥させてお 束ねて集めた。現在はハン 稲刈りをした。 く。刈って十三日ぐらいが 干し)で、稲が乾いてから 機の入る前はカッポシ(刈 刈り入れは十月十日頃か

りを行なった。労働としてはきびしかった。(二区) 降ったから、スルスでも引くべえ(籾すりの意)」などといいながら籾す 一人一日玄米二俵作ることが普通だった。冬の仕事で「雪が 穀機は昭和六年あたりには入っていた。(川浦

ハンデエにかけたものは直ちにもみすりをすることができた。足ぶみ脱 が籾の量である。カッポシにしたものはこの後で籾をほす作業があった。 駄ぐらいしかやれなかったようだが、稲一東五升、一駄三斗というもの た稲をひねって、穂をひろげてコキに入るようにしてこいた。一日に三

昭和の初期ころの収量は、平均で一畝三斗、 四斗とれるというのは本

いっている。(川浦)当にいい人の田のものだった。しかもモミの量である。現在は畝一俵と

た。赤い米で細長であった。米は取れないので明治四十年には南京米という米をみんな買って食べ果の上田より持って来てまいた。明治三十九年に兵隊は帰ってくるし、県の上田より持って来てまいた。明治三十九年に兵隊は帰ってくるし、と野也がの年の作柄といえば明治三十九年の凶作で、五升まきの田六畝十

あった。(二宮) 明治三十九年に作っていたものは玉村から来たもので、おくいねで

の言われた。(二字) うように「サクガリ」という言葉があった。又、「ケイヤクサクガリ」とうように「サクガリ」という言葉があった。又、「ケイヤクサクガリ」とる。 小作料は刈分けといい、地主が三さく刈ると次に小作が三さくといる。 小作 小作関係がはじまる時期は四月で、小作上げは三月彼岸に始ま

聞いたことがある。(第一区) 聞いたことがある。(第一区) 時料をとったという話を聞いたこともある。畑は小麦二俵ぐらいであったが、大豆とか小豆とかもあったし、手間で小作料を払ったという話も聞いたこともある。畑は小麦二俵ぐらいであったが、 反四俵ぐらいの小作料であった。また田を半分ずつ刈って、小田は、反四俵ぐらいの小作料であった。一畝で一俵はとれない。

たてた。地主は馬を連れて秤を持って取りに来た。(七区)較的目方があった。昔は味がよいとか悪いは言わず量のみを考えて取りて取り上げた。一升が何匁目かで計算して取った。愛国という品種が比方法がおこなわれ高くて収穫の半分以上は取られた。地主は、秤にかけカリワケは大正時代のころまで、小作料の支払いに、カリワケという

であった。籾俵は四斗俵で十三貫であった。小作料は大正になってから玄米で納めるようになった。それ以前は籾

これは、田(稲作)にかぎってやった方法で、適当の日をきめて、小小作料は相対で決めていた。高い、安いといっていた。

た。稲の束を運ぶのは各自でやった。(水沼)地主例五さくずつ、刈りわけたもの、さくの長短は適当に勘案して分け作人と地主と折半で、稲を刈ったものである。たとえば小作人例五さく、

一毛田では一反歩四俵納めるが二毛作では麦がとれればよいとされて盛んに言われていた。一反歩玄米で五、六俵が普通だった。良い田で一升まきの広さで二斗五升であった。昔は小作料ということが小作料は悪い田の籾で納める小作料は、一升まきで一斗八升から二斗。

広い」と言った。(二区)いた。麦小作はなかった。安い田は面積が広く楽だった。普通「ツラがいた。麦小作はなかった。安い田は面積が広く楽だった。普通「ツラが一毛田では一反步匹俵がめるカニ毛作では麦カとれれはよいとされて

用水 水の便はいい所であり早魃は余りない。堰普請をすれば水は田

岩氷では三本の用水がある。

いている。いているのは天満堰と中部用水で浅間神社の下から水を引いている田が最も多い。江戸時代からの用水で浅間神社の下から水を引にいるのは天満堰と中部用水である。天満堰から水を引

こう夏というのは目引ーニューンで、ドルションに産死している。の政策が始まり水田は増加しない。桑本から引水している。中部用水は昭和三十年から始め四十年頃に完成したが、米の生産調整

にひくというかたちにしたのである。(水沼)をつくっておく。ヌルメに一旦水をひいておいて、あっためてから苗間をつくっておく。ヌルメに一旦水をひいておいて、あっためてから苗間のために、苗代をつくるときに、もみをまくところとはべつに、ヌルメージをつくっておく。ヌルメに一旦水をひいておいて、本九を中心に灌漑している。上野堰というのは相間川から引いて、本九を中心に灌漑している。

の番をした。期間四月末から五月中旬までであった。昔は田に自分勝手に水を引いたので水げんかがあった。寝ずに水引き

こ。(こえ)は米がとれない」つまり天候がよくなく、冷害等におそわれる心配があっは米がとれない」つまり天候がよくなく、冷害等におそわれる心配があった不足であったので「中尾と小高 (地名)の田が植えられると、その年



英

撮影) 嫁を里へお客にやっ しが終ってから、お は、赤飯、もちある もたせてやるもの いは米などである。 た。このとき、嫁に 節供のときのように

のがふつうである。(水沼) うかたちをとらないで、仕事の区切りがつく度に、けじめをつけている をしてやった。秋のとりいれの終るのをまってそうした。最近はそうい 賃をとってくれない場合には、おかえしとして米をやるとか、ごちそう を、ご苦労よびといった。この場合、仕事を手伝ってくれた人が、手間 くれた人は、 イネこなしがすむとよんでごちそうをしてやった。これ

一年中農家の手伝いをしてくれた人に、アキアゲという習慣が

をするので、アキアゲはやらない。 やることである。親戚の者にはやらないし、農家の場合には手間がえし 農家の人)に、日当を支払わないで、米を五升とか三升をもっていって この時期は家によってちがう。これは、手伝ってくれた人(近所の非

ていない。(水沼) 終戦前までやっていたことであって、現在はおこなわれ

仏様に供えた。(岩氷) ニワコロガシ
秋のものが終ってからオハギを作って祝った。 神棚や

ワッコロガシという。(第一区 秋の仕事が片づいたときは餅とか饅頭をつくって祝う。 この事をニ

千駄のこやしより一刻のしゆん(水沼

小麦の花ざかりに大豆をまけ。(水沼) アズキをまくは八十八夜のころ。(水沼

イネこな

Ш

四

盛期は四・五十人が焼いた。 木の葉の落ちる十一月から四月頃までの農閑期にやった。 全

に大きくやっていた。 には大きいモトジメが多く、 は石津の佐藤覚太郎・塚越米吉(湯ヶ沢)さんが岩氷ではなった。 モトジメが資金を出して焼く人が山を買って炭を焼いた。 川イゲタを屋号とする藤巻藤次郎さんが特 川浦

農作業を手伝って

まると小荷駄で下へおろし、モトジメが売却した。 炭を焼いてカマニワで目方もはからず俵ぷりで詰めて、二・三十俵た

会社へ出した。柳川町の鈴木へも出した。 榛名町宮谷戸のタテバに運送屋が多く、 その人達が高崎の炭屋・燃料

しまう人もあり、 そこで金が入ると精算した。中には炭をモトジメへ出さずに売払って モトジメが食われ損をすることが多かった。

モトジメを頼まずに自己資金でする人もあった。

炭の種類にはシロズミとクロズミとがありシロズミの方が硬質で価格 統制時代には農協で扱い、そこで資金を出した。

は高い。 大概一人で泊る。 場所が必要である。三六(サブロク)のカマだと四坪位は必要とする。 からであるが、 自宅から一里位だと通った。それ以上遠くなると泊りこみでやった。 炭を焼くカマを作る場所は川に近い所を選ぶ。壁を塗るのに水を使う シケていてはダメ。又、材木を集めるので或る程度広い

カマが一番小さい。 シロズミのカマは石をつみあげて作る。サブロクといい三尺・六尺の 一度に四・五俵分の炭が焼ける。準備や壁は一人で

から一週間位かかる 仕上げの天井をつくる時には仲間を頼み三人位で仕上げる。 準備

伝ってくれた人やモトジメを呼んで一杯飲む。大きいカマを作る時にカ マに供え物をする位で、余りカマでの祝い事はしない。 天井があがると天井祝いといい十二講をする。 炭を焼く人の家で手

は使えずに毎年新しく作り直す 作業が終るとカマをそのままにして帰り、祝い事はしない。 古いカマ

ミでなければいけないという。 番目クリ・マツズミが四番目で悪い。ウナギを焼くのはクヌギのシロズ 原木は毎日その日焼く分を切って生木を焼く。クヌギズミが一番よく 原木を直径十センチメートル、長さ一二〇センチメートル位にする。 ナラズミが次で、ゾウズミ(雑炭)はそれ以外の雑木を焼くのが三

細いのは束にする。カマの中へタテマタで立てる。

炭焼きガマ(岩氷) 白ズミ用の土ガマ

幸男 撮影

がってくる。カマの中が熱 ると天井から火が燃え下 か焼いていると原木を入れ と石を積んでカベと土をま ョイコミをやる。 ぜたもので密閉する。何回 シからユゲが出始めカマが べて口モシをする。ケブダ いのでミノをつけて木のシ 焼けて天井がまっかになる 原木が詰まるとソダをく

色いカライケブが出て、 煙はイドリケブといい黄 一昼夜燃して出す。 次

ヒガ

に白いケブになり、 最後に青ケブになる

らタバコを吸ったりして、セイレンをくれながら徐々に出す。 り、上は青くだんだん赤くなる。上まで赤くなり更に金色になると炭を 出し始める。カキダシで出す。一度に急に出さないで中の様子を見なが て、中の状態を見る。セイレンをくれるという。 カマニワに出した炭に土をかける。ナマツチ(生土)だといい炭にな 煙が切れ始めてからカマの口に小さなメド穴を二つあけて空気を入れ カマの下の方が赤くな

らず焼土や灰がまじるといい。

十俵出る位のカマを作る。土ガマは長く使え十年以上使っているのもあ クロズミは土ガマで焼く。トハチ(一丈・八尺)が小さい位で二・三

見はからって炭を出す。 その前で火を燃してカマを焼いて中の木を焼く。壁が二重になっている。 ンをくれ、その後また密閉して数日そのままにしておく。仕事の都合を で炭化したことがわかる。ケブが切れると小壁に穴をあけて中にセイレ 外の壁のカマの口(オオアナという)の所で火を燃す。ケブの色や匂い 原木を詰めてから口をとめ、小壁(ショウへキ)を作って中を密閉

炭俵は家で作ったり、炭を焼かない家の女衆が作ったのを買った。

今は山で焼いている人はいない。原木を持って来て家の近くで焼いて 一冬に二・三百俵位は焼いた。五百俵までは焼けない

氷 最近茶道で炭を使うのでその為に焼いて送ってやったことがある。

いる位である

するには好適な炭といわれ、 て炭にする。ちょうど消し炭のようにやわらかい炭で、鍛冶屋で刃入れを 少し凹くした野天に積み、火をつけて燃して、オキに砂をかけて火を消 をこまかく切って割って調整したもの 昔は、鍛冶炭というのを焼いた。栗の木のサナレ(立ち枯れになった木 家庭用には不向きなものだった。 よく乾いているものを、 (川浦 地面を

時にはあった。普通はサブロクかトウハチであった。(七区) 大きさは、三六(三尺×六尺)トウハチ(十尺×八尺)二俵焼のかまも 越後から十月頃来て三月まで焼いていた。白炭が主だった。炭がまの

る人もいた。戦後になってカマが大きくなった。(川浦) た。ほとんど白炭だった。せっこうのいい人はふたがま一緒にやってい 昔は石ガマで焼き小さいのはヒトカマ五貫匁俵で三俵くらいからあっ

幅七尺)と、トハチ(奥行一〇尺、幅八尺)というのがふつうに使われ 炭がまの大きさ カマの大きさはいろいろあるが、シチク(奥行九尺、

て出せばよい。(川浦 天井上げの祝いをして酒一~二升出すが酒肴は適当なものを見つくろっ 伝いあってやる。うっかりするとぬけてしまうので真剣にやる。 天井上げ 炭やきガラの天井をつくるときは、 炭やき仲間が互いに手 終ると

な木は割るのでカケヤとヤ(クサビ)がある。カケヤは、大きな木のコ スミフルイショウギなども炭やき道具の一つである。(川浦) タテマタを使う。炭をかき出すイブリ、オオガキ、炭を入れる時に使う ブを使ってつくる。ヤには鍛冶屋につくらせたカナヤもある。小さいカ マで焼く時は、カマの中へ厚木を入れるために木のふたまたを利用した 炭やき道具 木を切るためのノコギリ、マサカリ、ナタがあり、大き

ちがよく、長もちする。(川浦 が使わない。かたい炭は重さがあるので量は少なく、俵も細いが、火も 炭の良否 木炭のよしあしは硬度でわかる。硬度計などもつくられた

ニワ(カマの口の前の広い所)にかきまとめ、この上にゴバイをかけて のをイブリという木でつくったカキダシ棒でかき出し、オオガキでカマ るが、壁に穴をあけて風を入れてやって赤くして、完全に赤くなったも 消したものがシロズミ(白炭)である。(川浦 白炭 カマにつめて燃して、燃えている時は黒い状態でむしやきされ

クロズミ(黒炭) カマにつめて燃すのは同じだが、 燃えたあとは口

> るのを待って出す。 をしめて火をとめる。空気が入らないので中の火は消える。カマが冷え

すので暑い中へ入るので、外へ出るときはホウというくらいになる。うっ る。(川浦) ○銭の時炭俵一銭五厘、 れぞれを専門にするのがよい。婦人や老人がやることが多い。炭一俵三 悪く、一日二〇俵編むのが精一杯という。萱刈り、 くって売る家もある。なわをなったり、萱を刈ったりして編めば能率が たっかわ(二列)くらい出すころにはようやくおちついてくる。 かり水をかぶって入れば、かえって熱をよぶのでよけいに暑くなる。ふ いたしたくでカマに入る。点火を早めるためにカマを冷さないで炭を出 黒炭のカマ出しぼろ着物を着て、麦わら帽子をかぶり、 炭やきをする人やその家族が、自分たちでつくる家もあり、 五○銭のときが二銭、現在は八○円くらいであ なわない、編む、そ (川浦)

炭やきのことば

ヒザイシ ワ 燃し口(点火口)のところの石 カマの前のちょっとした広場

カマの屋根にあたる部分

エンドウ 煙の通るみち

ケブキリ石 バ カマの奥の方の穴の下のところの石

にかけて火を消す砂と灰をまぜたもの (川浦

カマから出した赤く焼けている炭をニワにおいて、

いで、 元締で、 る。この間、 た。この人が山を買いに来たといえば、まわりの人がびくびくしたくら 山を買い、カマをつき、木を切って炭にするまでには一ヵ月ほどかか 当時は個人で山を切って炭やきをしてもやれなかった。 カワイゲタの屋号をもつ家が近郷近在きっての大きな問屋だっ 山を買い、焼き子を雇って炭を 焼かせ、各地に出荷した問屋が

元締が面倒をみて、

炭が出たところで会計して費用を回収

(川浦)

— 43

りものをつくる。(=甫)りをしたり、操作をしたりする。一人もんで九尺×六尺の大きさくらいりをしたり、操作をしたりする。一人もんで九尺×六尺の大きさくらい一炭やき小屋(炭やきガマの隣り、山の中に小屋をつくり、カマの見張

人もいる。(川浦) 里くらい奥の山に分校をつくった時期がある。その後川浦へ住みついたに家族で住んで炭やきをした。川浦の人たちとの交際はないが、山の中に二間×三間くらいの家をつくり、屋根も垣もカヤでつくった家山の中に二間×三間くらいの家をつくり、屋根も垣もカヤでつくった家山の中に二間×三間はいの家をつくり、屋根も垣もカヤでつくった家山の中に二間×三間といいの家をつくり、屋根も垣もカヤでつくった家山の中に二間×三間といいた人たちがいる。

が一〇円くれたものである。などを買って正月の用意ができた。炭やきをしていて暮になると、親方物のねだん。昭和の初ころは、一〇円あれば米を買い、酒・魚・着物

酒二合一本で八銭から一○銭くらいだった。(川浦)ても日当五○銭くれた。一円に米一斗ということもあった。夜遊びで、当時、下刈りの日当で五○銭というのは上等の方だった。一人一升食っ

にある。 江戸城西丸再建の為のケヤキを送りだしたことがあり、その絵が権田館、コビキ 倉淵村は杉の産地として有名であり、桧もある。天保九年に

八年もつが春皮だと五年位でだめになってしまう。いいので十月頃からやる。秋皮がしまっていてもちがいい。秋皮だと七・農閑期ということと、杉の皮を屋根葺に使うのだが春皮より秋皮の方が一五才位からコビキに出る。十月から三月位までの農閑期にやった。

モトジメが山を買ってサキヤマが親方になってコビキに木を切らせ

サキヤマの配下のコビキがいる。農業をやっていて農閑期にコビキを上野の堀井亀造さんや下道の小池仁平さんなどがやった。サキヤマは村の人がなる。元は越後から来た人がなったこともある。モトジメはこの村にもいたが高崎や榛名町室田の人が多かった。る。

て出る。で懇意なとか世話になっているとかのコビキがサキヤマに声をかけられで懇意なとか世話になっているとかのコビキがサキヤマに声をかけられする位で専業ではない。一軒で二・三人出る家もあった。日常生活の中

を見て何石出るという見当をつける。山を買う時には立木を百本程下見をしてから値を決める。目通りと丈

角材で長さ一丈で一尺まっ角のものをいう。 今は製材した一石は丈が十二尺で末口の直径が一尺の丸太をいった。今は製材した

がする。 伐採した材木をリンバという山の中の作業場へ集めて、皮をむいて製

は二人でひく両ビキを使う。 片手で手持ちで使う小さいのはオノという。ノコは大きい材木を倒すに立木を切り倒すにはマサキリとノコでやる。マサキリは大きいもので、

く。一枚で一トウリといい、二〇トウリ毎に目印に青い杉葉をさしてお杉皮は屋根を葺く材料になったので大事にした。二尺平方の広さにむ

き百トウリでヒトヤマという。

らにする」とかいって決めた。の平均である。杉皮の量によって木の伐採賃金を決めた。「ヨヤマでいく又、五トウリを一ワといい、三バマルキ(十五トウリ)が一本の立木

板は七寸巾・一尺巾とにする。広い板をとる。二間もんは板・柱・貫に、丈三は二寸角の垂木にする。材木は六尺・二間、一丈三尺の三種類の長さにする。六尺もんは巾の

製材は一人で使うノコのメービキでした。



幸男 撮影)



権田館所蔵 江戸城建築用材伐出の絵巻 (丑木 幸男

出した。 がつけた。 けて出した。室田・高崎まで 丈三尺で五寸と六寸角)を馬 製材したものは小荷駄でつ 丈三の五六(長さ一

やったことがない。 ヤキは特別である。 記憶はない。 コビキは一升メシを食べ 鳥川で流して出したという 百姓がヒキワリを食べて 江戸城再建のケ 普通には

ヤマという。

(陳田

いた頃で米を食べて百姓が羨

尺の一尺巾の板を六枚とれば 坪に換算して決める。長さ六 坪となる。 切り賃は切った面積です 六尺まっ角を一坪とし、

ける。 は二等品より五割位高い。 節のあるなしで分け、一等品 家具屋等で使う。 柾目は柾目だけで等級をつ 材木の値段は三段階位に分 板目よりは高級である。 板目で無節を一等とし 糸柾が最高

である。

田まで出したこともある。 よりしっかりしたもの)で室 運送車(手押の車で大八車

などにひくことを決めて、ひきいいように目盛りをしてやる親方をサキ ができてから布団を運び入れた。(陳田 をひいて作った。杉皮をむいて屋根をふくが三日ぐらいでできた。小屋 した。そして泊りこむ掘立小屋をこさえた。小屋の材料は自分たちで板 入ると、 サキヤマはコビキが板をひく前に、 コビキ職人は十人も十五人も組んで、 最初は何もない所にごみを敷いて、 ホタドリをして、 山で板をひく仕事をする。 囲りに繩を張ってごろ寝を 四分板や六分板 山に

みはあったようだ。だいたい競売制度だった。 まえということになる。契約といってもお互に近所の人だから多少ゆる れる。だから、 挽きとの間で、一年契約でこれらの山の立木を切るということがはなさ 木挽きを昭和四十五年ころまでやっている人がいた。 木挽きとしては多少無理をしてでも、この木を切ってし (川浦 山林の持主と木

山へ入る前にヤマハジメを十二様に知らせた。石宮にオサゴを供える

えた。 やった。十二様の石宮があちこちにあるので、 十二講は毎月十二日にやった。 山のリンバで仕事を早じまいにして夜 近くの十二様に酒肴を供

十二月と四月の十二日にはバンダイモチを作ってヤマモチ・モトジ

メ・コビキの家に配った。 リンバでうるち米を炊いてふき出す頃水を抜いてしまい、 シコシコしてなまでも焼い 木のカブツ

の土でマサキリの背中でつぶして餅にした。

てもうまい。キリタンポの様なものである。 三叉の木は天狗様の休み場といい、気をつけて切れと言われた。二本木

き、牛運送、炭焼き、皮むきなど、何でもやった。(根ギリ(立木を切ること)、玉ギリ(倒した木を切ること)、ジゴロ引

したこともある。 て死にそうになったこともあるし、腕木と運送の間に腕をはさまれ骨折て死にそうになったこともあるし、腕木と運送の間に腕をはさまれ骨折を険で、賃金は安かった。大もの(大木)をいじるから、木の下になっ

憶している。

一日働いて四十銭、女が二十銭というのを記から切る人には損になる。一日働いて四十銭、女が二十銭というのを記とスエロ(切り口のこと)によって計算した。しかもクジラ尺を使ったギリの時でも、今のように石で計算するのではなく、尺ジメー本木などギリの時でも、今のように石で計算するのではなく、尺ジメー本木など、五十年ぐらい前、ジゴロ引きをして、一日十銭の時もあった。また玉

を手伝ったり、上簇のときに手伝ったりするくらいであった。一番さかが、これはすくなかったので、女衆が中心にやっていた。男衆は桑切り生活をしていた。副業としては、炭焼、木びき(四、五人くらい)、板割り生活をしていた。副業としては、炭焼、木びき(四、五人くらい)、板割り物はとれなかった。純農家は中尾三十戸のうち三、四戸で、あとは副業で物割り、この辺は、むかしは食うだけの百姓だった。売るだけの農作



国有林入林票(川浦) (阪本 英一 撮影)

あった。 あった。 ま十七・八戸が養蚕農家で

て板割りをした。クリはかいて、農閑期に、山へ通っがやった。夏は農業をしてがやった。

留ったりした。それを問屋が、高崎のほうへもって行ったのである。(水行ったりした。それを問屋が、高崎のほうへもって行ったり、馬の背につけてらは、三ノ倉とか石津の材木屋へ、背負って行ったり、馬の背につけていった。四わを大じめといった。これで、町へ売りに行った。この辺かいほうであった。板は、三十一枚ひとかわで、二かわ六十二枚を一わといほうであった。板割りは、一日に三十把ぐらいがふつうの腕で、四十把割れる人は強

隣り組」で集まって、月の十二日に十二講をする。(川浦) 十二講 炭焼きをしている者どうしが、近くに仕事をしている「山

回つる刈り程度をする。(長井)は少い。共有林は、世話番の組で世話をする。下刈りをした後は年に一人が多い。ない者は、くずかきには、有る人のを貰ってかいた。国有林人が多い。ない者は、くずかきには、有る人のを貰ってかいた。国有林山林 二四〇~二五〇町歩持っているのが多い方で、山林を持たない

いた。(長井) 境界 山の境には、うつぎを植えた。また境の細い木を切ったててお

らである。 南側はすぐ消えるが、その外の所は雪が残っていて火が入らなかったか面するいいところの斜面には木がなかったもので、それは雪が降っても民地と国有林の境をきれいに切って防火線をつくり、火をつける。南

きれいなものだった。(川浦) 大は、燃しっぱらいだった。明治四○年ころまではやっていた。(川浦) 火は、燃しっぱらいだった。明治四○年ころまではやっていた。(川浦) 火は、燃しっぱらいだった。明治四○年ころまではやっていた。(川浦)

山の木 明治四○年ころまでは、炭焼きをするにも棒切りといってテ

て割り、これをけずってつくったテンビン棒は、近辺の村へ売りに行っ ンビン棒のシロボウ(雑木)は、どこでも自由に切った。大きい木を切っ 。(川浦

Ŧi.

にやらなくなり、今は七・八軒がやっているだけである。 昭和八年に碓氷社倉淵組が大赤字をしてから衰退した。十年程前から特 養蚕業 大正期から昭和初年までが全盛だった。昭八の赤字といい、

糸にして原市組へ出し、それを横浜へ売ってから精算する方法をとって いた。大正頃は各自で乾燥した。 燃料受けといって組合製糸に生繭で出して、碓永社倉淵組で乾燥して

蚕で百貫蚕をとった人も多い。 春蚕・初蚕・秋蚕の三回が普通で稀に夏蚕をする人がいた。中心は春

から買った。不況の時に埼玉からも持ってきた。(岩氷) 桑はほとんど自給し、霜でやられた時に買桑をした。里見あたりの下

すべてカゴ飼いでやった。(川浦) 八日のころで、温度をかけなかった昔の飼い方では、上簇までの日数も の花が咲いたのをとって来てくれて、桑はこまかに切ってくれたりした。 五〇余日ということがあった。掃立てにも、メクワ(芽桑)という雄木 村の中でやらない家はなかった位やった。春蚕の掃立てが、六月七・

秋、晩秋の三回やった。今ではそれが野菜、コンニャクになって

おかいこは、昔は年二回であった。現在では養蚕にかわって野菜づく

県・更科・南安曇等からが多かった。塩原からもきた。 その前は自宅で蚕種を買って掃き立てた。ワクセイが多く、信州の小 **蚕種** 今は共同稚蚕飼育所ができて二令まで飼ってくれる。

風通しのいい所へ吊しておいた。(岩氷

用桑に一枚作る位であった。細かい葉のシロシタも作った。 桑の品種 昔はグンアカ・タゴワセが多く、露国野桑は大きい葉で専

今はネズミカエシ・イチノセが多い。(岩氷)

がうすい。横に張らない。グンアカと同じ、葉の量が少ない)グンアカ (枯れないで強い)。(七区) シロシタ。アオキワセ、カラロソウ、オンジヤグワ、シロコボレ(葉

なって背負ってきた。(糀屋) あるな、と思えばどんな遠くでもとび上げてカゴに入れてとってきた。 腰から下は朝露でぬれ、腰から上は汗でぬれて乾いた所はない位に ヤマツクワは山の木だから誰がとってもいい。だから、あすこに桑が

上、吾妻町へ買いに来た仲買人に売ってやった。(二区) 桑売り 前橋の残桑を仲買人が世話をした。二区の残桑は吾妻郡の坂

蚕を二階で飼って一階のイロリで桑の根などを燃した。夜も

一晩中火を絶やさない様にした。

蚕を乾かすことを中心に考えた。

桑くれをした。 く切ってフルイでふるってやった。だから桑がすぐ乾いてしまい何度も 濡れた葉は毒だといって桑の葉を布でふいてやったりした。桑を細か

んでしまうと思っている。ホルマリンなど匂いの強いものをやれば蚕が死魚を焼いても怒られた。ホルマリンなど匂いの強いものをやれば蚕が死

ずすのが多かった。(岩氷) 昔は蚕をよくはずした。晩秋はいくらもとれなかった。蚕の病気では

えるので大カゴを使った。 棚飼いは大カゴ、七分カゴで飼った。七分カゴは扱いやすいが沢山飼

ガワやムシロに取る作業が大変であった。棚を抜いたりさしたりで重た ツブ抜キといいコクソ(ツブ)をカゴを持ちあげて傾斜させて、

くて、蚕飼いで一番の重労働であった。(岩氷)

り扱いが比較的よかった。昭和になってからわらまぶしになった。(二区) かやはどこにでも生えており、手易く得られたことと、かやまぶしは取来まで使用した。次に、明治の末から大正時代はかやまぶしを用いた。まぶし しらはぎの木を主として作った。いかだまぶしは明治時代の マブシはカヤマブシ―ワラマブシ―改良マブシ―回転マブシと変遷し

て織った。一回使うと燃してしまう。 カヤマブシは正月過ぎの雪のある時分に馬を連れてカヤを刈ってき

に来たので売った。(岩氷) 沢山つくので火の中へさっと渡してそれを焼く。ヤギリという。(岩氷) ーズルを織って、竹に針金で結ったものであり、何年も使えた。ケバが 玉マユやクズマユは自家用の真綿にしたり、 トーズルのマブシは岐阜県から来た。 南方から輸入したつるであるト 前橋から玉糸製糸が買い

ぽくて薄い 蚕の病気 ハッキョウサンが多かった。繭を作っても軽くて、 しけっ

ウソを役場で調べたことがある。消毒は最近やる様になったが、前はほ オキチヂミ、チョウチン(空頭蚕)、タレコ(軟化病)などが多くキョ

を改造して、近所の娘を五、六人集めて坐繰りで糸をひかせた。 明治までで大正にはなかったが、村の有力者が自分の家の物置 泊り込

塚越米吉、原田豊三、塚越周作の各氏がやっていた

をとっていた。(岩氷) 各家で賃挽き等はやったことがない。クズマユを坐繰りで自分遣い位

氷社の倉田組といわれて、大字三ノ倉字栗崎にあった。明治四十年か四 人は出資していた。一口二十円で、二口、三口所有していた。製糸の碓 **倉田組は一区、二区、三区、四区の人たちが全部加入して養蚕をする**

十一年に設立されて、養蚕家が生糸にするために頼んでいた。

ことをセリ師と言った。「セリが来る」とか「セリ売り」という言葉があっ 倉田村信用組合に昭和十二、三年の頃合併した。当時、 繭を買う人の

糸ができてからは組合に出して、中にはモグリでメーカイに売った。 碓氷社ができてからはそこへ出し、原市の市へ出したこともある。(岩 ハカリサシ ハカリを腰にさしてメーカイがいくたりも来た。

て講習をしてから、タカハタを使う様になった。 岩氷出身で伊勢崎あたりで染色の大家になった塚越万平さんが学校に来 機織り 坐繰りで糸をとってイザリバタで織った。大正三、四年頃に

木綿糸を買って来て織った。ノラ着は大体木綿で織った。

生糸とガス糸をまぜて織ったオウメはよそいきにした。(岩氷) キハダの木の皮を煮た液に絹をつけると黄色になる。クルミは

竹の皮をヒドロッタに入れておくと黒くなる。それをゾーリの鼻緒に

した。(岩氷) **蚕祝い** シジ、タケ、フナ、ニワの休みといい、フナ休みが終れば蚕

は無事に育つ。フナ餅をついて親類や近所に配り絹笠様に供えた。(岩氷)

フナ餅は蚕が三眠の時につく。(六区)

沢山取れるといわれていた。(二区) 簇には手伝うことになっていた。又、フナに良く蚕が休めば決ずまゆが フナ休みにはフナ餅をついた。近所に配り、これを受けた人は必ず上

鷺宮から蛇の絵を借りてきてネズミ除けにした。(岩氷 蚕中はヨメゴ様といった。繭のサナギも蚕も食ってしまう。

行った。多い時で倉渕村から二、三〇〇人は行った。ケイアンの口きき カイコビリョウ まとまっていい賃金になったから若い衆はみんな

間位は少くも行った。 で行った。ケイアンはこの村にはおらず原市あたりにいた。 た。寝ずに使われ終るとやせて帰って来た。五月の節供すぎから三十日 上人夫が六十五銭、 平均五十銭位の時カイコビリョウは一円貰ってい

地蔵峠を越えて南の方面へ行った。細野(松井田町)、原市(安中市)、 高田(妙義町)あたりに行った。室田(榛名町)へは行かなかっ

桑くれが主な仕事であった。(岩氷

ころから行き始めて時期になるとぞろぞろ行った。向うの仕事が終って 帰って来て、家の蚕に間に合った。娘を何人か持っている人はカイコビョ をしてもらって原市、東横野(何れも安中市)などへ行った。五月五日 カイコビョウに行った。松井田のケイアンなどを頼って行き、割り振り ウの給金で財産を残したという。(川浦 春蚕の時期になると、川浦や坂上(吾妻町)から娘たちが南へ南へと

絹笠様をまつる。正月の初絵売りから絹笠様 のお姿の絵を

鷺宮の北野神社からトグロを巻いたへビの絵を借りて来て神棚に貼っ お蚕の上手な人を絹笠様の様だという。

やすみのときを祝うのは、春蚕のときが主である。(水沼 しかわったものをつくって、かいこ神様にしんぜた。かいこの神様とか、 とき、初嫁は、もちをもって里帰りをした。蚕の上簇のときにも、 蚕が三眠(ふなやすみ)に入ると、ふなもちをつくって祝った。この きぬがさ様がかいこの神様。初午のときにおまつりをした。 ネズミ除けにした。(岩氷 すこ

漁 撈 狩猟

漁法 マヤをついてとる法があった。それは馬蹄形に石を積み口を川

> きつめておくと、ハヤが産卵のため入り、口に網をおくと取れた。時は 小さくなるにしたがって浅くしなければならなかった。 山ぶきの咲頃が一番よく、五月下旬から七月上旬まで取れた。ただ魚が 下にする。大きさは巾三尺の奥行五尺位のもので中に新しい石を平に敷

下久保には置針りで五十本置くと十二・三本はうなぎが取れた。(二

石)を敷いておくと、クキが産卵に入って来るので、入った様子を見て クキのマヤは川の中の瀬にカナグツのように川底をすくい、まなご(小

いて、入口に網をふせて取る。たくさんとれるが、スル(産卵)ときで (川浦

干しきれないので川干しをして水を少なくしてから毒を流してとる。 してとる。水の少ない時期にやるもので、大きな川のトブ(淵)などは 毒流し サンショの皮を煮てつぶし、ナンバンと灰を入れて、

川に流

カーバイトを放りこんでとることもあった。 土木工事の時などには、ダイナマイトを放りこみ、爆発で浮いたのを

とったこともある。 (川浦)

らぐらから一時頃までやれば、カジカが二升ぐらいとれた。 火ぶり、スイメンにカンテラをつけて、夜間、ヤスで突いてとる。

スイメン(ガラス箱)で川の中をのぞきながらヤスで突いてとる。 (川

なっているのがわかるから、そこへふせておくと、一本で三・四ひきも をもって行って川底を見ると、毎日通っているので水アカがすれてなく

するものをエサにして川にふせる。ウナギには通り道があるので、水面

ウナギドウ 竹を割って編んだウナギドウに、サナギなどのニオイの

初さんがウナギとりの名人だった。(川浦

まねをして魚をとる方法にカオスという名がある。 カオスカオスとはカワウソのことで、魚をとるのがうまいので、この

げてとる。 ウナギのいそうなところに突っこんでさしてふせ、翌朝上つけて夕方、ウナギのいそうなところに突っこんでさしてふせ、翌朝上して、麻なわ一尺五寸ぐらいの長さにさしてひもをつけ、木の枝に結びウナギバリ メメズの砂をはかせたものをウナギバリにさしてエサと

フセバリとよんだ。(川浦)

かった。からとるくらいのことで、食べるためにまとめてとるということはなからとるくらいのことで、食べるためにまとめてとるということはなトジョウとり、子どもたちの遊びで、堀の泥をすくい上げて、土の中

いなくなった。(川浦) トジョウは、昔はいたが、除草剤を使うようになってからはほとんど

はいない。(川浦)パスをつくって川の水を干してカジカ、ウナギなどをとった。大きい魚川干し、主として子どもがやることで、水をせきとめたり、流にバイ

らいで、もとはマスはいなかった。クキ・ハヨ(ドロッパヨ)ウナギなどもいるが、アイは少しは上がるくら川の魚(川浦のあたりの川の魚は、ヤマメ・イワナが主で、カジカ・

度重なる土木工事で魚は少なくなった。(川浦)

口が小さく、長いことが特徴である。(二区)又、同じ相間川のやまめでも上流では、口が短く、大きいが、下流ではぎは色が白く、口が細長い。一方山沢は色は赤く、口が短くて大きい。

ヤマメ、イワナ、一度、さっと焼いて身をしめた後、煮て食うのがよいてテンプラにするほか、煮て食べる。魚の食べ方(クキ、産卵期は味がよくない。冬がうまい。いったん焼

本が増えており、焼いておいて煮干しのようにダシをとるのもよい。(川浦)をつけて食う。焼いておいて煮干しのようにダシをとるのもよい。(川浦)をつけて食う。焼いておいて煮干しのようにダシをとるのもよい。(川浦)であるが冬穴は深くなっている。取り方は、穴の入口に灰をまいておき、であるが冬穴は深くなっている。取り方は、穴の入口に灰をまいておき、であるが冬穴は深くなっている。取り方は、穴の入口に灰をまいておき、であるが冬穴は深くなっている。取り方は、穴の入口に灰をまいておき、であるが冬穴は深くなっている。取り方は、穴の入口に灰をまいておき、であるが冬穴は深くなっている。取り方は、穴の入口に灰をまいておき、であるが冬穴は深くなっている。取り方は、穴の入口に灰をまいておき、であるが冬穴は深くなっている。取り方は、穴の入口に灰をまいておき、であるがや穴は、やいているので砂をとるのが大変な魚、焼いてショウユーカジカ、砂をのんでいるので砂をとるのが大変な魚、焼いてショウユーカジカ、砂をのんでいるので砂をとるのが大変な魚、焼いてショウユーカジカ、砂をのんでいるので砂をとるのが大変な魚、焼いてショウユーカジカ、砂をのんでいるので砂をとるのが大変な魚に

は川浦の奥にいる位でめったに見ない。クマ、ササムジナ、テン、キツネ、キネズミ、キジなどがいる。サル

ケさんで通っている。(岩氷)川浦の池田武男氏がクマトリの名人で今でも毎年とっている。クマタ

かいる。 (ヘビ)シマヘビ・山カカシ・青大将・ジムグリ・カラスヘビ・マムシ

なと言われた。(岩氷) 青大将の大きいのでシッポの切れたのは屋敷の守り神といい、かまう

マムシは共有山の下刈りに行くと必ずいる。鎌でおさえてから二又の

枝で頭をおさえれば簡単につかまえられる。

ヘビ酒にする。打ち身にきく

なる。競馬馬にも食べさせる。(岩氷) スポーツの選手にマムシの肉を食べさせたり生き血を飲ませると強く

地蜂の巣は土の中にあり、丸くて大きく一○段ぐらいのタメ

になっている。蜂の子は食べられる。 を送りこんで蜂をバカにしてから掘ってとる方法と麦わらを持っていっ 巣をとる時は、蜂の出入りする穴へ導火線をさしこみ、火をつけて煙

消毒するようになっていなくなった。(川浦)

てどんどん火を燃して、出てくる蜂の羽を焼いてとる方法とがあった。

木曾馬もいた。北海道産もあったが、これは珍しくて話題になった。そ ふつうの家では平均二頭の馬を飼っていた。嬬恋産の馬が多く、 **倉渕の土地で子とりしたものもあった。どれも馬喰がもって**

どちらかといえば特別な例に入ることだった。(川浦) 馬の子とりはあまりやらないもので、馬の好きな人がやった程度で、

ものをのせて食べさせる。(長井) 馬の子が、ものを食べるようになった時鍋の蓋の上にふすまをかいた

いる馬で目の動きのいいのが若い馬とみて、ほぼまちがいなかった。(川 いを見て判断した。ケバス(毛なみや色つや)がいいのはしっかりして が良い、という馬である。駄馬と乗馬の別はあったが、すべてのしせ いい馬には二種類ある。一つは、見てかっこうの良い馬で、他は、使

ぎ、天南草で他の草は薬草と同じである。だから「夏の百草を馬が食べ 馬の食べる草で毒のものは三種しかない。毒いちご、毒うつ

> 黒焼にして飲んでいれば肺病にきくともいわれていた。(二区) よい肥料として使われた。天南草は、球根の部分を焼いて食べられる。 て、病気になれば治らない」といわれている。なお、こくさぎは苗代の

をかっくるんで与える。 大釜で湯をわかしケイバ(藁を押切りで切ったもの)を入れ、フスマ

て馬をいたわっておく。(糀屋) あした朝早く仕事に連れ出すような時は大麦の煮たものを与えたりし

悪いところはそのまま小屋に入れて、堆肥としてふませた。(川浦) ヒクサやタテビクサのいいところを馬のカイバ(飼料)として使い、

馬の利用 荷ぐらをつけ、荷ナワをつけ、行くときは馬に乗って行っ

ラジ。タビの古でもはいて「ツケダシ」をした。ツケダシは山をこなし た荷を運び出すこと。(七ッ石) 女も子をおぶって子守りでもしながらよく馬をひいた。モモヒキにワ 荷をなから同じように(左右平均に)つけるのは容易じゃねえ。

などと言った。 ふつうの人でも馬をひいてれば馬カタと言う「よく馬カタしてるノー」

ながら信じられない気がする。(糀屋) あんな時代をよく生きてきたもンだ、と思うと、自分で事実やってき 馬の病気 馬が具合が悪くなると、犬のい、お茶、 山人参、

馬にネイラがつくと、馬の前足に雑巾をおっけて、こてを焼いてつけ

どを薬として用いた。(七区)

あった。馬は各戸二頭平均くらい飼っていたので、わらじをはいて、毎 借地して採草地とした。村中で借りても、土地はくじびきで分けて 朝草刈りに行った。(川浦) 国有林での朝草刈りは自由だったが、法令できまってから後

カッタテとかカッポシ刈りといわれる干草刈りは、日をきめて、

そのまま乾燥させ、 三日乾して、それから束ねた。これが干草で、冬の間の馬の飼料とした。 で出て刈った。秋の彼岸になるとやったもので、刈りたおした草を二、 タテビクサは、刈ったものを束ねて、三、四束まとめて立てておき、 春までおく人もいるが、こうしておくのはいたまな

平に干しておき、運ぶ際にたばねた。タテビクサにしておく場合もあっ た。重ねて置く場合にニューといい高く積み重ねた。(二区 馬一頭に対して、ひと冬二十駄から三十駄の干草を準備した。刈って

だといった。全部だせない場合には、すこしでも、だすまねをしろといっ うまやのごいだし

うまやごいは、正月のうちのサルの日にだすもの

衰)の腰抜け馬をおっぱめられることもあった。(川浦 いである。仲人口よりもうそが多い。うっかりしているとトシッパテ(老 いうことで「ばくろう八才屁はくさい(九才)」ということばがあるくら **馬喰ぐち** 馬喰が馬をひいて来ていうことばは、いつでも「八才」と

なく倒産してしまった。その土地は、 を十八万円で買って始めたという。 林業が所有している。 所有している土地である。 牧場 高紫には、ウマやシを飼育する牧場があった。現在清水林業が (川浦 経営者は、中島ゆう太郎氏で、四人共有の山 しかし、不況の時代で、 後に碓氷産業に渡り、 買うと間も 現在は清水

諸職と労働慣行

いが、高崎までになると一泊しなければ運べなかった。木材を山で木び 運送は木材を馬で運んだ。運送は室田、神山までは日帰りでよ

た。下屋という炭、材木を扱っていた店もあった。なお、藤屋、 嬬恋、草津よりの取継所であり、峠には、問屋場(月並)があっ やまに

などの宿もあった。(七区

薬屋は富山と大和から来た。 行商には、毎月定期的に高崎から衣類や反物、 古着など持って来た。

七区には「東の家」(屋号)で行なっていた。(七区) 毒消し売りは、 夏越後からやって来た。質屋は八区には長井にあり、

それは村の長老連中が多く集っていたことによる。長老はみんな現金と 引き換えで飲んでいた。野口九一郎という人は毎日、五合ますで飲んで いた。この人は蛇の好きな人だった。(二区) 居酒屋は江州屋、芝木、下駄屋の三軒であったが若衆は寄らなかった。

ウという)、川浦の宮下。(六区) 造り酒屋は四軒あった。石津の柳沢、下郷の戸塚、長井の牧野(山チョ

らモトリン (親方)が受けに出るが、この時ヤ (楔)を持っていて、 仁義 州・奥州などからもやってきた。サイギョウといって、小屋のある所ま いくらかくれてやった。(陳田) がまちがえばそれでひっぱたく。酒手をもらいに来るので、わらじ銭を でくると、はだしになって来て、「ごめんなさい」と仁義をいう。小屋か 西 行ブチといい、山小屋で仕事をしていると、渡り職人が越後・*******

あれば世帯がもてるといわれた。(川浦) 人の賃金のもとは、「米三升」分が基本だった。だから、米三升の収入が 明治から昭和一〇年ころまでの日当は、山仕事、その他で働く

るから、生活は楽だ。(陳田 ても十三銭で暮らせた。今は一日四千円も取れるので、米が二斗も買え 昔の賃仕事 一日に米三升分、銭にすると五十銭が相場だった。現在 昔は一日働いて米二升分の銭が取れればよかった。一日に一升飯食っ

ぐ。(川浦) では、腕の強い人なら一俵は充分稼げる。そうとう強い人なら一石も稼 人と機械、人と馬などでも一対一が普通である。 (第一区 エエ エエは田植に多い。親類同志でやるので細かいきまりはない。

が済むと吾妻方面に行った。(二区) 地の人で蚕を飼わない人は安中、松井田、細野に手伝いに出た。そちらぬす引きで、麦打ちは一石いくらで決めた。するす引きは一俵十銭ぐらるす引きで、麦打ちは一石いくらで決めた。するす引きは一俵十銭ぐら出かせぎ 越後の人、越中の人が出かせぎに来た。仕事は麦打ち、す出かせぎ 越後の人、越中の人が出かせぎに来た。仕事は麦打ち、す

明治末ごろから昭和初ころまでの間、麦ぶちに越中から出稼ぎに来ていた人がいる。 道具はもたず、体ひとつで、一人でやってきて、大麦をから売りこんできたもので、大麦はノギが多くて自分でやるのがいやなから売りこんできたもので、大麦はノギが多くて自分でやるのがいやなから売りこんできたもので、大麦はノギが多くて自分でやるのがいやなから売りこんできたもので、大麦はノギが多くて自分でやるのがいやなから売りこんできたもので、大麦はノギが多くて自分でやるのがいやないた人がいる。 道具はもたず、体ひとつで、一人でやってきて、大麦をいれて道具だろうといわれる。

ちまでやれることが不思議だった。(川浦)ではまったく麦をつくらないはずなのに、そこの人がこちらへ来て麦ぶ越中さんは、踏み機械(脱穀機)ができるまでやってきたが、富山県

それまではぜいたくだ、と言って親におっちゃられたもンだ。野良仕事が普通ハダシだった。霜がおりる十二月頃からワラジをはく。

かった。(川浦)稲、草などをしばること何んでも使うのでどんなになっておいてもよる、草などをしばること何んでも使うのでどんなになっておいてもよる、東路り仕事でなべ仕事と同様なことで、なわないはよくやった。麦、

は、かえってやらなくなった。イロリのメエボコリ(灰)をかぶりながランプ時代まではよくやったが、電気がついて、べんりになってからりつくりが中心。自分たちのはきものだから毎日の仕事だった。夜なべ仕事 男の夜なべ仕事はわら細工で、なわない、わらじ、ぞう

らやったものである。(川浦)

女衆はつぎはぎをした」。(七ッ石) ヨーハンの後、また夜なべをした。ランプの下で「男衆はワラジ作り」

ヨナベ仕事は女はヌイコト、男はワラザイク。(六区)

草の束の中にヘビを刈り込んできた人があった。しなどを食べて競走でアサンメエ仕事に草刈りになど行った。たまにはアサンメエまたはアサンマエ仕事(三時頃起きて、アサゴエーの茶が

りに行ったが鎌を忘れたので手で刈ってきたそうだ。(カジヤ)ある人は夜遊びから帰ったら夜が明けてしまって、そのまんま朝草刈

いができた。子守りは学校からもどれば、男女を問わずだれもがやった。仕事のてつだい(男の子なら五、六年になれば充分野良仕事のてつだ)

(川浦

の沓、みの、なわであった。(二区) 一日四、五俵で、強い人は十俵作った。そのほか、ぞうり、わらじ、馬一日四、五俵で、強い人は十俵作った。そのほか、ぞうり、わらじ、馬の沓、みの間はわら仕事を行なった。作ったものは、米俵で普通

ヤはイロリやカマドに使用する。(六区)ボヤ拾い 農閑期(冬)には山に行き、ボヤ(枯枝)拾いをした。ボ

に積みあげ、冬に備えた。(川浦)畑のことが終わると女衆が山にでもいって、もしきを集め屋敷のまわり畑のことが終わると女衆が山にでもいって、もしきなどは山で拾ってそれを使うということで充分だった。田圃や

解

説

川を越すのが容易であったからであろう。

び合わせられた。これは、烏川の谷が浅く、水量もそれほど多くなく、日向から日影と結ばれ、また日向道を通り、更に日影道へと幹線路が結かしは、現在のように、日向道が必ずしも幹線ではなく、所によってはか更に、現在のように、日向道が必ずしも幹線ではなく、所によっては主要道路がある。日向道、日影道という呼び名はきかれなかったが、む主要道路がある。日向道、日影道という呼び名はきかれなかったが、む主要道路がある。日向道、日影道という呼び名はきかれなかったが、む

になっていたのである。問屋もあり、信州方面からの廻米輸送の継場の中心となったところである。一般に街道に面した両側の家は、道路と平行に建てられるのが普通であるが、古い家は何れも道路と十五度前と平行に建てられるのが普通であるが、古い家は何れも道路と十五度前と平行に建てられるのが普通であるが、古い家は何れも道路と十五度前といたことが考えられる。問屋もあり、信州方面からの廻米輸送の継場の中心となったとが考えられる。問屋もあり、信州方面からの廻米輸送の継場の中心となったま落は三之倉と権田であった。なっていたのである。

通じ、村の一番上には長井の宿があった。 この信州街道は、草津街道ともよばれ、権田から右に折れて大戸へと

自家用の米麦類で、日用品のほとんどが高崎方面から買入れられていた。このような山村であるから、生産されるものは木材・薪炭、繭、それに所ではない。部落の戸数も少く、平地も狭く、宿の長さも短かい。それ長井の宿は、三之倉と比べて荷物の継送りだけで、物資の集散地的場

角田河、

レは勢田の郡」に、

付ラクハセ下ツ、赤城山

倉・室田・長野をモ狩廻ラセ下ツ、、有馬の上の横枕、詠って次第1に打1過ツ、

付セ下へは大渡1エモ・・・・・・打1越サセトて利根の大渡1入,,下ケ

過||ケレは三原長倉ノ御狩共,モ、上野の国ニ有||て御超|、大戸―・岩氷・ニ

井田方面からくるが、他の山村地域を廻るものと大差はない。行商人が村へ入ってくる行商、遊芸人は、高崎方面からくるものと、安中・松その中継場所が榛名町の下室田とその対岸の神山宿であった。

明治期までは、草津入湯者の通路となり、信州松代から江戸への物産世までは中山道の脇往還、信州街道、草津街道などと呼ばれていた。草津街道 現在倉渕村の幹道は「高崎草津線」とよばれているが、近村へ住みついた例もあるが、これもこの村に限ったわけではなかろう。

輸送の荷物街道であった。

がむしろ多く利用されていたようである。このことは、妙本寺本「曾我物 昭和十四年七月にできるまでは、このコースは難所であり、鳥川の南側 県道として認定されたので、途中榛名町本村との境にある湯殿山隧道が ら石津―三之倉―石上―本庄―室田への現在の県道は、 田から上は古くから大きな変化はなかったようである。 く途中のつぎのような記述をみてもわかる。 語」巻第五(天文十五年五月廿五日写本)、頼朝が三原の狩から赤城へ行 今回の調査でも「昔は高いとこ、高いとこを通った。草津街道も、 **一萩生** この道路も、 -大戸を通っている。(長井)」のように、現在の高崎草津線も権 烏川や山のオネ、谷により通路に幾度か変動があった。 大正九年四月に しかし、 権田か **—** 54 **—**

スが記されている。頼朝三原の狩の史実は別としても、曾我物語の成立右のように、大戸―岩氷―三倉―室田―長野(渋川)大渡―赤城のコー



標 道 (右) 川浦

大正十四年十二月

した頃の交通路として、

(後)権田・長井・吾妻道

商人荷物は信州街道を通ること 江戸時代に北国米を江戸に運ぶ

土地で

松井田に

と思う。 されたが、 あった。したがって、 たのである。今回の調査報告のなかに、各地への物資輸送のことが採録 渡らないで北側を通る道は、以前からも道路はあったが幹道ではなかっ 以来の古道であった。当時岩氷への道は、権田から宮原―岩氷―石津―三 ら再び川を渡って三之倉へ、そして室田から前橋方面へ出る道が、 鳥川岸まで山のせまっている部分もあり、 岩氷から相間―中郷―三之倉か明かでないが、 その辺の状況を考えて地図と比べていただければ理解される 里見道は明治六年に県道として認定され、 対岸を通る方が容易で 権田から石津ま 鳥川を

光道であるとともに、 峠の熊野神社前へ出て中山道に合する道が便利であった。この道は、 八年の「上野国全図」による)か、岩氷から霧積へぬけ、 草津街道とわかれ、 て関所も廃止されると、 があった。そこを通過せずに碓氷峠、或は大笹方面へ行くには、 人がこの道を通った。近世になると、碓氷峠は厳しい碓氷関所を通らね 善光寺道 また草津街道にも大戸をはじめ信州までにはいくつかの関所 中世以来善光寺信仰がさかんになると、各地からその参詣 川浦から鼻曲山の北を通って吾妻に入る道 碓氷峠の熊野神社へも参詣する古道である。 水沼—霧積 - 峠の道より、 水沼-松井田-そこから (明治十 権田で やが -峠の 碓氷

大戸から権田を経て川を渡り岩氷へ出、 そこか (丑木 幸男 中世 社を勧請した満行宮、戸榛名神社などの名が松井田、安中方面にあるの 道でもあり、 道と分かれて鳥川沿いにのぼると、 榛名参詣道とみることができよう。 も榛名信仰がこの道によって結ばれていたので「米つけ街道」は、 たのである。この安中や松井田方面から三之倉への道は、 は米市も立ったから、三之倉から高崎へ出ずに松井田へ出したのである。 には、碓氷関所は厳しい取締りのため、 は「米つけ街道」などともよんでいる。 三之倉―風戸峠―秋間―安中への道があり、草津街道は、高崎から中山 道が利用されるようになった。この三之倉から松井田への道は、 この谷から低い秋間山系を越えれば中山道に出られ、 安中方面へ出るには、三之倉―地蔵峠―後閑―安中への道か、 中山道から榛名神社へ通じる近道にもなっていた。

松井田方面からくる道もあっ

また榛名参詣

なされてきた。 の谷にはなくなり、 と、「錦・茶・烟草・鍛冶物・太物・小間物・穀物・紙・塩・クリ綿・ この村でも三之倉などに市がたったこともある。今回はその市資料が得 が明治末年まではさかんであったから、 九日(桑市)、十二月二十六日(雑品)の記録だけで、すでに六斎市はこ 録されておらず、近くでは室田市が三月十二日(雑品)、 炭・薪木・材木・板・貫・絹・綿・麻・布」が室田市で取引きされたとあ が記録されただけである。しかし、明治十一年の「下室田村誌」 られなかった。 交易 明治三十五年の群馬県統計によると、 行商人、定期市、縁日市などによって交易の行なわれた時代は、 僅かに水沼の観音様の縁日と、室田市、 高崎の田町・本町の六斎市、 それらの市による物資の交易が 本村内に市の立った場所は記 安中、 六月十五日~十 松井田の六斎市 高崎市との関係 による 55

追川氏などの仲買人資料と木炭輸送関係が若干得られた程度である。 から主に日用品、 村から外へ出る物資は、 米、 塩などであった。これらのうち、 炭、 木材、 繭が主なもので、 繭については、 村へは高崎方面

けであった。(近藤義雄) 絵巻物は必ずしもこの土地だけのものでなく、今回は牛馬による運搬だるが、鳥川を利用した材木輸送は何等資料が得られなかった。もっとも、本材等の輸送は、川浦と権田に材木伐出しの絵巻物(江戸後期作)があ

交

通

大戸と通っている。(長井) 交通 昔は高いとこ、高いとこと通った。草津街道も、長井―萩生―

一重だけでまったく一つものだった。実際の生活は、倉田村、室田町、高崎市とつながっていた。倉田とは川実際の生活は、倉田村、室田町、高崎市とつながっていた。倉田とは川で、

兵隊検査や青年団の運動大会などは安中へ行った。(川浦)

酒原に出るのが旧道だったという。うへ渡って上ノ山を通り、坊峯、ツガウミから尾根を行って須賀尾の甘すブスナサマを通って桑本へ出て、三沢の観音堂、イモウへ入り、川向善光寺街道(川浦には善光寺道が通っており、岩氷からダイミョウジ山、

「川浦) 川浦には七軒ほどの宿屋があり、年間約千人の泊り客があったという。

この例はずいぶん健脚のひとのばあいだ。(川浦)あけかかった頃で、わずか四時間弱くらいで歩きとおしたことになる。暗いうちに高崎に着いた例がある。やっと高崎に行ったら、ちらちらと渕から権田までゆっくり歩くと四十分かかる。夜中に矢陸をでて朝まだ高崎までの行程 旅行といえば、皆高崎まで歩いて行ったものだ。西ヶ

峠 倉渕から碓氷へ出るには、霧積から松井田町の坂本へ出る道が約みしたらあと半道だと腰をあげる。(川浦)みやままで行くとたいていお昼で、かみやまの二階でお昼を食い、一休みやままでの行程、馬車の当時は高崎まで行けば夕方になった。途中か

あった。(川浦)る。遠まわりになるものは、室田へ出て里見から板鼻へぬけて行く道がる。遠まわりになるものは、室田へ出て里見から板鼻へぬけて行く道が中に行く道と、風戸峠を越して秋間へ出て安中へ出る道 との 三つ があ六里で一つある。他には、水沼から入って地蔵峠を越して後閑に出て安

で一〇センチ巾位い編んだものをいう。(下郷) レンジャク(連尺) ソリを引くとき肩にかける帯状のもので、ボワ

霧積温泉はここから三里くらいの所である。(川浦)お伝馬 川浦は坂本宿の助郷に出た。足の強い人は霧積を越えて行く。ら左へ折れる。 そこから約四十分でいける。 鳥口橋からはいる。(川浦)をつくった。 現在はまた自動車がいかなくなった。 その途中湯根入沢か霧積への道 十年ほど前に、鼻曲山のふもとまで自動車の入れる林道

学したことがある。コースターの自転車だった。(川浦)校の庭へ連れて来て乗らせたので、勉強そっちのけで授業は中止して見自転車 明治三〇年代の中ごろのこと、ある人が買って乗って来て、学

そうだ。(関沢)に登って県道を見下してたが通らなかった。あとで聞いたら空を飛んだに登って県道を見下してたが通らなかった。あとで聞いたら空を飛んだ飛行機がつかい鳥の様な飛行機ちゅうもんが通ると聞いて、高い所

近くは一月十七日に水沼の観音へ毎年いった。 遊び 正月少林山へ、十日夜は高崎清水の観音へ行くのが遠くの方で、

(下郷) 榛名は五月五日で、約二里半ある。講があってきまった坊へいった。

は豊岡から達磨売りがきたし、菓子の種紙などが縁起物として出ていた。では、水沼の観音様がさかった。ここは年三回あり、正月十六、十七日あわせ、高崎へは白絹を田町市へ持っていったこともある程度、縁日市市 昔は高崎の市まで行く人は少なかった。室田の市でたいていまに

ここでは見世物も出て、 てきた。八月十六、十七日は、秋野菜の大根、菜などの種を買ってきた。 四月は十七日だけで、農具類が多く、養蚕用の羽やメドブルイなどを買っ 室田市ではヒナ市と下室田の琴比羅様の市に出かけて節供用品や農具 ロクロッ首、 大蛇などがきたこともある。

など買ってきたことがある。(下郷)

げをしたりした。主に黒消し炭

冬で五十窯から六十窯も焼き、 個人で焼く人もあったが、賃焼きが多かった。多い 山持ちの山を買ったり、 官有林を払い下 人は

一窯で四~五俵

一窯で二十五~五十俵 週

荷車の人は上室田の本庄の坂までは家の人が後押しに出、それから一人 出したり、 で挽いていき、遠いところは倉賀野附近までいき日帰りで往復した。時 には群馬町方面の養蚕農家などへもたのまれていった。 普通荷車には二十四~二十五俵、荷馬車は五十~六十俵つけて下った。 個人で焼いたものは村の追川氏へ出した。追川氏からは高崎の穀屋へ 個人の家をまわったりした。運賃取りが主であった。 運賃は、 明治末

山から村内までの運搬は、 背負梯子は三俵、 馬は十~十二俵つけて運 年で高崎まで二十五俵運んで一円位だった。

材して馬で出した。 材木輸送 烏川に難所があるので筏やさ流しはなかった。 大部分が製



校を卒業するとみんな木挽きができるようになっていた。 昔は木挽きがたくさんいて、角材や板で出したもので、働く人は小学

坂を越すのが大変だった。安中へ行くのには鶏郷峠越えは四里風戸峠越 えは二里半だが峠が難所であった。 輸送先は、川浦や権田方面からきたものを高崎、 安中などへ出すので

が多かった。 輸送する木材は、 室田、 高崎方面が多く、 時には天秤棒 鉄道の枕木

買人が一手に買入れていた。 なマサカリのヨキで削った。枕木は埼玉県の籠原の萩原長太郎という仲 鉄道の枕木は、スリッパといって栗の木を四角に削ったもので、

当時の道路は狭く曲りくねっていて、 かった。逆に高崎の方から運送屋を組んで買い付けに来ることもあった。 崎まで行ったこともある。高崎までは二日仕事で泊まらなければならな 炭のばあいは馬の背に八俵もつける。 運送 馬車(馬力)が多い日には往還を四十台くらいもつづくことがあった。 馬方は土地のひとが農業の片手間にやった。 雨でも降ったあとはことだった。 ふつうは権田まで運ぶのだが、 皆やっ たものだ。

きた。 馬に付けて室田市へ持って行った。タテバで休んだが、フスマが桶一杯 見銭が取れた。昔はクリの木が多かったので、 十銭で馬に飼料をくれた。帰りにサツマ藷をふかしたのを土産に買って 材木を運送車に付けて長井まで運ぶと、問屋が銭を払ってくれたので、 (陳田 家の地フクにするため、

があり、 米は主に下から買った。神山の入沢、 部落の雑貨屋が取継いでくれた。 室田の宮下などという穀屋

は米つけ街道から霧積―峠の熊野神社―信州の道であり、 昔は地蔵峠は通らなかった。「善光寺街道」というのもあった。この道 きた。この街道は、三之倉―下水沼―久能沢―細野―松井田のコースで、 松井田からの道を「米つけ街道」というから、 古くは信州方面の米も 米の輸送とい

昔善光寺詣りをした道であろう。 関所の裏街道になっていた。

と、組合製糸の碓氷社に出す人、仲買人に売る人、 (上室田)の碓氷社に出す人などがあった。 繭は直接製糸会社から買付人がきて買う場合 自分で糸にして本庄 (越後、 信州、 埼玉)

うほかに買置屋というのがあった。買置屋は前借で繭を生産者から引取 方面などは個人の乾燥場を借りて乾燥したりした。 坂上村荻生 仲買人はこの村にも追川氏などがあり、 大笹、岩島などにあったのでそこから買った。 郡内は勿論、 塚 吾妻郡全域、 1 東は佐波郡赤堀位までで、 手広く買ってい 吾妻では個人から買 吾妻の主な買置屋は た。 追川 吾妻 氏

高 弥三郎

原

島 笹 浅 重

酒屋、 外に山田にもあった。

が多かった。(下郷 七の市日に出した。 仲買人の売り先は、 繭の輸送は、 安中の碓氷産業銀行、原市倉庫などで、 運送車もあったが、 小荷駄で出すこと 毎月二・

も三軒ほどの蚕種が入っていた。 蚕種の購入 長野県の松本、 小県郡などのほか、 (下郷 埼玉の勅 使河原から

を飲むものだ。(川浦 宜上とめておいた。峠へ行くまでの一番高い所で、 いい水がわきでている。 問屋場が昔設けられていた。 川浦から二度上げ峠へ行く途中、現在問屋場とよばれる所に、 今でも村のものは、そこへ行くたびに冷たい水 信州から運ばれてきた米を、そこに一時便 不思議とそこだけに

メッタマといって、大きな円板状のものをナタで削った後臼でついて畑 下里見に取継店があった。明治の末年には大豆粕が入った。大豆粕はマ 石灰、ほしか、さなぎなどが肥料として早く村に入った。石灰は

> らもきた。 にまいたり、元肥いにしたりした。室田の富田屋が取扱っていた。(下郷 婚姻 もらうのは上から、 村内の縁組が多く、 くれるのは下へといって、 ついで室田であった。 嫁は坂上方面か

村に来た行商と遊芸人

毒消しは新潟、 魚・乾物類は新潟、 「千金丹は奈良、外に富山から薬袋をおいて行くのがあり、 鋸・はさみは信州、 ・唐鍬は新潟、 薬類は

多いときは七袋位あった。(下郷

に来たもので、 たもので、 富山の薬売りは今でも来ている。(六区 毒消し屋 風俗的にも問題があった。花嫁修業の一つとして毒消し売り 最初のころは、 何年か来ていて、こちらの人を聟にみつけて連れ帰った 紅、 白粉などで化粧して、すごい美人が来

人もいた。 (川浦

に使ったが、胃や腹くだしに効いた。 五・六人で組を作って来た。黄色い硫黄の固まりみたいな薬を毒消し 川浦にはヤマネ屋という宿屋があっ (陳田 た。 泊り客は、 殆んど行商

て死んじゃったということもある。馬頭観音を建てたひともある。(川浦 どの道で、うっかりすると、牧場へひいていった馬を沢へころがし落し ら来る行商などはなかった。あったといっても、やっと馬が通れるてい 人で、富山の薬屋などが常連だった。 外来者 信州に抜ける道などはちゃんとはなかったから、 (川浦 カミの方か

ぬといったふうで、 ではなからあたま(考え方)がちがい、こちらの人より余計働いて使わ 年稼いだあと定着するものもあった。こういう人たちはなかなか努力家 定着した人むらに一時的な労働者として来た人たちのなかには、 地生えのものより生活豊かに勢力家になったものも

運送ひきは信州から来るものが多かった。

(川浦

さかやもの(杜氏のこと)は越後から、

炭焼きは加賀から

ある。やはり越後のひとがいちばんだ。(川浦

にきてこの地に住みついたという。 村に住みついた行商 ツケ木屋の小林政造という人は、数代前に行商

煙草 専売制度前は行商が売りにきた。当時はキザミ煙草である。 明治初年から三十年頃まで日用品を天秤棒でかついで売り

肉屋 安中から箱に入れかついできた。

ラオ屋キセルのラオを取替える人は高崎からきた。

いた。(下郷) 下駄の歯入れ 室田からもきたが村内に歯入れがいて家を廻ってある

て来た。(川浦) 地帯から出稼ぎに来た。なかでも碓永峠の掘さくの前後には、多数やっ **炭焼き** 炭焼きは地元や信州の人たちだけでなく、加賀や能登の豪雪

付けて風にギリギリ回した。(陳田 ギリギリ飴屋は水飴をわり竹の箸の上に付けて売った。羽車を

水飴をオガラにまいて売った。(下郷

ヨカヨカ飴屋は飴をたらいに入れて、頭にのせて来た。(陳田・下郷)

アメ屋は三月頃になると太鼓をたたいてやってきた。(六区

時のことでは箱の中に人形が一つ入っていたという。(川浦 をぶちこわしたというが、そんな話があって以後は来なくなった。その 聞きたいことは何でもいう。昭和の初ころまで来ていたが、どこかで箱 話がうすくなると、わらの穂で水をかけてかんまわして生かして話した。 た。頼むと箱の前に座りこんで先祖さまをよび出して話をしてくれた。 アガタ 口寄せをすることをしごととした婆さんが、箱を背負って来

買い切りのようにしていた者もいたが、若い衆があとをつけ歩いて大さ 六人連れて来て、宿を割当てでとめて、化粧して吾妻の方まで行った。 りしたいい女も来て、芸妓にしたいようなものになって来た。一五~ ゴゼ 大正一○年ころまで来ていた。そのころには目の見えるすんな

わぎだった。新潟県の県令で他国へ出ることをきめてから出なくなった

瞽女は越後からやってきた。(六区)

ころがしは、おかみさんのおもち俵。」など唱えた。(六区 俵をころがして、「一っころがしは千俵、二っころがしは万俵、あとの一っ **俵っころがし** 綱のついている小さい俵を持ってきて、毎戸を回った。

えよいとや申す」などと長い文句をとなえた。そして文句の区切にシャ ン、シャンと鈴をならす。(六区) 一春の初に乗り込む駒は、春の初の春駒なんぞい、夢にみてさ

猿まわしがきた。(六区)

いた。昼は各戸を廻り口説などした。中には夕飯だけコゼを呼ぶ家もあっ 新潟からきた。泊る家はきまっていた。夜若衆が集ってきて口説をき

歳などがきた。大神楽などもどこからかきた。(下郷 遊芸人 テヨボクレは磯部から、春駒は室田からそのほか三河から万

越後獅子がきた。(六区)

乞食 鉢ピラキ、道心ボウといい、昔はよくいたが、今は少なくなっ

民 俗 知 識

一、民 間 医 療

して服用する。(二区 金魚を粘土に包み、いろりの火処でむし焼きにしたものを粉に

したものを患部にはると、根まで吸い出す。(八区) ドクダミの葉を、大きな木や草の葉に包み、火処で焼き、どろどろに

転移を防ぐことができる。(二区) 梅の木に出たサルノコシカケを乾燥し、これを鉈でけづって飲む

んじてのむ。(一区) 胃腸病 センフリ・ゲンノショウコ・ドクダミなどを干しておいてせ

キワダの皮がよい。 しゃく 苦いもんなら何でもよい。熊の胃はよい。(一区

まかくきざみ、土びんで煎じて飲む。(二区 胃病 タラッペの根を掘って来て、その皮をはぎ、乾燥したものをこ

センフリをとって陰干しにしておき、煎じて飲めばよい。(川浦 ゲンノショウコにドクダミをまぜて煎じて飲むとよい。(二区

チンバリをせんじてのむ。(一区

味噌を煮立ててそれを冷して、その液に患部をひたす。(一区)

オオバコは利尿剤で、腎臓に効く。(六区)

アサの虫は子供のカン(ひきつけ)に効く。(六区)

だ。(六区 クサギの木の虫を焼いて食うとカンがなおる。油っこくてうまいもの

火傷には、キュウリの水がよく効く。(六区

ラッキョウを食べると暑さにあたらない。(六区

寝小便には赤蛙を焼いて食わせるとよい。(六区

葉を蒸し焼きにして患部にはってもよい。(二区 ツワブキをあぶってはると、腫物をよく吸い出す。又、青木の

めのころだととくによく散る。アオキの葉をあぶってはる。これはチバ レモンにもよい。(一区 白い花の咲く水仙の球根をオロシでおろしてこれを患部にはると、始

乳バレモン はじまりのときは水仙の玉(球根)をすりおろしてはれ

切り傷 三種類の草をもんで、患部にはって、ほうたいをする。ドクば早く直る。(川浦) ダミを煮だした汁の中に患部を浸す。(二区)

につける。(一区 ヂンバリの葉をもんでつける。モチ草など三種の草をもんで、それを傷 チンコロ柳の毛が傷によい。 血どめに なり 癒るまでとれない。他に

え言をいいながらやってくれた。(岩氷出身の者 うるしにかせたときは、岩氷の人におまじないをしてもらう。 何か唱

る。夏菊・雪の下などもよくきく 暑気あたり タデの葉やウドのしんをもんで、臍又は足のうらにつけ

キュウリとタデとを塩でまぜて、水の出るほどもんで足の裏につける。

メメズをとって腹の中のものをこいた後、 煎じて飲む。 (川浦

馬の暑気あたり馬が暑さで倒れた時には、 舌を引っぱり出して、塩

を塗りつけるとよい。(二区) 梅干をはる。(一区

梅ぼしのやわらかいのを頭にはる。酸が強いからよく効く。(川浦)頭の痛いときは、野生のハッカの葉をよくもんで頭につける。(川浦)

風邪 桜の皮を煎じて飲むとよい。(二区) 梅ぼしのやわらかいのを頭にはる。酸が強いからよく効く。

悪阻 つわりがひどい時、なまの小豆をつぶして飲むとよい。(二区)

りん病 ドクダミと一緒にメメズをこいて、土びんで煎じて飲む。(川

子どもは常時ドクダミを煎じて飲んでいれば病気がおきない。一毒下し、ドクダミがよい。梅毒系のものによく、親がなった人などは、

(=甫) 土用にとって陰干しにしておいて、それを煎じて飲めばにおいがない。

切り傷などは、すぐに治る。(二区) 入れて湯の中へ入れる。(冬あたたまる)。ドクダミを入れた湯に入ると、薬湯(桃の葉を束ねて入れる。(アセモによい。)蜜柑の皮を布の袋に

ていを飲むと、たいていの病気は治る。心臓病などには特によくきく。(二これを飲むと、たいていの病気は治る。心臓病などには特によくきく。(二)が作薬 縞蛇、蝮などを黒焼きにして、薬研ですりつぶした粉薬で、

ものほどよい。(川浦)は焼酎を補充しておけばよい。うちみ、血の死んだのによく効き、古い見ると飲みずらいが、別の容器に移して使えば平気なものだ。減った分の中のものをはかせ、しばらくしてから焼酎を入れてつくる。蛇の姿をマムシ酒 とったマムシをびんの中に入れ、水を入れておいてよく腹

駅の油 神経痛のとき、熊の油で天ぷらにして食べると治る。(七区)

二、ま じ な い (呪)

○門戸守護を目的として春祈禱をする。吾妻から法師が来ておはらいをラオンケンサマ」と唱えながら、唾をつけて患部をなでる。○足に豆ができた時には「すがお峠のたろはちの豆、なおれなおれアブ

して、戸口にシメ繩を張り、お札をはって魔除けとする。(二区)

枕の下に入れる。初夢に良い夢を見ることができる。(二区)〇「長き夜のとおの眠りの皆目ざめ、波のり船の音のよきかな」と書き

てから、とぼ口の所にあげておくと、蛇が来れば追い出す。(長井)キッポウ(ぬるでの木を刀の形に二本作り、どんどん焼きの時に焼い

なかびき」と唱えると、泥棒が来ても、すぐ目が覚める。(陣田)泥棒 夜寝る時、「寝るぞねだたみ、頼むぞたるき、何事ありとも起せ釘 釘を踏んだ時は、上から金づちでたたく。(長井)

け、いぼ(大反では、いぼ神様に、いぼの数だけ持っていってなぜる。(長

メッパ 井戸へ行って、芋を洗うメケーかふるいを半分見せ、直った(川浦) 宮原のイボ石のお水をつけるといい。イボ石は、薬師さんの所にある。

井戸神様にフルイを半分見せて、「直してくれればみんな見せるから」ら全部見せる。(長井)

と願をかける。(川浦)

掛けをした。(水沼)の場合は、妙義神社にはだかまつりをするといって願いれる。

おくと直るという。(長井) 虫歯 大反では、山中かんすけのいえと半紙に書いて、大黒柱に貼って

やけどになった所へミソをぬる。

やけど
コキさんという人のおまじないで直る。

炭酸の水をぬる。(川浦)

猿沢の池の大蛇が火に焼けて

痛まず、しびれず、ひりつかず(一区)をいる。

しびれ額につばをつける。(長井)

てんかんのはを出すから、取ったり、かまったりしてはいけない。

(長井)

しばってもらう。 コーデ 両親のある子どもに男なら女に、鉄瓶か鍵竹から手を通して、

をこよりにして、それで縛るとよい。(一区) 痛む手を鍋のつるをくぐらせて出し、その手首をしばってもらう。 女なら男の総領または末っ子がよい。また釜神様のオンベロ 男

元結でしばってもらうとなおる。(六区 鍋のツルに手を通し、男は女の末っ子、 女は男の末っ子に、 白い 糸

鼻血 ぼんのくぼのチンゲを抜く。(長井)

帰って来る。(長井) 飼っていた犬・猫がいなくなった時、 使っていた椀を伏せて

さわればワクサの悪いにおいはしない。 と唱えながら、さわるか、又は、さわる前に自分の手のにおいをかいで ワクサ
ワクサのにおいを防ぐには「オチョロムシ、 (七区) オチョロムシ」

ワクサ(亀虫)を払う時には「おじょろむし」と唱えると臭みがぬけ <u>三</u>区

真黒い大きな茸)を煎じてくれる。(長井) ひきつけ 皆で大きな声で名を呼ぶ。ししたけ(やたらの所に出ない、

がもえきるまでにあかんぼうが生まれるという。安産の場合には十二様 へ一本ローソクをたてて、お礼まいりをした。(水沼 おがんでもらったローソクを八十二様にあげますといって、神棚にあげ 安産むらにいた上原まささん(明治十二年生まれ、 出産のまぎわになって、ローソクに火をつける。そのローソクの火 すでに故人)に

足が痛ければ六三

肩が痛いと六三

総身六三である

撮影)

わき腹が痛いのが六三

しゃっくり うんと息を吸いこむ。 たまがす。(長井

雪の下の青い汁を耳に入れる。馬糞を紙に包んで耳にあてる。

イモの道祖神に願かけをする。「直してくれればサカダチをするから」

といって拝む。 道祖神さんにおがんしょをかける。 おがんしょばたしには吹竹をつ

くって供える。(川

入れてかがせる。地蔵様に願をかける。 **夜泣き** 鬼子母神にお茶や帽子をあげる。ねぎを細かく切って、 (長井)

猿沢の池のほとりになく狐

狐なけどもこの子泣かすな

止まる。(一区 右を紙に書いて三回唱え、 その紙を枕の下に入れて寝せると夜なきは

らって食べると癒る。 クツミレー(百日咳) 区 三夫婦そろった家の、 仏様に供えた御飯をも

ねずみ正月中は、よめごといい、 四日オシリョ

サマを拝むと、

出ない。(長井)

もいう。また原谷戸の薬師にお参りする。癒ったら、「め」を自分の年齢 だけ紙に書いて供える。 はやり目(ヤンメ) <u></u>区 小便をつけて。 馬のシリゲエでこするとよいと

はいけない。(第一区 椀で茶を飲むと中気になるから飲んで だ。中気にならない。そのあとその茶 三元日にはヤマイモを食べるもん

る、鉄の粉を、まわりにまいておく。 (長井) 蛇よけ 鋸の目立てをする時に出

算という。 九で割って、 に立てて拝むと、 痛いとか足が痛いのがなおる。年令を 六算除け イロリの中に線香を三角 余りのあてはまるのが六 みているうちに腰が

様(都丸十九一

七の肩。 一、三が足。二、六の脇。 八股。 九はかしら 四腹、 (頭)。 Ŧį.

20歳の人

10歳の人

10 - 9 = 1

 $20 - (9 \times 2) = 2$ 50歳の人 $50 - (9 \times 5) = 5$

54歳の人 54 $-(9\times6)=0$

恵 応

割り切れるのは総身という。(川浦

た川の傍で一把の線香を立て、痛い所の治るよう拝む。 六三の神様に、老人に○○が痛いから治してくれと拝んでもらう。ま

という。(本丸) シハラハチマタクガカシラ、ゴヒチの肩にイッサンが足、ニロク脇腹

る。ぶちやる(棄てる)時は、かならず折る。(長井) 南天の箸で食べると、中気にならない。タマンバラの箸で食べ

げるという。(水沼) 血圧で倒れたとき 高尾山にたのんだ。お礼まいりにはぼんでんをあ

ろからはだしまいりをするから、一生根ぬけにしてくれとお願いした。 胃の悪いとき 太田の呑竜様へ願掛けをする。なおったら、門のとこ

蜂にさされた時 歯くそをつける(一区)

のどに魚の骨がささった時は、象牙の箸の丸い方でなぜる。

のどにつかえたとき お湯をのませればよい。

象牙でのどをなぜおろすとおりる。

けると、 とをやって、いまでは櫛の歯が二本くらいしか残っていない。(川浦) かえた人が借りては 一本 欠い て返し、次の人がまた一本欠いて返すこ 小栗上野介がアメリカから帰って後、ある人にくれた櫛を、のどにつ 寒いうち、柿の木の幹に「なるかならぬか」といって、傷をつ たいがい柿の実がとまる。(長井)

よい。メケー(目のあらい籠)をかぶるとメカゴができる。 メカゴ ふるいを井戸神様に半分見せて、治れば全部見せると言えば

書いて、家の棟木にはっておく。(一区) 火伏せの呪い 「霜の柱・氷の棟木・マメノタレキニ雪ノフキ草」と

アビラウンケンサマ」と一回言って は三回フーと吹くことを、三回く ウルシにかせると、「去年の三月、アビラウンケンサマツカ、

り返すと治る。(本丸)

の薬師様に、紙に「め」の字と名前を書いてオガンショかけると治る。 四月八日に薬師様で村の世話人が用意して甘茶を出す。

(本丸)

とみつかるものである。(上村) から是非教えてもらいたい。みつかったらほどくから」を拝む。不思議 おき、初夕立、初雷のときに、一・二粒たべると雷に当らない。 物を見失うと、カギ竹を一本のワラでしばって、「○○がみつからない カギ竹 節分の時の豆を一部残して紙に包み、カギ竹にしばりつけて

歯痛の時は、ほうちょうで切るまねをするとよい。 下村の弁天様の石の水で眼を洗うと眼病が治る。(下

泣かすな」と三べん唱える。

子供が夜泣きをする時は「池のほとりの古狐、おのれ鳴くともこの子

咽喉にノギがささった時は、象牙の櫛や箸などで、咽喉をさするとよ

「め」の字を年の数だけ書いて、吾妻の元宿の薬師様に願をか

ける。(一区) とよい。(六区) 初雷の呪い 囲炉裏の正月様の松をとっておき、 初雷の時に外で燃す

とを先達にして大きい材木で剣を形どったものを二つつくり、これを奉 角落山のお天狗様に立てた。お天狗様を厚く拝む人が赤竹にいてこのひ るが楽にのぼれる裏山側からのぼるのとふたてにてわけして同時にふも コレラが流行した。 とを出発したら、不思議なことに頂上には同時に着いた。慶応年間には 納した。お願所の一行はむずかしい表山側からのぼるのとまわり道にな **伝染病封じ** 伝染病のチフスがはやったとき、伝染病封じのお願所を

たみのへりはふまない。 しきいはふまないー -親の頭をふんだのと同じ。 た

目上の人の前を通るな。

炉ぶちを叩いては悪い。きせるも

テイザシキに座るな。「お米を買わせられる。」

炉でもしては悪いもの――青もの、くさ木、ユズの木、グミの木、ウル

いて下る。(一区) 朝藤夕繩—— -太陽が藤を首にまいて出てくる。夕方太陽は繩を首にま

衣服のしつけ左前はいけない。

お客さんには前掛け(今はエプロン)、たすきを外して挨拶する。(一

をいやがる 着物を左前に着るのをいやがる。左廻り、左膳(おつけを左におく)

汁かけめしを食べると、その日のうちに恥をかく。(長井 食事のしつけ 茶わんやオヒツのこばを叩くな、オサキが来る。

寝て食うなー 一牛になる。

左膳・タツゼン――死人の供物の膳だから忌む。話しをしながら食べ

杓子で盛る時、箸を持ちながらするな

イッパイもんはよくない。まねだけでもしろ。(一区)

アグラをかいて食べるな。年よりは立てひざ。三杯汁は馬鹿が吸う。

忌

生ナクッテ」といって。 永井、追川イッケでは正月六日までは菜類は食べない。「一

といった。ただし盆ざかなという語はある。(一区) 盆、彼岸には魚は食べない。「親の日にトト食って背が小さい。」など

・とろろ飯を食べた茶碗で湯を呑むな。中気になる。

・一夜餅をつくものではない。(二区)

日忌み

戌の日に田植はしない。葬式団子になる。

社日には土を動かさない。 不浄日には始めて山に入らない。

結婚式、寅の日を忌む。

葬式、 友引は避ける。

尻餅をつくといって、死者の四十九日の団子になるという。(一区) ・犬の日に田植をするものではない。苗間の尻の方にモチ米を植えると、 身をたつなといって已の日を避ける。(一区

禁忌作物、 動物 落合の永井一家ではキュウリ・トウナスは畑に植え

ない。白い動物(馬・犬・兎)は飼わない。(一区)

忌み言葉 塩、夜はシオを忌みナミノハナという。

鼠、蚕のときはネズミといわずヨメゴサン。 夜家の中で口笛を吹くと魔物がくる。(一区)

ホーズキを屋根にうえると、うなり声がする。病人の絶えることがな

いという。(六区

イチジクを植えてはいけない。(六区

屋敷にウドを植えるとよくない。(六区

エンジュの木を屋敷に植えると雷が落ちない。(六区

生傷のある人は鱒を食べるな、七年前の古傷をよびだすという。(六区)

長井の牧野さんはキュリを作らない。(六区)

いなども前日にとって用意しておいた。(川浦) 神講のときにも「今日はとっちゃあいけないぞ」といわれるので、やさ その他の禁忌 地神さんのおまつりには畑に入るなという。だから地

掃除はしていてもはき出すものではないと言う。葬式の時にはすぐには 外出する時にすぐには家の中の掃除はしない。橋を渡るまでは

食事のあとは自分の茶碗で茶を飲め、そうすればあたらないという。 八月のお盆月に仏様の茶ワンをわると葬式がふえるという。(六区)

Ŧį, 子

兆

観音様の芋出し桜が咲いたら土と芋をかこい穴から出せ。 久能山(南の方角)に雲がたつと雨が早い。 <u></u>区 (二区)

北山に雷が鳴っても、すぐには来ない。

榛名湖の上空がきれいに晴れた時は、間もなく雨が降ってくる。

ている時には間もなく上天気になる。(二区)

あかぎれをきらして、痛むと大風の前兆。(一区

雨の降っている時にカラスがなくと天気になる。(六区

鳥がさわぐと大雪になる。(六区)

ケロケロ(赤い鳥)がなくと雨が降る。(六区)

昔の人は、雉子が鳴けば雨が降るといった。(一区)

池の水が澄むと天気、濁ると雨

蛇が出る、木に登ると雨

朝雨と女の腕まくりはたまげるな。

ヤハズ山 (川浦の奥にあり) に雲がかかると雨

雷の北鳴りはひどくなり、 南はたいしたことなし。

家の土台石の中に湿るとすぐぬれる石がある。その石がぬれると雨、

乾くと天気。

石垣がしめると雨

鉄びんがさび、農道具がさびると雨

ケヤキの芽がイッサンに開く歳は陽気がいい。(一区

ケブが南にかえるときは天気がよい。 浅間山のケブが北へ返ると天気が悪い。近いうちに雨が降るという。 (川浦)

蜂の巣が杉の下にある場合は、 水が出ない。

蛇が木にのぼれば、必らず近い将来に台風やあらしが来る。

(川

とうもろこしの当り年は、豊年。

とうもろこしの根が張ると、台風が来る。(長井)

月がカサをかぶったとき、その中に星が一つあると、一日後は雨にな

がある。大風を用心して低くつくるものだという。 ハチの巣が高いと風が吹かず、 あらしがないが、低いときは、 (川浦 あらし

夕立は馬の背を分けるという。 右側は降っても左側は降らない。

という言葉はない。(本丸)

西の山に入道雲が出ると夕立。

榛名に入道雲、鳥渕に夕立来ず下に行く。 トウキビの根が上に張ったり、 蜂の巣が低いと嵐

波雲が出ると近いうちに雨。(本丸)

が残るという。これは仲々見付からないし、皮がうすいのでじきに風に ヤマカガシのキヌを脱いだのを見て、取っておくと運がいいが、金

のは人に言っちゃ効力が駄目になる。 蛇が三匹トグロを巻いている所へ線香を立てると運がいい。こういう (陳田

は泥棒が入るという。 朝ゲにクモが出たのをふところに入れると運がいい。夜のクモ

毛 毛のうんと生えている人は丈夫、毛の薄い人は弱い。どこの毛で

巻目が脇に流れている人は意地がわるい。 運がいい。マイ毛(眉)が長いと長生きをする。 巻目がまっすぐなら頭がい (陳田

は耳が大きい。 顔 耳たぼが大きくて、 豆が落ちないような人は運がよい。 えらい人

額の広い人は頭がいい、 偉くなるという。 (陳田

相だという。 フスベ 眉間にフスベ(ほくろ)があると偉い人になる。 天下を取る

目の下にあるのを、泣キフスべという。 (陳田

マムシ指の人は丈夫。(陳田

ヤマカガシ指は細くて先が尖っている。 (陳田

がるしるしだという。ほんとに仕事があたって運がよかった。(陳田) 中に聞こえた。「ナリアゲロ」といって運がいい、身上を残すと、身上があ 不吉 釜が鳴口 烏鳴きが悪いと人が死ぬ。 十三、四才の頃、釜で湯をわかしたらうなり出して、 ムラ

したときキジが二羽立て続けに家を通りぬけた。 山鳥が家の中を通りぬけると不吉のことがある。 話者の弟が二人戦死

百日花 屋敷にユズの木・ビワの木を植えるとフマが続く。 (百日紅)は家に植えるな。(一区)

川で魚をとった夢をみると人が死ぬ

蛇に手をかじられた夢をみると金が入る。

理

耕 地の面積の言い方。 四十坪が一つか、三十坪が一畝である。

> 東で一ダン(駄)である。(二区 稲束の基準は、稲二つかみが一把、二十把から二十四把で一束 (足)、 六

さ加減を調節する。(二区 とされた。それ以上だと芋が腐る。 さつま芋の苗代の温度は、手を入れて測り、 麴の温度も同じで、手ではかって熱 人肌ぐらいの熱さが適当

ツカが畝 ヒトツカ 川浦では一ツカが四十から四十五坪をいう。

と同じである。 上の山は一畝半、 (七区 田の「一升まき」は一畝であったが現在の三合まき

薪ヒトタナ「幅六尺、高さ三尺の中に積み上げた量をヒトタナという。 薪一石 コマキ(小薪)にして二〇束、 一束目方で四貫匁 _川

繩 一房 二〇尋の長さ

一東 二五房のなわの量 一(川浦

<u>二</u>区 がある。さく幅一尺、苗と苗の間隔が六寸というのが田植の方式である。 タグルマ 田植繩のことである。 一尺の印と六寸の印のついたもの 66

とさくおろぬきの場合は四畝、 人前であった。朝食の前に仕事をすることを「めし前仕事」という。(二 「一人前」とされていた。(十六貫俵)女は男の半分の仕事が出来れば一 一人前の仕事の量 ヒラウナイは一人一日二畝、オネガケといい、 田植は三畝で、普通、米俵をかつげれば

山の下刈り 一反步

きりしない。 山仕事など、 (川浦 歩合制でやるので一日いくらという仕事量: 給金ははつ

第二次大戦前頃は一円、大正・七~八年頃は五十銭であった。(二区) 一人前 田打ちは一日五畝が男の一人前。 女は三畝。 一人前の日当は

若い衆がこれをかついで力だめしをした。(二区 カ石 神社の社殿の前に置いてある。十五貫と二十貫の二種類があり

て、その他

たちは、天狗様のお宮の前でお祝いをした。(水沼中尾)の天狗様にしんぜてから、天狗様のお宮の屋根にぶっかけた。むらの人社でご祈禱をしてもらって竹の筒に水をもらって来た。その水を、むらこのときには、むらの代表の人(五、六人)が榛名山へ行って、榛名神このときには、むらの代表の人(五、六人)が榛名山へ行って、榛名神のとい。日でりが長く続くと、一戸から一人ずつ出て雨乞いをした。

十二さまのおまつりには木を切るなという。(川浦)しお神酒をあげる。たいてい効果はなかった。(川浦)諏訪神社に神主を頼んでもらう。村中のものが誰となしに集って参拝

(川浦) 山の神は男で、十二さまは、葬式して間もない人はいけないといった。ており、百姓の八割は、山仕事をしていたから十二さまをおまつりした。山仕事をする時には、山を拝んでやった。戦争前は、みんな山に関係し十二さんは山の神さまで大山祗神、高い山にはみんなまつってあり、

るから。

(陳田

枡の中に毛虫が一匹ナアーニ

馬、

馬屋が四角で中に馬が一頭い

原 応 様(都丸十九一 撮影)

恵

お竹さんの腹下し、イロリの鍵所。(陳田)枡の中にボタン一つナアーニ、イロリの火。

おく。(長井)ているのが、まむしよけになるといって、わざわざしばった所を出してているのが、まむしよけになるといって、わざわざしばった所を出してはな結び(畑へはだしで入ったが、暑い時は、足半をはいた。先の出

音がした。(長井)帽子一つない。ちょうどその頃、横浜の細君の所の硝子戸が開き、靴の戦死(おらんだの船をぶんどって、次の港へ行く途中、機雷に触れて、

てある。で、露店なども出てたいへん参詣者があった。墓碑には次のごとく刻しで、露店なども出てたいへん参詣者があった。墓碑には次のごとく刻し、恵応様(虫封じの神として昔はたいへんさかった。三月十二日が縁日

宝曆九卯天四月十日 () 宝曆九卯天四月十日 () 宝位

(一区)

社会生活

があるので列拳して解説しておこう。全体としての報告量は多くはない。しかし注目すべきいくつかの事象

ように大字に共通した概念内容を持っていない。たとえば、三之倉では別表の大字に共通した概念内容を持っていない。たとえば、三之倉では別表のに交錯していることである。小字、班、組、コーチ、隣保班等々は、各第一に大字を細分した組織の呼び方にさまざまあり、それがいろいろ

大字――班――コウチ(隣保班)

まって、政治的区分ではないようにうけとれる。コウチは隣保班よりも広範囲でありながら、「一つの生活の範囲」に留対し、そしてコウチ惣代なる言葉すらあるに対して、水沼においてはあって組成されているという。即ち三之倉がほぼコウチ=隣保班なのにの小字を合せてひとつのコウチを形成しているというし、組はその中にと細分化されてゆくのに対し、水沼では、一戸から二十二戸に亘る五つ

ように問題を提起しておいた。 ように問題を提起しておいた。 なのかも知れないのである。が、現地の状況等からみて、別記の が大体においてうまくいったので、歴史的部落組織であるコウチを隣保が が大体においてうまくいったので、歴史的部落組織である。 は、これが

況である。ところが、別記報告にあるように、この地域では、総有、あた。それが共有の名において、名義人のみの所有になりつつあるのが現「共有」と呼ばれても、それは、「総有」と呼ばれるべき性質を持ってい第二に村持ち林野についても古い形を保っている。一体に村持ち山は、

るいはそれに近い形を留めている。

共有方式をとるところもあるのである。

共有方式をとるところもあるのである。

共有方式をとるところもあるのである。

大方式となった者は、一日日当分の拠出金を出すと共有山の権利を与えるが、人となった者は、一日日当分の拠出金を出すと共有山の権利を与えるが、人となった者は、一日日当分の拠出金を出すと共有山の全員になったり、ということができるであろう。ただし、川浦西ヶ渕の様に、刈払いの義格が生じ、同時に恩典にあずかる権利も生ずる。川浦矢陸でも、「区の住務が生じ、同時に恩典にあずかる権利も生ずる。川浦矢陸でも、刈払いの義に山林売却代金を分配したり、金銭を払って共有山の会員になったり、三之倉において、台帳名義人は二五名だったのに、全戸に近い一六四三之倉において、台帳名義人は二五名だったのに、全戸に近い一六四三之倉において、台帳名義人は二五名だったのに、全戸に近い一六四

その刈払い等の作業もオテンマの中に入るのである。まり変らない。ただし、共有林野が総有の形をとっているところから、であるが、西上州に広く使われている。内容については、他の土地とあ伝馬」に関係することばに由来するであろう。無料奉仕の村人足のこと第三にオテンマについて。この言葉は、元来街道の運輸に当った「お

注目してよい。

第五にトムコについても大いに注目してよい。 従来の調査報告書に見

ことである。それがしだいに近隣集団化していったように思われる。 団と考えてよいし、また自隣保班でない隣の隣保班の者をトムコとすれ 難い。「徴兵検査ぐらいまでの上下三つ違いの男だけの仲間 られなかった特色ある民俗である。トムコ・トモコは漢字で書けば友子 になっているので、一応元来は近隣集団からしだいに葬送のみのつきあ で思うことは、トムコはもともと年齢集団であったのではないかという これは他の地域にみられる若者組の機能を果していることになる。それ 謡をうたったり、 鶴亀のかざりをつくったり…… (水沼)」等であるから 結婚式のみであるし、その仕事も、「三々九度の盃のときに立会ったり、 ば、これは隣保組織と考えてよい。しかもこの果す役割りは、いずれも であろう。これが年齢集団であるか、近隣集団であるか、明確には言 いに限定されて来たものであろう。 いっているし、契約の折にトムコ入りをしている事実からすれば年齢集 ホウベエは朋輩であろうが、これまた葬送の際にそういわれる例は多 ついでに、トムコが結婚式場を使用するようになって消滅し、ホウベ しかし多くは近隣集団の称呼(この土地でいえばコウチのような) (長井)」と

ただいた。(都丸十九一)をお本村大字水沼出身の関茂氏より、別項の通り二篇の特別報告をい説しておかなければならないようなこともないように思われる。その他講、家族生活等についての報告があるが、とくに取りあげて解

る上で興味深いことである。

エの方も火葬が普及するに至って消滅したというのは、

民俗の変遷を知

一、村組織・村 役

と大字水沼の一部が合併したものであるので、必ずしも混然一体とは村組織 第一区は昭和三四~五年にできた行政単位で、大字下三之倉

のが混じり合っているので、左表に纒める。と寺は水沼の関係が強いと言っている。村内組織は新しいものと古いもなっていない。以下水沼の一部の者では、相変らず学校(同窓会関係)

水	沼				下		Ξ	之		倉				大字
8 7		6		5		4		3		2		1		班
島山	相吉	同東	高野谷戸西	上ノ谷戸	綱取	土城谷戸	原谷戸	石上	田畑	下久保	落合	明神	猿谷	部落名
21	19	26		39		27		43		34		16		世帯数
シマヤマ	アイヨシ	- H	コファブイト	ウエノカイト	ツナトリ	ドジョウガイド	ハラゲート	イシガミ	タバタ	シタクボ	オチアイ	ミョウジン	サルヤ	コーチ名
		コウヤガイト	メノキ	ウエノカイト		コゲート	ハラゲート					,	ザルガイド	カイト名
		人が住んでい	ゲートもある。今は西にはさらにカゼ											備
		ない。	。 に カ ゼ											考

となり、他は副班長となっている。になる。しかし1~8よりそれぞれ一名の代表を出すので、一名が班長になる。しかし1~8よりそれぞれ一名の代表を出すので、一名が班長部落(コーチ)ごとに組まれているので、隣保班長は計十四人いること右表のうち、班の1~8は便宜的な組み合せであり、実際の隣保班は

とをコーチ総代とも言っている。(右の各部落は、以前それぞれコーチと言っていたので、隣保班長のこ)

れニカイトを含む場合があり、またコウヤガイトのようにごく一部をウと全く一致する場合もあるし、サルカ、ドジョウゲートのようにそれぞまた三之倉では八ゲードがあると言われて来た。しかしこれはコウチ

ない場合もあって複雑である。 メノキゲートとよび、カゼゲートは現住者がないため八ゲートに含まれ

ろ今後の研究にまつべきである。 らば、それ等は早い時代にカイト名を失ったか、 イト名を附せられないままコーチの時代に入ったのである。いずれにし さらに全くカイト名を欠く場合もある。 カイトを村落組織と考えるな 新しい開発に属してカ

耕地二区には、 上宿、中宿、下宿、 森下、 暖井の五つの耕地に分れ

も組んでいる。むかしは、隣組といえば、親子と同じつきあいをしてい 軒単位ぐらいになっている。(水沼) 谷戸(十一戸)、落合、森(合せて十五戸)の五つの小字を合せて、ひと た。五~六軒で組んでいた。現在の隣組は、家並でくんでいて、大体十 の範囲をなしているものである。組はその中にあって、字をべつにして つのコーチとなっている。コーチというのは、このように、一つの生活 たとえば、相間コーチの場合は、上相間(一戸)、相間(二十二戸)、大 い。コーチというのは、いくつかの字がよってつくっている場合もある。 コーチとクミ 水沼の場合、大字―字 ―組というかたちをとっていな

中には十二軒組 たのである。(上村 鳥渕村の四つが合さって十一区であった。隣組制度ができて四つになっ 部がトモコとなる。隣組ができる以前は、本丸は四つが一つであった。 共同墓地がある。式の日やカネツケの日に、 部落に隣組は一つずつ、 七班は本丸十四戸、上野十一戸、間川九戸、田中、それぞれの (山根の堂の近くに墓を持つ十二軒で構成する)という 従って四隣組ある。庚申組は三~四組ある。田 四部落全部を招待すると全

かし、村会議員でも、 鳥渕村は、十五区に分れていて、その中で川浦は七区まであった。し 村の財政面でも、四分六分で川浦の方が多くもっ

村役 三月二十八日の祭の午後班長が寄って、区長・副区長を推薦す

主任をきめ、 地総代があり、 る。どちらも二年が年期である。副は会計をかねる。世話番の中に、 秋の市民祭に参加する。(長井) その人が触れ番をきめる。今は体育が盛んなので、

らはない。多人数の目で見れば人物はきまる。 無給 (現在は有給)。 任期二年、村のケイヤクの席で、推せんできまる。特別の家か 何の権利もない名誉職で

一年中の村の行事の決定権をもつ。

区長代行(副区長役) 戦後おかれた役

すぐにいやになるがこの役だけはやめたがらない。(川浦 年、輪番寺世話人(総代)昔からの名士で、死ぬまでやる。 話をする役で、トムコの先達もこうした人がやる。任期二年農事実行組 合長、養蚕実行組合長、衛生委員、神社の世話人(氏子総代)に任期二 世話人 コウチ毎の代表で、各組ごとにきめる。祭りその他一切の世 (他の仕事は

上・下に分かれているが、上・下順番に選ぶことが多い。大体推薦で選 長の任期は二年で総会で選出する。岩氷公民館のある湯ゲ沢を境にして ぶことが多いが決まらない時は、各班から選考委員一~二名が出て選挙 区長 総会を三月三十一日に行ない、年度の決算報告等を行なう。区 70

は公民館の管理運営が大きい。 村からの伝達や募金・道路河川愛護等の仕事が多い。区の仕事として

と同時に区長会にも了解を得て協力を要請している。 村全体として区長会がある。大きな事業をする時には村議会にはかる

区長は村長や村会議員の選挙の時には大事な立場になる。(岩氷) 任期は二年で二月十一日のケーヤクの時に選出する。

実際の仕事は区長よりも班長が行ない、忙しい。

班の下に隣組があり七~十三軒で一組となり、岩氷では十八組ある。

副区長一名、その下に隣保班長がいる。六区は八つのコウ

シ)の二コーチが加わったものである。のコーチに、花輪・鉄火・高座(ハナテッコウ)と水有・押平(ミズオのコーチに、花輪・鉄火・高座(ハナテッコウ)と水有・押平(ミズオー八つのコーチとは、上権田、上ノ久保、上宿、中宿、下宿、下平の六つ

区長の責任は重い。
区会議員は各コーチに一名いるが、寄付集めなどに顔をだす程度で、

な面が多い。自腹を切るような点もでてくる。 区長の仕事は、村議会の決定を隣保班長に伝えたりなどのほか雑用的

現在では、区長に年五万の手当がでる。(六区)

までもする。(七区) 別当 諏訪神社の管理の責任者として別当といわれる役がある。祭り別当 諏訪神社の管理の責任者として別当 諏訪神社の管理の責任者として別当といわれる役がある。祭り別当 諏訪神社の管理の責任者として別当といわれる役がある。祭り別当 諏訪神社の管理の責任者として別当といわれる役がある。祭り

こともあったという。原谷戸では明治年代にこの例があった。特にその盗みなど働いたために村を追い出されて十年以上たってから漸く帰ったこの契約の席に呼び出されて叱られた。また若い衆が風紀を乱し、またこの契約の席に呼び出されて叱られた。また若い衆が風紀を乱し、またこの契約の席に呼び出されて叱られた。また若い衆が風紀を乱し、まり男がつき、女が丸める作業の中で、花嫁や花婿には、鍋墨やあん、トリ男がつき、女が丸める作業の中で、花嫁や花婿には、鍋墨やあん、トリ男がつき、女が丸める作業の中で、花嫁や花婿には、鍋墨やあん、トリ男がつき、女が丸める作業の中で、花嫁や花婿には、鍋墨やあん、トリ男がつき、女が丸める作業の中で、花嫁や花婿には、鍋墨やあん、トリ男がつき、女が丸の名に乗ります。

ら村を逃げだした人もいた。時の言葉は残っていないで「村を追われる」と言っていた。また自分か

ずつ出る。(第一区)事会ともいう。翌十二日をモチゲイヤクといい、各家から男一人女一人事会ともいう。翌十二日をモチゲイヤクといい、各家から男一人女一人なお島山と相吉では、二月十一日をワカイモンケイヤクといいまた議

区)
区かった。悪いことをすると、契約によび出されて、お説教された。(一なかった。悪いことをすると、契約によび出されて、お説教された。(一に入った。そして代りになる者があるまで入っていたので年齢に制限は「カイモンゲイヤク」島山、相吉では、学校を卒業すると若者の仲間

村の年間の運営について相談する。祐全寺で行なったがのち公会堂で、戦前でやめになった。議事会、大字三之倉全体の総会、もとケイヤクといった。二月十一日。

① 区長をきめる。

② 会計報告や予算をきめる。

③ 行事をきめる。

をして飯を炊き、汁をつくり、酒も出た。一戸一人は必ず出た。等が中心で、もちろん区長が主催する。会議終了後はコーチ総代が世話

ぼ同じである。(一区)(今は区総会と呼び、大体三月下旬の日曜日に行う。方法は議事会とほ

する。制について厳しく反省し、場合によればつるじ上げや自己批判をしたり制について厳しく反省し、場合によればつるじ上げや自己批判をしたり告を行ない、一年間の反省を行なう。その後で一杯飲む。村の行事や規る位の大きな家でやった。班長を始め各役員を選び、事業報告や会計報る位の大きな家でやった。 安は公民館でやるが以前は村中集まれ

しく守られている。 その一年間に村に来た聟は一升吊って来て紹介してもらう。席順も厳

という意識は強い。出稼に行っていても帰村して出席する。(岩氷)色んな会議の出席状況は最近よくないが、ケイヤクには必ず出席する

「人座っこ。 ケイヤクの座席は、区長が中央、そのつぎの席にわかいものがしらが

してはならないという程度のお叱りであった。で訓戒を与えた。べつに罰則はなかった。これから先、そういうことをいって、自分の座にもどった。警察沙汰にならない程度のことは、ここた。注意されたものは、これから気をつけますから、ご勘弁願いますとケイヤクの席で、わかいものは、わかいものがしらからおしかりをうけ

事についてとりきめをした。(水沼中尾)ケイヤクのことは、二月のとりきめといって、議事会で、一年中の行

近は勤め人が多くなったので、日曜日にしている。契約は字ごとにやっている。時期はかつては二月七日であったが、最

理をとるようになった。 る。むかしは、会食をしたので、一人米四合ずつもちよせた。最近は料契約の席には、各戸から、成人の男子は皆参加するのがたてまえであ

gvカ)ーに、見ぶた、こういつしてなる、、 うっくりとなける要契約のときには、役員改選とか、行事予定などきめた。

ってきて、仲間入りさせてもらった。契約の日に、親が子どもをつれてきて、トムコ入りをさせた酒を一升も

現在は(戦争後から)契約には、一戸一名参加することになっている。は、一戸一人ずつ参加して飲んだりくったりして祝った。一番契約の場合には、一人前の男子は皆参加した。二番契約の場合に

(水沼)

たが、現在は二月の第一日曜日ときめている。しは、ご祝儀のあった家を順に借りておこなった。時期は二月七日であっ相間の契約(契約をする場所は、現在は公会堂になっているが、むか

ので、あずきの量で何口ということがわかった。かじめ希望をとった。あずきを一口につき、おかさに一杯ときめていた茶わんのふた)に一杯ずつあつめた。もちは、一人につき、何口とあらて、参加人数に応じて分けた。あずきは、一人前につき、おかさ(めしここでは、もち米を一俵買ってきて、もちをついた。あんぴんをつくっここでは、もち米を一俵買ってきて、もちをついた。あんぴんをつくっ

わかいものがしらなど役員の改選をした。
わかいものがしらなど役員の改選をした。
おおいしょは、昼間から宿にあつまってきた。議事会(会議)がはじまるのは三時ごろからである。会議は、むらの一年間の行事についてとか、のあと、米をといで、ふかしたり、あずきをにたりして、もちをついた。またごちそうをつくった。男家だけで準備をして女家は無関係だった。年輩の人たちは午後からあつまってきた。議事会(会議)がはじまるのは三時ごろからである。会議は、むらの一年間の行事についてとか、のおと、宿の庭でわかいものがしらなど役員の改選をした。

ち帰った。 ちは、その場で食べたが、食べきれないのは家へも加して、飲んだ。もちは、その場で食べたが、食べきれないのは家へもには全員参加したが、二次会には、一戸一人ずつ(あるいは希望者)参製は、一次会(一番契約)と二次会(二番契約)とあった。一次会

と(いたずら)もできなかったという。(水沼相間)意を与えた。そのために、このむらのわかいしょは、うっかりわるいこ一人、みんなの前によびだして、ふだんの行動について、いろいろと注製約の席で、わかいもんがしらが、わかいしょにお説教をした。一人

年間の相談事を決めたり、青年の非行があると呼んで注意する。(上村)ムコとか他村から来た新加入の人は、酒一升もって挨拶する。ここで一二月十一日、一戸一人大人の男が出るのが原則である。宿は順番制、

合で、二口の者もいる。五合で十五個の餅を作り配る。(二区)このケイヤクの前日にケイヤク米を集め、ケイヤク餅を作る。一口五行事等の予定を決める。例えば橋かけ、十二講、庚申講の宿を決める。る者は各耕地毎で十軒か十五軒の者で、その年の耕地内の各種の当番、毎年二月十一日に順番で宿を受けもちケイヤクという集会を開く。集

決める。(二区) 寄合い 二区全体の毎戸一名づつの集会で正月三十日に行なう。決めることは区の年中行事が主で、共有林の手入れ、道ぶしんなどの時期を

等に金品を負担するので席も平等になった。(川浦) 等に金品を負担するので席も平等になった。(川浦) 戦後なくなった。昔は大尽さまが何かという時に負担をしてくれていたがころはそんな所じゃあない」と怒られたもので、かたく守られていたが上座につき、ケイヤクのときも、適当な所に座って「お前の座ると体が上座にの順 村の人の集まる席では、座席の順がきまっていた。えらい座席の順

までの上下三つ違いの男だけの仲間で、皆結婚すれば消滅する。(長井)トモコー御祝儀の時、トモコが先だちで世話をやく。徴兵検査ぐらい

してはたらく。(川浦)組が大きい所では四人くらいのところもある。冠婚葬祭の時の世話人と組が大きい所では四人くらいのところもある。冠婚葬祭の時の世話人とトムコの世話人は輪番のようなもので、二〇軒くらいの村では二人、

みはなかった。なお、トモコの人たちのことを葬式のときは、ホウバイ組の人たちに、身内と同様であるが、トモコの場合にはそれほどの親しいけなかった。婚礼の場合は、むかしは、隣組の人だけではまにあわないは、いわばお他人様の関係で、婚礼の場合などでもたのまれなければ、いわばお他人様の関係で、婚礼の場合などでもたのまれなければ隣組の人たちとのつきあいに、うちわ同様であった。トモコのつきあ隣組以外人がトモコで、婚礼の場合とか、オテンマの場合などにいう。

とよんだ。(水沼)

トムコ(トモコ)とホーベエトムコというのは、今でいう隣組のよ

いは嫁さんを迎えに行ったりした。話をうたったり、鶴亀のかざりものをつくったり、竹をたてたり、あるつとはいわない)トムコの人たちが、三々九度の盃のときに立合ったりつとをトムコという。その中に親類のものがいれば、除外する。(トムご祝儀のときに、隣の組の人を手伝いに頼むが、この場合に、その組うなもの。隣組のうち、自分の属しているところは単に組という。

だけにかぎられた。 だけにかぎられた。 は契約のときで、このかたちは場所によって若干ちがうが、親が契約のは契約のときで、このかたちは場所によって若干ちがうが、親が契約のは契約のときで、このかたちは場所によって若干ちがうが、親が契約のは契約のときで、このかたちは場所によって若干ちがうが、親が契約のは契約のときで、このかたちは場所によって若干ちがうが、親が契約のは契約のときで、このかたちは場所によって若干ちがうが、親が契約のは契約のときで、このかたちは場所によって若干ちがうが、親が契約のは契約のときで、このかたちは場所によって若干ちがうが、親が契約のは契約のときで、このかたちは場所によって若干ちがうが、親が契約のは契約のときで、このかたちは場所によっておいる。

のもの) でしたきなどを受持った。(ここでは、棺をかつぐのは、身内ちの仕事としては、このほかに、葬列の飾りつけをしたり、棺桶づくりちの仕事としては、このほかに、葬列の飾りつけをしたり、棺桶づくりいう。葬儀のときに、穴掘りの役は、庚中組の人たちがつとめるところいう。葬儀のときのトムコにあたる組のことを、葬式の場合にはホーベエと

ホーベエのほうは、火葬になってからなくなったという。(水沼)になってから、このトムコの制度もなくなったという。なお、トムコは、ここ数年前まであった。結婚式場がつかわれるよう

のもの)で手伝いあっていた。そのあと、近所の人が手伝うようになっむかしは、葬式の場合でも、祝儀の場合でも、むら内の親戚同士(マケ隣組の人たちに手伝いをたのむ。これをホーベイでおねがいするという。ホーベイ 仏事の場合、隣組単位では人手が不足するときに、べつの

た。

てきた。一七日たつと家へもちかえった。(水沼中尾)て、穴の位置をきめた。穴掘りにつかった道具は、一週間は墓場へおい中原では、仏様に一番近いものが穴掘りをする。槌主は、墓場へ行っ

二、共有地・共同作業

てに、はの目で「告日の「告日」」は、地方であるに、に合って引むてそれ以前の者は二千円、以後のものは一万円を払って会員になった。もある柏木山にある。この所有は、終戦(昭二〇・八・一五)を境にし、大字三之倉の共有山は台帳面で一四〇町歩というが、実際に二〇〇町

山林もあり、これは一人平均一町歩位になっている。(一区) れば慰安旅行等に使った。右共有山とは別に国有地を借りて二官八民のれば慰安旅行等に使った。右共有山とは別に国有地を借りて二官八民のかわりに権利もなくなる。この地所は全体で一町五反くらいであり、所かわりに権利もなくなる。この地所は全体で一町五反くらいであり、所とか刈払いの義務を果させ、逆に他所に出て行った者は義務がなくなる大字水沼の相吉・島山の「共有山」は、他所から来住した者にも間伐

「おれがつくるからやらせてくれ。」といって開懇し、作っているうちに、共有田約四畝ある。もと川原の荒地であったものを紺屋(屋号)で、

がなくなった。

である。 である。 である。 が出口になって、餅投げも自然にそちらに移行したの時は米を集めて餅をついて投げたが、それが二月のワカイモンゲイヤクしている。餅を投げるのは、もと十一月十五日の秋葉様の行事で、そのの米は二月十一日のワカイモンゲイヤクの時、餅について投げることにだんだんいい田になったので小作料として米一斗を出すことにした。そ

離れると権利がなくなる。いた日から権利が生じて右のオテンマ等にも出されるし、この部落かられる。たいてい八月七日前後の日曜日があてられる。この部落に住みつ大部分杉が植えてあるので、その下刈り等は、年一回オテンマで行なわ大部分の山林は二か所で約一町歩あり、農事実行組合が管理している。

(第一区相吉)とも、それは仕方がないことだからその個人に還元することをしない。もする。最近では伊豆へ一泊で出かけた。そうしたとき、都合で行けなくもの修覆などの村のために使われるが、また村中で慰安旅行に行ったり堂の修覆などの収益は個人分配をしないで貯金しておく。そして公会この山林からの収益は個人分配をしないで貯金しておく。

していた。柏木山に杉林が百二十町歩。大神宮山に同じく杉林が三十町歩を所有

売って一人当り二十七万五千円づつの分配を行なった。(二区)の各一部分の人たちの所有であったが昭和四十六年に開発のため山林を大神宮山は二区のみの所有であったが、柏木山は、二区、一区、四区

八区は新しくできたので共有山をもっていない。 川浦の一区から七区までは、何らかの形で村の共有山をもっているが

三区 現在はもっていない。用水権争いで裁判さわぎになり、共有地二区 台帳面積では二町歩余、実際には七~八町歩になっている。約一〇町歩

三町歩ほど

稲荷山に一町歩、四、五区合同で、八○口四○町歩という山村

枯木沢の山を二五人共有山ということでもっている。

営林署からもらって(借地)共有山とし、植林して杉山になっ

ことになっている(川浦ー矢陸一区) 共有山の権利を与えるが、村を出て行く時はその権利を放棄してもらう 共有山の権利 区の住人となった者は、一日日当分の拠出金を出すと

たことがある。しかし、無権利者は、山の下刈り等には参加させていな 時期に、そうした人たちを仲間に入れてくれという抗議と要求とをうけ で増えた人たちは共有山の仲間に入れないことになっているので、 いので権利を与えることはなかった。(川浦―西ケ渕) 共有山をもっている者は、昔からの人たちである。ところが、地分け ある

等である。出不足として一日二、○○○円ぐらい。(第一区相吉 村仕事 オテンマという。山の下刈り、間伐、公会堂の修覆、 道普請

員会である。(一区) 秋二回である。共有山の下刈りは昔は区長が指揮したが、現在は管理委 オテンマ 村仕事のことをいう。道普請はコーチごとに行なう。春、

きには、むらの山持のところへ材木をもらいにいってきて、土橋をかけ れる程度のもので、丸太を組んで、ただ針金でしばり、その上にたる(細 い丸太)をならべ、その上に杉の皮をしいて、土をのせたものであった。 区長から出てくれという命令があって出た。橋は、荷車やむらの人が通 のかけかえをした。一戸から一人ずつ出た。これをオテンマといった。 た。一年に何回か橋が流されたが、その都度むらの人は人足に出て、橋 土橋は、大雨のあととか、台風のときなどには、よく流された。そのと 水沼地先の相間川と烏川には、むかしから土橋がかかっていた。この

> もらったりした。 この費用はコーチから出してもらったり、役場から多少の負担をして

まで何日でもでた。オテンマに出ない場合には、出不足をとられた。半 永久橋ができた昭和十六年ごろまでは、橋のかけかえのオテンマに出た。 このオテンマには、どんな忙しいときでもかならず出た。 橋が仕上る

オテンマにはつぎのようなものがあった。

た。一回三~五日もかかった。 橋は、ほとんど中郷と中尾の二カ村でかけた。人足には一戸一人ずつ出 である木を拾いあげてきた。それをつかったりして橋をかけなをした。 流されると、むらの土木委員が、川べりを見てあるいて、「水沼」と刻ん 橋は木橋であったので、

一年に三回も四回も流された。

橋が

橋は巾がせまく、車は通れなかった。橋は人が通れるくらいの巾であっ

人が通れるところは馬も通れた。

これには女はでず男だけがでた。

二百円もってでた。 衆がでた。最近は女衆もでるようになった(中郷は女衆がでた場合には 道路普請、彼岸のあき口ときまっていた。一人一人ずつ出た。大体男

人ずつ。(水沼中尾 共有山の下刈り、これもオテンマの一種であった。男がでた。 一戸一

た。理由不明で出ないということはなかった。出不足金をとる必要もな が強く、それを守っていた。出られない時は近所の人に伝えて了承を得 成人が出ることになっており、オテンマには何が何でも出るという意識 村人の奉仕作業で区長も関係すすが班長が采配をふる。一戸一人男子

五月頃の田植え直前に

非農家を問わず全戸出る。

共有林の植林 下草刈り、枝打ち

公民館の清掃

ンマだから出とくれ」と班長がふれを出す。(岩氷)雪かき 学校林、神社の修繕等もオテンマでやる。「明日雪かきのオテ

た。人が渡れる程度のものだった。橋を掛けた。杉の丸太三、四本の丸橋で、流される度びに何度でも掛け橋掛け、烏川に三区と二区で通行出来るように、二区の各耕地毎で各

橋はその年二度掛けるようなことは希にしかなかった。十月一日になると本橋といい馬も通れるようなよいものを掛けた。本

オテンマで仮橋や本橋を掛けた。十月以降に本橋を掛けた。それまでは橋木山 烏川に橋を掛ける材料を取る山が決っており、橋木山という。山が多くあるので二区の人たちが掛けることになっていた。(二区)材料は共有林か山林を所有人より出してもらった。三区に二区の人の

ここの世話によって人が日直にこの長人この人女がて夢そここのよう家・分家・兄弟間や親しい間柄でやる。田植えが中心である。エエー血縁関係を主として地縁関係も加わった形で行なっている。本

仮橋であった。(七区)

ここ二・三年で急激に普及し七・八割が機械で田植えをしている。(岩い。六・七年前に手押しの機械が入り、四・五年前から動力のが入った。田植機械が入ってから田植え行事は一変し最近はエエもほとんどしな田植えを終えて、三時頃にはあげて飲めや歌えの酒盛りをした。エエや世話になった人が田植えに必要以上の人数が大勢来てたちまち

三、階層

一本を携えてオチカズキをする。(一区)村入り 他村から入って来た人をワラジヌギといい、村契約のとき酒

よそから引越してきて、

むら入りをする場合には、

むらのおもだった

あたらしくむらに住むようになった人は、共有財産の仲間には入れてむらの会合のときには酒を一本ぐらいだして、あいさつをした。人がつれて、隣組をまわった。そのときには、手拭などをもって行った。

人のところでお世話になり、この人に身元保証をしてもらって村入りしれらじぬぎ(他所から来た者がこの地に入って住むには、だれか村のもらえない。(水沼)

てきた。

て寝てしまう。こうした生活をしていたが最後は実家へ帰ってなくなっ 間か、居炉裏の下の座敷で布団一枚くらいで寝てしまうか、くず小屋いっ ぱいやってくる。「一本いくらに売るんかね」と聞けば「丁づら」という。 竹箒を作り、二・三本かついで売り歩き、売れれば帰りに居酒屋でいっ 多少仕事をすれば十銭と小遺をやるが、いつも裏の竹藪から竹をとって 人だというが五十歳過ぎの頃家に来た。家の仕事もほとんど手伝わず、 初めまで〝おけらのためさん〟という年寄が家にいた。この人は川浦の この形はその夫婦一代限りで、次の代になると手伝いもしない。(本丸) あった。そしてそこから主家に通い、嫁を近所からもらって世帯をもつ。 ているのが普通であった。条件のよい場合は家を作ってもらうことも ともある。作男は売られたのも同然で、親が一年分の給料を先に受取っ から十五銭くらい貰っていっぱいやってくる。食事は家の人と同じもの 「丁づらっていくらかね」と聞けば「十五銭さ、そんなこと知らねえん 奉公人 奉公人の半分位は年期奉公で、一年いくらとして更新するこ おけらのためさん等の居候 おっかあおけらだな」と答える。小遺がよくよくなければぢいさん 衣類など年寄の古着などをもらって着る。夜は馬屋の隣の板の いつの頃からはっきりしないが、 昭和の

も本名を知らなかった。

他の家で仕事があるうちは他所へいっているが仕事がなくなると家へ

畑仕事なども手伝っていたが十数年もいてここでなくなった。来て暮していた。朝は早起きで冬などよく朝食前に川原で薪をきったり、

をよくやってくれた。

・
なお、それ以前では、わし(野口佐吾平―明治十八年生)の学校へあなお、それ以前では、わし(野口佐吾平―明治十八年生)の学校へあなお、それ以前では、わし(野口佐吾平―明治十八年生)の学校へあ

(野口佐吾平、まつの談による。関茂) こともあるので、こうした社会福祉的役割をも果していたのであろうか。昔から代代のしきたりのようであるが、この家は昔名主をやっていたく行けば泊めて貰えるというので宿のない人が時々来ては泊っていた。こうして居候や旅人、行商人、針医などもよく来て泊った。"連取の家』

には、立派な青年が残っている。(長井)へあまり出ない。よその地区は、かたおし町へ出てしまうが、この地区へあまり出ない。よその地区は、かたおし町へ出てしまうが、この地区青年町」お祭りは、男女の青年が中心になる。余興などをやる。よそ

で、四十二才になると用なしである。(上村) 十五才から若い者のケイヤク会に入る。大人は二十五才~四十二才ま

いで鳥渕全体の大会をやって代表を選ぶと、川浦小でもモチ米のオカユ青年会の会費で、青年だけの運動会をした。先ず川浦だけでやり、次大正五年ころ、処女会から女子青年会になった。(川浦)

会に参加した。(川浦)を煮て合宿をした。こうして里見村で対抗戦をしてから安中へ出て郡大

で、ほとんど歩いてまわった。泊りで磯部と前橋との二泊くらいだった。ぐりというもので、おむすびの大きなのを腰にぶら下げて、わらじばき青年会で旅行をしたことがある。上野三山めぐりとか、上野十二社め

(川浦)

あり、ハナの一割くらいの見当で寿司と酒が出た。ダを書いてはり出す。これがハバッ気でハナを使う。またハナゲエシがをもらった方ではハナを公表するために実さいの額の一○倍くらいのフハナー祭りの芝居などがあり、招待されるとハナを持って行く。ハナ

らないが、にぎやかにやった。(川浦)ハナをもらってもハナゲエシやその他の経費で、収入はいくらにもな

が楽しみなものだった。(川浦)謡のけいこをした。毎日けいこをして、十四日の日が謡い初めで、これ謡い初め 昔は、正月の七日になると青年たちは世話人の家に集まり、

「同窓会」青年会というものができなかったころ、小学校を卒業した者 「内でジャガタラをつくり(約一反歩)、労働して積み立てをしたりして りだった。卒業生が会員になるのだから仲間になる手続きもなく「よし りだった。卒業生が会員になるのだから仲間になる手続きもなく「よし よし」で通り、川浦でまとまっていた。会費は、月五銭くらいで、畑を よし」で通り、川浦でまとまっていた。会費は、月五銭くらいで、畑を よし」で通り、川浦でまとまっていた。会費は、月五銭くらいで、畑を がらとトにならないうち(結婚する前)を会員として同窓会というのを 活動した。(川浦)

ポンプには一〇人くらいついて操作した。(川浦)の現場についてもすぐには手が出ないので、外の人が手伝ってくれた。いた。昔の消防は、車で曳いて行くので途中でくたびれてしまい、火事いた。昔の消防は、車で曳いて行くので途中でくたびれてしまい、火事が防団員 兵隊検査が終った人がなる。年令に制限はないので、長い消防団員 兵隊検査が終った人がなる。年令に制限はないので、長い

中年会 青年でもなく、婦人会からは卒業しているが老人会には入れ

ない中間の人たちがつくっている集まりが中年会である。

なので、西ヶ渕を境にこれより上の方を第一会、下の方を第二会と二分 現在の会員数は百二十二名である。八区は他の地区の二、三倍の大世帯 通称老人クラブである。 している。世話役は区全体で十二名をおき、会長一名、副会長は男女各 名おいている。任期は二年で各年度かわりに選出する。 戦後に出来た親睦団体で十七年前に結成された。外向きには 入会資格は六十五才以上で、会費は年額三百円、

行事としては年に一度の定期演奏会のほかに各種のものがある。(川

はたいてい老社会の役員がこれを売り歩いている。(川浦 協力要請がいろいろあるくらいで、例えば、 いっさい泣きごとは言わぬようにしている。現在までは却って区からの 連会、村八区全体の連合会、各区老壮会となる。区とは独立した組織で、 たてまえとしては高崎市と群馬郡を含めての地区 村からの指示での商品など

の寄贈(男子はほうき一本、女子はぞうきん二枚)、講習を中心とした老 人学級の開設、春の記念植樹 (桜並木や本年度の白樺など) などがある。 老壮会の行事 春秋二回の研修旅行と村内施設の見学、小学校への手づくりの品物 老壮会の恒例の行事としてはおおよそつぎのものがあ

兼ねて研修する。五十年度の春期は赤城山研修旅行を行なった。 である。 老壮会の研修旅行 ほかに対うちの施設などの見学もある。最近ではゴルフ場を見 老壮会の恒例の行事の一つで、春秋二回、 日帰り 旅行を

状がもらえる。 民館で各種講習会などがもたれる。 老人学級 老壮会村連合会の恒例の行事の一つで、 (川浦 講習会に皆勤すること履習証明の免 年に約十回中央公

もそうだった。 (峠)少林山・伊勢・成田・一宮等の講があった。

とはなくお札を配るだけである。 あとの四年は行かないし、一人ずつなら五年、一組六人以上の場合は年 神楽をあげ、坊(決っていた。)に泊ってくる。帰ってきてから特別なこ に一~二人で五年とするなどいろいろやった。お参りしてお札をうけ、 に行った。五年に一度と決っていたので、一ぺんに五人行ってしまえば 榛名講の場合、五人から七人くらいが一組になり、年々一名ずつ代参

いした。帰着するまで家族の者は蔭膳をすえた。帰着するとオカリヤに 集まってもらって赤飯をふるまい水杯をかわした。フクベに水を入れ、 行って腰を入れ、後から燃してしまう。 それから自宅に入りお祝いす 印籠を下げて出発した。六十日もかかったという。伊勢につく日にお祝 伊勢講の場合、わらのオカリヤを事前につくり、 前日には近所の人に

り、これ等は、めいめい誘いあって行った。(一区) 代参でないものに水沼の蓮華院の観音講、三之倉全透院の地蔵講があ

盛りにして、その晩のうちに食べてしまう。米三合分ぐらいを一ぺんに おせえ(おかず)は宿ブルマイにした。 飯をお椀に箸の丈ぐらいにお高 遠い所へは、毎年も行っていられないので、講中で代参をたてた。(川浦 盛って食う。 庚申マチ 参詣に行く講には、伊勢講、 戦前は庚申祭りをした。組んで、米一升出しにして集め、 御岳講、一之宮講、榛名講などがあった。

庚申様は運の神で、 宿で一升ますにくじを入れて引かせて、宿がいく日に当るか決める。 宿が三回続くと、餅ついて酒買ってお祝いをする。



撮影) (佐藤 清



庚 申 (下平) 様 (佐藤 撮影) 清



(上野 撮影) 勇

のは一班だけで、

春秋集っている。(相満)

四・五~十戸位が一組となって、

た。四班とも画いてもらい、

西ヶ渕に三組の講があり、

庚申講は、昭和二十五年頃、浪花節語りの金子金竜に軸を画いてもらっ

一本五百円くらい礼をした。今やっている

沢山盛ることを、庚申講のようだという。(七区

一組が五、

六軒で祭っている。

お高盛りの

のを決める。 の日にする。

用の膳がある。今は三百円ずつ出し合って酒を飲む程度である。(上村) ンニャクの白あえを入れ、豆腐汁の精進料理で御飯をたべる。講には専

この夜、米を五合ずつ集め、オヒラに厚揚げ、テンプラ、オツボにコ

クジの結果は紙に書いて柱にはった。今は順番である。 宿はオクリといって、十二月の講の日にクジを引いて来年 なっているが、実際は四~五月(春)十一~十二月(秋)のカノエサル

毎月カノエサルの日に行なうことに

らなかった。上手なオタカモリをするには、 ものを食べなければならなかったから、皆涙を流しても食べなければな の掛軸があり、その庚申様には高足膳で供えた。大食会みたいなもので、 チョン汁・ナイリ(菜をいためたもの)沢庵のシラエ等を作った。 ナは全く使わない。 さと同じくらいになった。(第一区) それを中心にして飾りつけるようにして盛って、その高さが、親椀の高 始めは普通に食べたあとしまいにオシイと称して親椀にオタカモリした 広い座敷のある家をまわり番。米三合ぐらいを持ち寄り、五目飯、 番が当ってもやらないし、呼ばれてもいけない。汚れるという。 当番と呼ばれてくる人は一日中サカナは食べられない。 コーチごとに行なった。秋十一月から十二月ごろの庚申の日。 十二講、天神講日掛無盡、などがあった。(二区) 庚申溝ではカノエサルの日をホントウという。 親椀の中央に箸を立てて、 お産のあった時には 料理にもサカ ヤドは

天プラや煮モノで酒をのんだ。 酒は昔からのんだ。

が回ってきた。 ん、丸屋、ボウヤ局長さんなど)でやっているので、二年に一回は当番 前は春二回、 秋二回で計四回やり、 元村と下平の八軒(丸山太茂さ

花輪では、昔六、七軒、 当番をきめる場合には、 今は六軒でやる。 今は三軒でやっている。鉄火では昔十二軒で オクジを一升マスに入れてひく。 (第六区)

庚申様には秋、 新米を供える。

ても体に害がない。(第六区 オヤワン山盛りもって、 食べてくれ、食べてくれという。翌日になっ

すよすといいながら、 ものを食わせる。昔は、まめに箸のたけほど盛らしたが、これを上手に どっさり出す。さんざん食った最後に、オシイといってお高盛りにした かずは精進料理で、秋にはニンジン、ダイコンなど畑のものを調理して たお碗である。飯は八分め位によそったものを次々とおかわりする。 つったあと、宿のもてなしを受ける。お膳は据え膳で、食器は木で作っ 番の家に一戸から一人ずつ集まり、掛軸を床の間に掛けて、庚申様をま 諸道具いっさいの入った箱を、前の当番の家に受取りに行く。夕方、当 番はみざる、きかざる、はなさざるを描いた掛軸や瀬戸や木製の碗など て、最後の講のとき、そこで翌年の当番をくじで決める。 在でも全戸が加入している。西が渕では、その年の最後の宿を年宿といっ から十人位で一組を作り、 なく、だいたい二月毎で、 講中が当番の家に寄っておまつりする。現在では、まじめにする所は少 いうわけか重複しない。矢陸では、一戸がかならずどの組かに入り、現 庚申様は運の神様で、猿田彦の変身した神様ともいう。庚申の日 このおしいもかたちばかりのものになっている。酒は出さない。よ たいそう難しく、下手な盛り手は握ってのせたりする。現在 家がまだすんでないからといって、 年に少くとも三回はする。西が渕では、六人 全体で四組ある。 地神講の組などとは、どう 当日の朝、 なかなかやま の夜、 お 当

ない。どの家も、お前の所で終わったといわれるのがいやらしい。(川

ぬので、 しまったが、相互扶助ということでもない。まだ一度もおろしたことは 金帳があって、昔は講のたびに五銭くらいずつ出しあったが、まとまら めなどでご飯を普通に食べたあと、オシイする。酒も飲む。中原では貯 の間にもう絵も字もわからなくなった掛軸を掛けて地神様を拝む。にし ぞれの家の主人公または代理人が米を持ち寄って当番の家に集まる。床 岸の社日に行なうこの日は田や畑に入ってはいけない。この日は、 庚申講の組とは違う。まれには同じものもある。お祭りは春秋の彼 川浦 現在は百円ずつ集めている。 地神講は田と畑の作物の神様である。地神講は部落毎にある 何のために集めはじめたか忘れて それ

軸を拝みごちそうを一同で食べる。三人組から十人組ぐらいまであり、 「宿まかない」といい宿は交代で行なった。 地神講は百姓の集りで、 春、 秋の社日の前日に集まって保食大神の掛 (七区)

いとされ、 百姓の神で、 野菜は前日に取ってくる。(上村 彼岸の中日、小豆粥をつくる。この日畑に入ってはいけな

祀る。それは世話人が交代して渡すときで、二月の己の日である。(上村) 己の日待 女の神様である。水車の組が祀り、年一回掃除して、その夜に

食事を楽しみにやる。元は柄杓をあげた。(長井) 稲荷神社の傍にある。安産を願ってやる。 宿は順番で、 夜の

神講は以前は三日、今は正月にやっている。念仏講 産泰講は、 今は若妻会と名を変え、ただ寄って飲み食いしている。 山の神はない。(相 天

を作り供える。 では簡単に拝んであとは伊香保などに遊びに行く。(上村 が公会堂あるいは順番性の宿に米その他の材料を持寄って、 産泰神社は各班にある。カケジがあり、 またゴへイを切りかえ、ノボリを立て、 毎年三月二十八日、 掛図を拝む。 ゴモクメシ 若い女性

三月二十八日、部落別に行なう。六、 七人が一組となり、 各人二合ず



撮影) 石宮が下村の稲荷様のそばにあ

る。米を三合ぐらいと葱、人参 をかけて語り合い、ごちそをし た。終戦まであった。(二区) 三月二十八日に部落ごとにす 産泰講は若い嫁の集りで掛軸

カガミ (神棚) とサンテイ様 (写 等を持ちより、 ヤドでは、ローソクをヤドのタ ヤドはまわり番

を唱えた。ヨイマチをして、 るおかげで、ここには産で死んだ人はいない。(一区) 燈明をあげる。それが燃えつきるまでに赤ちゃんが生める。産泰様があ の燃え残りローソクを産婦が借りて行き、産気づくとそのローソクでお 春秋に亀沢コーチ・大友コーチのお堂を回り番に回って念仏 白強飯をふかし念仏玉としてくれた。菓子

真)にあげて拝み、どちらのローソクも燃え残りを少しとっておく。こ

など出したり、酒も買って飲んだ。(亀沢) 二夜様・三夜様 毎月まゆだまを作ってしんぜた。しんぜたものを食

べると、お産が軽い。(長井)

するようになった。(七区 おひまちを信仰していた。現在はいろいろの講があるが一軒一つの講を 太子講 木びき、石屋などの職人が祭った。山仕事をする人は十二様、

らいの駄馬だけれど、力の強い馬がいたから、部落では五、六十頭も馬 観音講 今度の戦争前までは、農業をやっていれば、どの家も二頭く 木挽きや石屋は、 聖徳太子様を信仰して、太子講をやった。 (III 浦

がいたことになる。馬のいる家では観音講をやった。(川浦

め馬方だけが集ってよく観音講だといいごちそうを作って食べた。七区) 埼玉県上岡観音にお詣りする。馬を飼う人達の講である。(上村) 昔は一軒で二頭も馬を飼っており炭を運んで馬方が多かった。そのた

は宿の者が持ち廻る。産泰様の てたべる。宿は順番制で、 つ米を持寄り、五目飯をつくっ

そうを受け、オミゴク、お礼をもらってくる。翌日太太神楽を奉納して 五年に一回廻ってくる。山水様(御師原田嗣司)に泊る。一泊してごち 榛名講 代参講で五人が一組、 四月二十五日一人が代参する。従って

帰る。(上村) 峠講 五人一組の代表。四月下旬に行く。これは一般化してはいない。

(上村) 中之嶽講 四月の農繁期に入る前にお詣りする。(上村

である。(上村) 一の宮様の講 四月十五日頃養蚕豊作を祈願する。泊りがけの代参講

古賀良講 坂上村にある。大きな石宮で十一月十八日にお詣りする。

(上村)

を送ってくる。(上村) に泊った。十年程前までのことで、今は来ないでお札、筒粥、おみくじ 戸隠講 伊勢講 御師がきてお初穂料を集めた。

彼等は宿を決めてあってそこ お伊勢様にお参りする費用の積立てをしていた。(上村

ある。(上村) は「奉納天満宮」と吹き流しのような紙のノボリに書き、これを神社に してゴモクメシを作ってたべたり、お菓子をたべる。小学校一年~中学 おさめる。一月二十五日がハジメ天神、十二月二十五日はシマイ天神で 校三年生の子供が参加する。宿は卒業生のいる大きな家を選ぶ。子供達 天神講 十二月二十五日、子供はお金を各戸から集め、親達が世話を

五目飯を天神様に供える。その時「奉納天満天神宮」と書いた紙を竹に 寄せで、五目飯を作って食べる。卒業する生徒の家で宿をする。御神酒と 天神講は一月二十五日にやるのが昔からの習慣。 油・醬油などを持ち



様 (下宿) 清 撮影)



(下宿) 撮影) 清

のごちそうはよけいにうまいもので

食えばオチラシ(散

会食は楽しみなもので、他人の家

さげて持っていく。 部落ごとにやっている。(第六区

家でやってくれる。 を使う例もある。 来春、幼稚園に出る子どもを招くきまりになっている。男女一緒にやる。 からは当番の家で、 の家に寄って、子どもたちがそろって天神様にお詣りに行く。 して楽しく遊んだ。子どもたちが作るということはなかった。 十二月二十五日にするのが多い。ドンドンヤキをする組が中心になり 天神様は子どもの神様である。正月二十五日には、 年長者の家が順番にしているが、 公民館でやるときも、 五目めしや甘酒などのごちそうになり、 料理などは上級生の家や近所の 公民館ができてからは、そこ 金を集めてどこか かるたなど もどって (川浦)

ごちそうは、 出し合って、 米二・三合、いも、 宿になった家の主婦の考え次第だった。 相談できめたごちそうをつくってもらったが、それ以上の にんじん、ごぼうなどのやさいと、お金若干とを

棒につるして、 さまにお参りして来てから会食をした。もとは、 子どもたちは、 天神さんは各小字にみんなある。 全員で参拝して来たが、 朝から宿の家に集まってにぎやかに遊んでいて、天神 現在はオサゴを持って行くだけ のぼりをつくって篠の

競争で食べた。

天神様の内部 (佐藤 三峰講、 び方になれていて、司会が出て、 会)にした。最近の子どもたちは遊

泊ること

歌

生産に関する講 直接生産に結びついた講には、 講などがある。 はなかった(川浦 ことをして楽しんでいる。 謡曲などの歌をうたい、いろいろな その他十二講、 善光寺講、 地神講、

産泰講、 成田講

天神講

(上村)

太

のが、こちら側に流れついたのでそのまま祭ってしまったものである。 子講などがある。 社殿としたのである。(第一区) いま境内にあるインキョサマという石宮は、当時のお宮で、その後今の で五七人死んだと伝える。その際、 川木 大水が出たあと、川へ流れて来た木を捨いに行った。 寛保の水害のとき鳥川畔にあった島山は、僅か五軒残っただけ いずれも現在なお行なわれている。(川浦 今の諏訪神社は、もと綱取にあった 見つけた

くる。 ていく。 もらいに行かないと、その土地の所有者のものになった。(二区 るものは手が出せなかった。又、私有地内に留ったものは木の所有者が 人が川木の上に石を置くと他の者は絶対に手をつけなかった。木印のあ ホケーブクロ でき事がした時にホケーブクロに米三升を入れて持っ ホケーで持っていくのが本当だけどそれの代りにする。 細かいメリンスの布をはぎ合わせてまるく作って、 麻の紐でく

深さで奉仕の仕方がちがう。 宇講や産泰講の時にもそれでまわって入れてもらった。 屋根替の手伝いには、 萱〇東、 現物で奉仕するが、 なわ○房ということだが、 その家との関係の (岩永)

ことはまったく知らない。(川浦)でとりきめたという話は聞いたことはなく、屋根替の講や無尽のような

ながら渕に入って来た。(第一区)の下がら渕に入って来た。(第一区)の下で、「本代の御子を舞いている」、「本代の側子にある十二渕まで行った。石上神社の獅子を舞い

その人は三年続けて丑の刻詣りをしたという。(一区島山)いつもオハリをしていた。で、どうしても願いがかなえられなかった。ところがお詣りの途中、榛名川に大きい赤い岩があり、その上で、女がした。夢の告げがあって、途中不思議なものをみればだめだと言われた。異人 昔、百人力がほしいと願う人があって、榛名山に丑の刻詣りを異人 昔、百人力がほしいと願う人があって、榛名山に丑の刻詣りを

主なる屋号 カミヤ(紙すきを遅くまでやっていた)タカバナ(もと主なる屋号 カミヤ(紙すきを遅くまでやっていた)タカバナ(もとないう)(一区)

カゴカキといい籠をかつぐ者がいた。草津まで九里をかついだ。(二区)山中(雑貨)亀屋(雑貨)芝木(酒屋)ごうしゆうや(酒屋)があり、た。現在の公民館の所)穀屋、安宿などがあった。店は矢口屋(雑貨屋)た)港屋(若い女を置き、離れの座敷があった)問屋(荷物の中継をした)港屋(若い女を置き、離れの座敷があった)問屋(荷物の中継をした)港屋(はたご屋)藍屋(草津街道の軍用宿舎だった)まるや(明治武蔵屋(はたご屋)藍屋(草津街道の軍用宿舎だった)まるや(明治

立、家 族 生 活

今は班別でやる。(長井) 一名のが、御祝儀葬式を持ちつ持たれつでやる。

家関係についていう。イッケというのも、大体マケと同じ意味である。マケとイッケーマケというのは、むら内の同じ苗字の家のこと、本分

する。イツケのほうは、いい例のときにつかうようだ。たとえば、あのイチマケだから、あんなやつがでたんだといういい方をイチマケといういいかたもする。これは、なにか都合の悪い場合にいう。

ながりだかはっきりしないほど古い)にイッケという。(水沼)のながりの新しい場合がイチマケで、つながりの古い場合(どんなつ

一軒だけあった。 一軒がけあった。 一軒がけあった。 一軒がけあった。 一手がは、(相由)上野・追川・戸塚等。(下久保)野口・依田・横尾。(田畑) 追川。(明神)上野・追川・戸塚等。(下久保)野口・依田・横尾。(田畑) 追川・戸塚等。(下久保)野口・依田・横尾。(田畑)

牌があるという。(一区) お名姓氏の中に氏神・禁忌作物等ほとんど認められない。が、内落合性氏の中に氏神・禁忌作物等ほとんど認められない。が、内落合に出たので、その後また作らなくなった。最近、地ばえ胡瓜ならよ婚が死んだので、その後また作らなくなった。最近、地ばえ胡瓜ならよ婚が死んだので、その後また作らなくなった。最近、地ばえ胡瓜ならよい、土着は寛永二十年と伝えている。また猿谷追川には、永録四年の位い、土着は寛永二十年と伝えている。また猿谷追川には、永録四年の位が死人が、内落合格があるという。(一区)

稲荷組の者は犬を飼ってはいけない。狐は犬が嫌いだからである。(下なっている。また分家はお祭りをこの組の中に入って一緒にやる。が異なっていても、塚越イッケはこれを祭ると共に、冠婚葬祭の単位とが異なっていても、塚越イッケはこれを祭ると共に、冠婚葬祭の単位と

幼時、そこを訪れるのにイヌクグリ(大戸についている小さい入り口)していたと言い伝える。話者の親戚に昔榛名町原の名主をした家があり、儀正しかった。その点、榛名町大林の名主様の家などいちばんきちんと玄関などから入ると、どなりつけられた。そして名主層間では対等で礼家格(昔は家格による差別がはっきりしていた。下層の者がうっかり)

て帰村した者などかわいそうなくらい小さくなっていた。(第一区)て、改めて玄関から入ったことがあった。従って村を追われて何年かたっから入ったら、「お前はそこから入るんじゃない、入り直せ。」と言われ

家の経済状態によってさまざまである。(第一区)り半分を三人で等分するといった具合であった。しかし、農地の多少、新宅 三人出す予定があれば、半分は長男のためにとっておいて、残

先は本家の近所でたいていは本家の地所うちである。(川浦) 分家 男のこが三人くらいあれば、一人くらいは分家に出した。分家

ども、戦後はむらに帰って農業をしている。(川浦)が多かった。すっかり離村するものは少なく、職業軍人であったものなが多かった。兵隊などでも終えると、近場の農家へ婿などに行くものるということは殆んどなくて、二十歳前後まで家で手伝い仕事をするの二、三男 昔の農家の二、三男は、小学校を卒業してもすぐむらを出

ある。(第一区) の場合隠居免として若干の土地を分けて出る。即ち隠居分家で多い。その場合隠居免として若干の土地を分けて出る。即ち隠居分家で嗣子がなければ同居する例も多い。また後妻の子と共に分家する場合が チャノミトモダチの女房をもらって新宅に出る場合もあるが、その場合屋号の家はあるが、これは隠居分家である。配偶者に先だたれた場合オー 原居 純粋の隠居はほとんどなくその例を知らない。インキョという

お勝手などの下働きをしていた。(第一区)あいのようにしていた。(今はそれほどでもない。)祝儀・不祝儀の際、ほどある。もと下男をしていて家を作って出してやった家で、親戚づきほどある。もと下男をしていて家を作って出してやった家で、親戚づき譜代。譜代という言葉は知らないが、話者の家にはそういう家が三軒

デエの墓というのがあり、仏だんの下に位牌が入っている。(川浦)た。上へ上がれない人たちで、明治ころまでのことである。墓地にもフダイドコ(台所)まわりは、フデエという人が十人ほどいてやってい

フデーだという。ワラジヌギをした人がフデーになることが多い。炭焼その家に奉公していた人で身上を持たせて貰った家を、あそこんちの

ことが多い。(岩水)

何をおいても都合をつけて手伝う。(上村) 冠婚葬祭は勿論、オオヤにいわれれば、あるいはちょっと声をきけば、をする。苗字は変らない。オオヤの忙しい時は、ワラジヌギが手伝う。ぐと、親子関係に入った。親はオオヤ、ワラジ親といい、親戚づきあいりラジヌギ コビキ、炭焼きなどの社会で、他所から来てワラジを脱

続くもので、本家、新宅の関係は変らない。族制・地分け・分家した家は地分けとして家代々その家があるかぎり

親威(婚姻などで結びついたもので、何代か後になると次第に遠くないう。)

おかみさんも、嫁さんに身上まわしをまかせることになる。 り、他人さまのようになってしまいにはないの年になったから、身上まれしをさせて、一応のくぎりをつけるということである。身上まやろうという程度で、一応のくぎりをつけるということである。身上まり、他人さまのようになってしまいにはなくなる。(川浦)

というので、自然に身上わたしをするようになるという。(水沼)おじいさんより、父親から小づかいをもらったほうが、うれしいだろうだろうということで、身上わたしをする。孫が学校へ行くようになると、孫が、おじいさんに小づかいをくれというのは、親も子もいいにくい

つかうこともできなかった。 つかうこともできなかった。「だんなさまにおあずけ申していた」といらって行った。むかしは、女衆は、旦那さんにくいついているだけで、らって行った。むかしは、女衆は、旦那さんにくいついているだけで、らって行った。むかしは、主人公が身上まわしをしていた。嫁がお客に

この辺で、ふつういわれている家族の私財には、つぎのようなものがあっ こういう中で、家族が私財をもつことは、なかなかむずかしかった。

づかいにした。

それをキュウデといった。 キュウデくずまゆは女衆の自由になった。それを売って、 女衆の小

やったりした。 はふんどしなど身のまわりのものを買ったり、子どもになにか買って 人によってちがうが、縫いものなどがあった。自分でとった金で、女衆 ては大変であった。ヨッコをするのはむずかしかった。仕事としては、 コをやれば、そのあとは自分の自由になった。それを旦那さんにとられ とをいう。余分仕事をすると、ヨッコとか、キュウデ仕事といった。ヨッ ヨッコ これがヨッコとか、キュウデといった。余分のことをやるこ

よってヘソクリをする人があった。これは悪い意味で、 クリをもっているなどとかげ口をいわれた。 ヘソクリこれはできなかった。金があるなしより、 あの人は、 その人の性格に ヘソ

キンチャク 袋にひもをつけてこしらえた。こづかい銭など、ふだん インキョメン
これはある程度の財産がないとなかった。

とで、たとえば、農閑期に、工事場へ人夫として稼ぎに行くような場合 てはわずかであったが、その金で浴衣を買ったりした。これをキューデ に、キューデ仕事といった。また、くずまゆを売った場合には、その代 できなかった。若いものは、必要あるだけしか、親からもらわなかった。 た。若夫婦が二人で、親に小づかいをもらっているうちはヘソクリなど 身上わたしをしない例が多い。 農家ではヘソクリはなかなかできなかっ らでてきたりした。それが、キュウデとかへソクリといわれた。(水沼) 必要なお金を入れておいた。としよりの人がなくなると、ねどこの下か 金は、女衆の小づかいにして、嫁と姑が二人で分けたりした。金額とし キューデ仕事ということばある。キューデというのは、余分というこ 家族の私金 身上まわしは家の主人がしていた。主人はなくなるまで

いうことばがあるが、これはついでということ。)(水沼 (この辺では、コデとか、ホマチということばは聞かない。ヨッコと

この石宮は関一族の先祖神とされ、寛永十二年銘がある。安産の神様で、 わんが所せましと並んでいた。 で茶を入れて供えていく。したがって戦前は石宮の前に茶渋のついた茶 礼参りにくる。そのときはいつも新しい茶わんをもってきて、小生生家 他の人が願をかけていく。無事安産できると子どもを背負って産後のお 戦前は近郷近在からの参拝者がかなりあり、着添人と妊婦が、 さどばあさまとお茶 水沼中郷に さどばあさま という石宮がある。 あるいは

にあったようである。 先祖神であるが、寛保二年の大洪水まで烏川よりにお堂があって、 は一○米程移動して堂の中にある) | 八条兵部関佐渡守息女」 という関の もともとこのさどばあさまは小生生家の稲荷様と並んであった。

戸があって良質の水があり、田畑のいたるところに茶が植えてあって年 んだことになっている。また、小生生家には干魃にも涸れないという井 渡守没年は永正十三年、 なお、さどばあさまと茶についてのはっきりした伝承はないが、 公家の未流ということで、 信州瀬戸から移り住

間を通して自家製の茶を使用していた。 お茶の好きなとりあげ婆さんがいて、 それが信心されるようになった

とも聞いている。

(関 茂氏報